



Until we are all equal



女の子たちの 日々の抵抗

「現実の選択、現実の生活」からの知見

技術報告書

謝辞

何よりもまず、本調査プロジェクト「現実の選択、現実の生活」にご協力いただいた女の子・ご家族・コミュニティ住民の方全員に、心より感謝申し上げたい。長年にわたり皆様からいただいた貴重な知見とご協力なしでは、本調査は実現しなかった。

本報告書は、Rosie Walters博士、Keya Khandaker博士、Kit Catterson博士、Hannah Colpitts-Elliott、Belén Garcia Gavilanesにより執筆された。

ベナン・ブラジル・カンボジア・ドミニカ共和国・エルサルバドル・フィリピン・トーゴ・ウガンダ・ベトナムのプラン・インターナショナル国別事務所が、全データ収集の監督を行った。長年にわたり、データ収集に多くの方々に関わってきたが、特に最近の調査での各国担当者である、ベナンのRoland Djagaly、ブラジルのAna Lima、カンボジアのVannara Ouk、ドミニカ共和国のOlga Figuereo、エルサルバドルのJulia Brenda LopezとCelina Rosales、フィリピンのRomualdo Codera Jr.とManny Madamba、トーゴのJoseph Badabadi、ウガンダのDavid Aziku、ベトナムのTrung Truong Vuに深く感謝申し上げたい。

編集・諮問委員会のAnya Gass、Mishka Martin、Zoe Birchall、Anna MacSwan、Melina Froidure、Jacqueline Gallinettiにも感謝する。

プラン・インターナショナル・グローバル・ハブのAdèle PavéとCardiff大学のMorgane DirionとHazel Y Choiに、データ分析への貢献に対して感謝する。

本調査は2021年以降、カナダ・デンマーク・フィンランド・フランス・ドイツ・アイルランド・スウェーデン・スイス・イギリスのプラン・インターナショナルの国内組織から多大な資金提供を受け、プラン・インターナショナル・グローバル・ハブが管理した。2021年までは、プラン・インターナショナル・イギリスが本調査の管理・資金提供を実施。本調査プロジェクトおよび報告書作成は、Cardiff大学とLearned Society of Walesからの資金提供に加え、Economic and Social Research CouncilとArts and Humanities Research Councilからのインパクトファンドにより支援された。



目次

謝辞	2
目次	3
1. はじめに	4
1.1 「現実の選択、現実の生活」	4
1.2 調査結果の概要と要約	6
2. 女の子の抵抗: 現時点での知見	8
2.1 世界の政治における子ども	8
2.2 メディアでの言説	8
2.3 開発言説	9
2.4 女の子自身との調査	10
2.5 調査方法	11
3. 女の子の日々の政治的行動: 分析的枠組み	15
3.1 政治・主体性・抵抗・力	15
3.2 女の子のエンパワーメント	16
3.3 枠組み	17
3.4 規範性に関する考察事項	19
4. 保護者の見解の変遷	20
4.1 ジェンダー平等かジェンダー本質主義か	20
4.2 暴力的な懲罰の行使によるジェンダー規範の強制	23
4.3 男性を世帯主として優遇する規範	24
4.4 保護者の男の子の行動に対する見解	26
4.5 女の子が認識している望まれない主体性	27
4.6 女の子の参加における重要な転換点である月経	29
4.7 規範への抵抗をしながら、同時にそれを強化する保護者	29
5. 「現実の選択、現実の生活」調査対象者の女の子の日々の抵抗	31
5.1 女の子の平等主義的主張	31
5.2 規範への問い直し	34
5.3 態度的抵抗	36
5.4 明示的抵抗	38
5.5 女の子の秘密の抵抗	45
5.6 顕在的行動的抵抗	50
5.7 女の子が変化を起こす	56
6. 結論	64
6.1 女の子の現在の抵抗の形	64
6.2 女の子が望む抵抗の形	65
7 提言	66
Annexes	70
脚注	84

1. はじめに

近年、何人かの女の子が、彼女たちの活動により世界的に注目を集めている。あらゆる女の子の教育を受ける機会を求めて声を上げたMalala Yousafzai・気候変動対策を求めて何百万人もの間を動員したGreta Thunberg・先住民コミュニティの正義を求めるAutumn Peltierといった、女の子やユース女性がさまざまな社会運動を公に主導している。しかし、大多数の女の子は依然として、公式の政治参加から排除されていることを私たちは認識している。彼女たちは投票ができず、政党への加入も認められず、彼女たちの多くは、関心を寄せる問題に対して言及することにも重大な危険が伴う。代わりに、彼女たちの多くは、必ずしもメディアの注目を世界的に集めはしない、非公式な形で、日々の生活の中で政治的活動を行っている。Yousafzai・Thunberg・Peltierと彼女たちの仲間が、女の子の政治的関与に光を当てることに成功したとはいえ、大多数の女の子が日々の生活の中でどう政治に関与しているかに関して、私たちは今もほとんど理解していない。彼女たちは不正義に対して声を上げることができるのか。彼女たちは不公平な規則に疑問を投げかけ、あるいはそれに従わないという選択さえとれることもあるのか。彼女たちはどんな変化を望んでいるのか。彼女たちのコミュニティの大人は、彼女たちの声に耳を傾けているのか。

本報告書では、プラン・インターナショナルが9カ国で女の子と彼女たちの保護者を対象に行った独自の調査に基づき、それらの問いを探求する。彼女たちが幼少期～思春期に経験した出来事・見解を深く掘り下げることで、自身をアクティビストと認識しているかによらず、「日々の」女の子が日常生活の中で非公式な政治的活動にどう関与しているかを理解する。

1.1. 「現実の選択、現実の生活」

「現実の選択、現実の生活」は、プラン・インターナショナルの調査であり、2006年に生まれた9カ国の142名の女の子の生活を、2024年に18歳になるまで追跡調査したものであった。それらの国々は3地域にまたがっている。具体的には、アフリカのベナン・トーゴ・ウガンダ、アメリカ大陸のブラジル・ドミニカ共和国・エルサルバドル、東南アジアのカンボジア・フィリピン・ベトナムである。長期的・質的調査である「現実の選択、現実の生活」は、女の子の日々の現実・機会・困難を理解する貴重な機会を提供した。彼女たちが幼少期から思春期にかけて経験した、ジェンダーステレオタイプや社会的規範、彼女たち自身の言葉で語った意見や将来への抱負を示している。

「現実の選択、現実の生活」調査の中核となる調査方法は、女の子と彼女たちの保護者に対して年1回実施された詳細な半構造化インタビューに基づく。彼女たちの出生から彼女たちが7歳になる2013年までは、インタビューは、対象者を彼女たちの保護者(通常は母親だが、場合によって父親・祖母・おば・彼女たちと同居し養育責任を負う他の家族)に限定して実施された。2013年以降は、調査対象者の女の子自身にも、描画や遊び等の参加型で年齢に応じた活動を採用したものも含む、年次インタビューを実施した。

「現実の選択、現実の生活」は、信念・価値観・期待に関して質問し、ジェンダー的な社会的規範や考えがどう形成・維持・時間とともに変化するのかを明らかにし、ジェンダー不平等の根本原因の理解に独自の貢献を果たしている。これほど長期間にわたって同一の子どもの集団を追跡した調査は極めて稀であり、女の子だけに焦点を当てたという意味では、唯一の調査である。彼女たちに直接質問することで、本調査は独自の形で、彼女たち自身の言葉で語られる、平等な世界をいかにして創出するかに対する意見・考え・提言を聞く機会を提供した。

本調査では、2021年に女の子が15歳になった時点で調査に参加し続けていた全9カ国の女の子とその保護者104名の意見を分析した^{1,2}。それにより、彼女たちのジェンダー不平等に対する意見が、幼少期から思春期にかけてどう変化していったのかを探ることができる。

1. 1. 1. 世界の女の子から学ぶ

育った環境は大きく異なるものの、「現実の選択、現実の生活」の調査に参加した女の子の多くは、幼少期～思春期初期に、さまざまなテーマで多くの共通した経験を有していた。彼女たちに共通していた点の1つは、それぞれの環境下で最貧困層の世帯、または最貧困層のコミュニティに属していたため、本調査への参加を依頼されたことである。したがって、文化的・文脈的な違いがあるとはいえ、彼女たちは特定のジェンダー不平等を似た形で経験しているようにみられた。

本調査対象者の女の子は、長期間にわたり時間的余裕が極めて不足していることが認められた。彼女たちは幼少期から母親のケア労働を「手伝う」ため、**重い無償のケア責任**を負う一方、彼女たちの兄弟には同様の責任は課されていない。そうした責任のため、彼女たちは学業・将来のためのスキル習得・友人と過ごす時間・自身の幸福のための時間が足りていない場合が多い。

調査対象の女の子全体として、包括的性教育(CSE)を受ける機会が欠如していることが判明した。保護者は女の子と性に関して話し合うことを避け、代わりに彼女たちの行動に厳しい制限を課していた。保護者と思春期の若者の対話は、**女の子の性と生殖に関する健康と権利(SRHR)と幸福の経験**という、重要な要素であり、社会規範の影響を大きく受けるものである。世界中の調査対象者の女の子の保護者は、月経の始まりを女の子から女性への即時的な移行と捉え、それ以降女の子の行動や性は厳格に管理されるべきとみなしていた。また、調査対象者の女の子は、**ジェンダーに基づく暴力(GBV)**は避けられないことであり、自らを守る責任を負う、と社会化されていることも判明した。11歳までに彼女たちの91%が何らかの暴力を経験したと報告し、彼女たちの68%が思春期初期には男性の暴力は「自然」または「そういうもの」と信じていた。

気候変動は世界中の女の子に教育を含めて、重大な影響を与えている。異常気象により彼女たちは授業を受けられず、農業や漁業での収入に生計を依存している世帯では気候変動の影響による生計手段の喪失・貧困の深刻化が起きている。調査対象者の女の子は、保護者が学費の支払いに苦労したり、有償労働に従事させるために女の子を中途退学させたりしたことを報告した。調査終了時点で、女の子の約4名に1名が、いかなる教育・就労・職業訓練のいずれにも就いていなかった。

それらのテーマ全体で、女の子が成長するにつれて経験する障壁や**ジェンダー規範**は、彼女たちの同年代の男の子とは大きく異なっていた。だが2019年、女の子がそうした規範を疑問視、または逆らい始めている兆しがみられた。本調査では、女の子の意見や行動が、コミュニティでのジェンダー不平等やジェンダー的役割を疑問視したり、直接的に挑戦したりする、彼女たちのあらゆる形の日々の抵抗を探求する。

本調査の目的は、女の子の意見や日々の体験を傾聴し、彼女たちがコミュニティに十分に関与し、自身の人生や周囲の環境をよりよいものに形成し、自身と家族の幸福を支える選択を下す力があると感じられるようにするために、大人や組織がどう支援することができるのかを理解することである。多くが大人によって課される、こうした行動を妨げる障壁と、彼女たちが望む変化のあり方の理解を目指している。

そのため、私たちは女の子がジェンダー不平等に対して日々探っている抵抗の形を理解するための枠組みを示した。女の子皆が国連での演説や抗議運動の主導ができたり、望んだりしているわけではないが、彼女たちの多くが自身のコミュニティでの規範や行動様式を疑問視し始め、中には抵抗し始めている者もいる。さらに多くの女の子が、彼女たちが経験する困難を対処するため、大人に積極的な行動を求めている。

¹ 調査員は調査対象者の女の子全員と連絡を取り続けようとしたが、参加中止を選択した者や調査対象地域から移住した者、残念ながら幼少期に亡くなった者もいた。ベトナムでは、2023年と2024年にある省に住む10名の女の子へのインタビューが実施できず、調査に最後まで参加した別の省の9名の女の子のみを対象に含めている。

² 調査対象者の女の子の一覧は、Annex 1を参照のこと。

9カ国で18年間にわたり女の子の意見を収集したことで、彼女たちが自身の意見を表明し、変化を生み出すために、彼女たちがより一層の支援を求めている領域が明確になった。

1.2 調査結果の概要と要約

まず、女の子、そしてより広範には子どもの政治に関する既存の研究を確認する。その際、女の子が日々生活でどのように不平等に抵抗しているかを探る、小規模ながら進展している調査から着想を得る。次に、「女の子の日々の政治的行動」「女の子の日々の抵抗」「主体性」「力」「エンパワメント」等の用語を定義し、本調査で用いる主要概念を説明する。そして私たちは、規範に対する疑問視から、顕在的な行動としての抵抗といった、彼女たちのさまざまな抵抗の形を探る上で有用であると認識した分析枠組みを提示する。

その後、女の子の保護者への18年間のインタビューと、女の子本人へ7歳以降に行ったインタビューの詳細な分析の結果を提示する。まず、**保護者のジェンダーに対する見解**の考察から始める。保護者は全体的に、女の子の教育の享受等の基本的な権利の獲得を**全面的に支持し**、早すぎる結婚(児童婚)等、女の子の権利の侵害には強く反対を示した。しかし、調査では依然、彼らの多くがいくつかのテーマに関し、女の子の基本的権利の享受を最終的に妨げている意見を持っていることが判明した。それらには、特定の役割/行動が男性/男の子、または女性/女の子に割り当てられるのは、元々の素質によるもの、または家族が信仰する神により定められている、という**本質主義的見解**が含まれていた。

こうした考え方は、女の子が無償の家庭内労働に膨大な時間を費やしている、家庭での極めて不平等な労働分担に至った。また、男性が世帯主かつ意思決定者であるという考え、女の子は犯した過ちに対する対応・責任能力を有するが、好ましい決断を下せると信頼するには未熟だという認識、男の子は元々素行が悪いという認識も見られた。女の子、特に月経が開始した者の行動や移動に関する厳格な規則、そして女の子が期待される行動に背いた際の暴力的な懲罰の脅威・行使にも及んでいる。保護者は機会均等への明確な支持を示す一方で、彼らの多くの意見が、女の子のそれらの機会の完全な参加や享受をする上で**障壁**となっていることが判明した。

そして、私たちの枠組みで特定されたさまざまな抵抗の形に沿い、**女の子が経験する多くのジェンダー不平等への抵抗**を考察する。まず、「現実の選択、現実の生活」の調査対象者の女の子が、教育の平等な享受や男の子と女の子の平等な自由の享受の実現を信じ、女性の経済的エンパワメントへの全面的な支持を示すといった**強い平等主義的見解**を持っていたことに言及する。次に、男性と女性・男の子と女の子の行動様式に関する本質主義的主張に対する疑問視を含めて、彼女たちがコミュニティ内の**ジェンダー規範をどう疑問視しているか**を探る。態度的抵抗に関するセクションでは、一層踏み込んで、ジェンダー規範を疑問視するだけでなく、それらを不正義だと主張したり、従わないと脅す姿勢を示したりする、何名かの女の子を紹介する。

明示的抵抗に関するセクションでは、女の子が自身では積極的に抵抗したり逆らうことができないと感じていても、ジェンダー不平等への抵抗という考えを彼女たちが支持したり、ジェンダー平等な社会の創出のために大人により多くの役割を果たすよう求めたりする、あらゆるあり方を考察する。それには意思決定への関与を望む意思表明や、より充実した性教育の提供という形を含む、彼女たちへの必須支援を大人に求めることも含まれた。

そして、秘密の友人関係・恋愛関係・8名に1名の女の子が隠れて仕事や収入を得ていた事例といった、女の子が実践したさまざまな**秘密の行動的抵抗**を探る。その後、**顕在的行動的抵抗**の検証により、彼女たちのほぼ半数が幼少期～思春期に、こうした行動をとっていたことが判明した。これには、期待される行動規範や服装規定への順応拒否・家事労働の拒否・自身の経済的状況をある程度管理するための貯金等が含まれる。

分析の最終セクションでは、時間とともに抵抗が強まった女の子の**3件の事例研究**を詳細に検討する。その検討は調査が長期間であることと、保護者と女の子双方のデータを含んでいたために可能となった。ブラジルのJuliana³が、サッカーや男の子との交流に関する祖父母の厳しい規則に抵抗し、最終的に説得させることで自身の**自由度**を少し高めることができた過程を探る。

³ プライバシー保護のため、全参加者の氏名は変更され、具体的な場所の言及は削除されている。

まず、ベナンのTheaが成長するにつれ、家庭内のジェンダー的役割を疑問視し始め、女性と女の子が家事のすべてを担うのかと問い、次第にそれに抵抗を示すようになる姿に着目する。そして、フィリピンの極めて同性愛嫌悪的で保守的な家庭で育ったReynaが、次第に**自身のジェンダー表現と性的指向に疑問を抱き**、最終的に自身のガールフレンドを両親に紹介した、という物語を分析する。私たちは、女の子の多くにとってそのような行動には重大なリスクが伴うことを認識し、各事例に対し、彼女たちの変化の実現を可能にした**実現要素と制約要素**を検討する。

最後に、それらの結論に基づき、女の子が不平等に挑むために必要な**支援とリソース**が提供されるようにするため、政府・NGO・支援団体に向けた提言をいくつか提示する。

政府・当局は、ジェンダー規範に挑み平等を促進する法的枠組みを強化、または執行すること。また、女の子のリーダーシップと機会均等を支援するため、教育やコミュニティの取り組みに資金提供すること。加えて、ジェンダー平等への啓発推進にあたり、市民社会組織(CSO)・NGO・地方自治体・コミュニティリーダーを支援・リソース提供を行い、連携すること。

NGO・CSOは、ジェンダー規範への啓発とそれに挑戦するため、保護者とコミュニティ住民と連携すること。また、女の子の技能習得・仲間とのつながり・意思決定やコミュニティ活動への関与を支援し、彼女たちを支えること。

地方自治体は女の子主導の取り組みを支援し、公共サービスを彼女たちが利用でき、彼女たちのニーズに応えるものであるようにすること。女の子の声が届き、尊重されるよう、彼女たちが自身の考えを共有し、コミュニティの意思決定形成に貢献できる場を創出すること。

学校は、女の子にとって安全な空間を設け、あらゆる年齢・ジェンダーの生徒の異なるニーズを反映した方針を策定すべきである。また、職員研修とカリキュラム提供を通じて皆を支援し、ジェンダー混合活動が尊重され、女の子が指導的役割を担えるような包摂的な環境を育むこと。

2. 女の子の抵抗: 現時点での知見

ディアや開発言説での女の子のアクティビストの称賛は比較的新しい現象であるが、女の子の活動が現在どう理解・描写されているか、それらが女の子自身の活動目的とどう異なっている可能性があるか、または彼女たちの抵抗の形に関する制限的な観念をどう強化しているかを理解する上で、既に参照可能な豊富な調査結果が存在する。

2.1 世界の政治における子ども

世界の政治における子どもの調査は、子ども自身は政治的主体性をほとんど享受することができず、彼らの生活や苦しみがいかに頻りに政治的に利用されているかを明らかにしている¹。子どもが苦しむ画像は、世界の注目と哀れみを集めたり、特定の危機への国際的行動を促すために利用されたりしてきたが、そうした画像に登場する子どもに発言する機会が与えられることは、ほぼない^{2,3,4,5}。子どもが労働者・移民・兵士・親など数多くの「大人」の役割を担っていることは認知されているが、いまだ「大人」の意思決定への貢献には幼すぎるとみなされることが多い⁶。

特に女の子はジェンダーを理由にさらなる排除を経験しており、グローバルサウスの国々で暮らす女の子であることは依然として被害者という形で描写されたり、理解されることが多い⁷。それは「現実の選択、現実の生活」の調査対象者の経験と直接関連してはいないが、リハビリテーションや平和構築活動に参加する現役・元子ども兵士を対象とした調査から、国際政治で女の子の役割がいかに見過ごされてきたかが理解できる。本報告書は、女の子が「三重に沈黙を強いられた主体」であることを示している。子どもであるがゆえ、年齢に対する社会的認識において沈黙させられ、女の子であるがゆえ、ジェンダーに対する社会的認識により沈黙させられ、子ども兵士を男の子だけと結びつける支配的な認識により沈黙させられているのだ⁸。それらすべてが、彼女たちを平和構築やリハビリテーションの活動から排除し、紛争後の子どもの民間人向けの取り組みからも外される結果を生んでいる。

子ども兵士の問題は、国際政治での子どもの参加に関する文献で扱われる、さらなるテーマを説明するものでもある。つまり、子どもとユースは、まったくの主体性を有さない存在（「被害を受けた人」）としてか、または負の主体性を持つ存在（「脅威」・「解決すべき問題」）とされ、危機解決や平和構築に有意義に貢献できる存在として、好ましい主体性を有すると捉えられることは決してない^{9,10}。近年では、一部の女の子個人に関する描写において、こうした傾向への問題意識が示され始めているものの、後述のセクションで論じる通り、全体としては、彼女たちが前向きに貢献できる存在として認識されるには、依然として多くの障壁が存在する¹¹。子どもは、救済や保護の対象または脅威としてみなされがちである。その明確な例として、陪審員となれる年齢より遥かに幼い年齢で罪を犯した子どもが法廷で裁かれ得る多くの法域や、軍隊を戦争に送り出す政府に投票できる年齢になる何年も前に、軍隊への入隊に署名できる点を、調査員は挙げている^{12,13,14,15}。

2.2 メディアでの言説

近年、女の子のアクティビストの台頭は、子どもは負の主体性しか持たないという見方に対する挑戦となっている。実際、女の子を大きな政治的変革を担う存在として描くメディアも見られる。女の子の活動に関するメディア言説は、複数の異なる表現の間で揺れ動いており、そこにはいくつかの特徴的なパターンが見出されている。主体性をより肯定的に捉える描写への変化は認められるものの、そうした表現の多くは依然として、当のアクティビストである女の子自身が伝えようとしているメッセージとは大きく乖離している。

たとえば、パキスタンの女の子の権利アクティビストMalala Yousafzaiに関するメディア描写の分析から、パキスタン・タリバンによる銃撃事件以降、彼女は実年齢より幼く、無力な犠牲者として描かれ、欧米諸国による救済を必要としている存在として表現されていたことが明らかにされた。この調査結果は、メディア表現が、「救済を必要とするイスラム教徒の女性」という、ジェンダー的かつオリエンタリズムに満ちた言説を再生産したことを明らかにした^{16,17,18,19}。実際にはYousafzaiは11歳でBBCのプロガーとして活動を始めており、複数の著書を執筆し、国際機関で何度も演説を行い、自身の教育基金を設立していた。それにも関わらず、彼女の物語に関するメディア報道は、彼女について語られたことにだけに専ら焦点を当てていた。ある調査によると、銃撃事件後の彼女のイギリス移住に関するイギリスのメディア報道で、彼女自身の「専門家」としての証言が記事で引用されたのはわずか11%に過ぎず、ジャーナリストは代わりに、主に男性医師や政治家といった他者を引用して彼女の物語の重要性を説明していた。そして、彼女が自身の命を危険に晒していることを十分に認識しながら、毎日一人で学校に通っていたのだが、ジャーナリストは「幼いMalala」を誰が救い、「誰が彼女の学業を再開させるのか」を熟考していた²⁰。Yousafzaiの物語を称賛しているように思える報道でさえ、彼女の主体性を制限する働きをしていた。

メディア報道の中には、女の子に好ましい主体性があるという描写へ移行するものもみられる。調査からは、近年、女の子を驚異的な才能と能力の持ち主とみなし、「自ら世界を変えられる存在」として描く「激賞化」の議論が展開されていることが確認されている²¹。その種の議論は賞賛的な雰囲気を選び、フェミニズム運動のおかげで女の子は今や何でも、正にほぼすべてを自力で達成できることを示唆している。だが、その描写に対して複数の批判が示されている。まず、女の子全員が称賛を受ける存在になれるわけではない。こうした描写は特定の特徴に当てはまる女の子に焦点を当てていることが多い。すなわち、「スポーツをし、科学を愛し、美しいが過度な性的魅力を持たず、健康的で痩せすぎではなく、自身の(些細な)過ちから学び、いつか必ず世界を変えるであろう、極めて成功をおさめている、異性愛者の白人の女の子」である²²。近年、Greta Thunbergと彼女の仲間のような集団が世界を変える可能性を称賛する報道は、女の子に対する認識のあり方に真の変化が生じつつあることを示し、少なくとも特定の状況下で、人びとが彼女たちを政治的アクターとして真剣に受け止め始めていることを示唆している。しかし、女の子の多くはThunbergが活用できたようなメディア報道で取り上げられたわけではない。黒人の女の子・障がいを持つ女の子・クィアの女の子・グローバルサウスの女の子は、そうした描写の中での不在が著しい。その最も明白な例は、ダボス会議でのThunbergと彼女の仲間の写真が拡散された出来事である。彼らの内で唯一の黒人メンバーであり、アフリカ人アクティビストであるウガンダの気候アクティビストVanessa Nakateが、報道で公開される前に画像から切り取られていたことが明らかになり注目を集めたのである²³。

また華々しい描写は、女の子が自身の声を聞いてもらうために必要な支援・リソース・女の子1人で変化を起こすことをほぼ不可能にさせている数多くの力構造を不可視化させる。それらは、女の子が国際フォーラムでの演説・何百万もの仲間の動員・実際に世界を変えることさえ、すべて独力で成し遂げられるかのように思わせる。それは、女の子の激賞化に対する3つ目の批判に関連する。つまり、女の子のアクティビストに関する希望に満ちた報道は、人びとに対して危機が既に解決に向かっていると安心させ、彼女たちが意図したのとは逆の効果を人びとに与えやすいことである。女の子のアクティビスト自身は大人に対し、立ち上がること、政治的・構造的変革を求め、彼女たちが関心を寄せる問題に対する数十年にわたる政治的無為を終わらせるよう訴えている。しかし、彼女たちを激賞するメディア描写は皮肉にも、ユースが解決策をもたらすだろう、という安心感を大人に与え、彼らの関与を阻んでいる²⁴。したがって、女の子を真剣な政治的アクターとして認識する最近のメディア言説の変化は、彼女たちを受動的であり被害を受けた人とした過去の描写からの歓迎すべき転換ではあるが、女の子のアクティビスト自身が伝えたいメッセージとは依然大きく異なる。

2.3 開発言説

1990年代後半以降、国際開発言説でも女の子の主体性に対する認識がより好ましい方向へと移行し、グローバルサウスの女の子への投資を訴える複数の高い関心を集めたキャンペーンが展開された。その展開は、国際開発キャンペーン全般で「前向きな画像」への移行が進むなかで起こったものである²⁵。それは、1980年代の資金調達キャンペーンで「哀れみの政治」と称されるものを促進するために、人道危機下の衝撃的で極めて痛ましい画像を使用してきたことに対する世界中からの批判への対応であった。このたぐいの画像は、飢餓に苦しむ子どもや母親を、自身ではどうすることもできない政治的現象の受動的な犠牲者として描写したものが多かった^{26,27}。メディア描写と同様、慈善広告の中にも、子どもや女性を政治から完全に隔絶された存在とする前提の基、彼らを罪なき犠牲者として描写することで、人びとの寄付への意欲を喚起しよう図ったものもあった^{28,29}。

援助領域での長きにわたる熟考を経て、現在多くの組織は、自身の活動の影響を受ける人びとをより前向きに描く画像を選択するようになってきている。それは、グローバルサウスの人びとを「幸福でエンパワーされた」姿として描く画像への転換の動きを伴っている³⁰。この動きと並行して、複数の組織、国際機関、多国籍企業は、女の子や女性が収入創出の機会を得た場合、その収入の多くを男性よりも家族やコミュニティに投資するという明確な根拠に基づき、女の子を対象としたプログラムの展開の妥当性を主張してきた。こうした中で、「女の子による国際開発の強化」という概念も台頭している^{31,32}。

メディアでの女の子の華々しい描写に対する憂慮と同様に、学者やアクティビストの中には、彼女たちの能力を好ましく描写するそうした表現が、彼女たちが経験している実際の危険や不平等を、既に解決に向かっていくかのように提示する点で行き過ぎているのではないかと疑問視する者もいる。言い換えれば、グローバルサウスの女の子の描写は、被害を受けた人からヒーローへと移行してきたのである^{33,34}。女の子の能力に関する前向きなメッセージが、市場価値創出を目的としたキャンペーンの中で単純化されると、男の子が単に遊んだり、自らのためだけに収入を使ったりする存在として描かれる一方で、女の子は家族を支え、働き、コミュニティ全体を貧困から救う利他的な救世主として描かれることになる。その結果、ジェンダー役割の固定化につながる可能性がある³⁵。こうしたキャンペーンの多くは、仲間である女の子や女性との連帯や、彼女たちが直面する不正義の解消を目指すものではなく、「実践的な」投資によってグローバルサウスの女の子や女性を救うという、上から目線の発想に基づいている³⁶。国際開発の分野では女の子の「声」が強調されているが、それは多くの場合、既存の物語やプログラムを補完する形で用いられており、世界的な貧困の根底にある不平等な社会政治的・経済的関係に対する批判的分析を妨げる可能性がある^{37,38}。

国際開発における「女の子の力」言説に対しては、学者やアクティビストから複数の批判が寄せられている。第一に、教育など女の子の基本的権利への投資が、手段主義的な観点に基づいて正当化されている点である。すなわち、それが将来的にGDPへの貢献・少子化・乳幼児死亡率の低下など、他のさまざまな開発成果をもたらす、社会全体に恩恵を及ぼすと考えるに基づいている。このため、こうした言説は、女の子の推進を「安価な開発策」として捉えるものだと批判されている^{39,40,41}。プラン・インターナショナルは、そうした言説への関与を認識し、反省と学びを通じた実践の継続的な見直しを行い、女の子のエンパワーメントによる経済的利益に関する誠実な議論の発展を促すよう努めている。

第二に、キャンペーンやマーケティング資料に見られるように、女の子のエンパワーメントへの取り組みは、彼女たちを未開拓の資源や経済的に非活動的な存在として描く傾向がある。しかし実際には、彼女たちは家庭内労働を通じて国家や世界経済に大きく貢献しており、その事実は見過ごされがちである。さらに、プログラムにおいてこの点が十分に考慮されなければ、教育や雇用に焦点を当てたエンパワーメントの取り組みが、彼女たちのすでに大きい時間的負担を一層増大させるという現実的なリスクが生じる⁴²。

第三に、女の子が将来の収入創出者や経済への貢献者、すなわち潜在的な人的資本として重視されることにより、焦点が教育や経済的エンパワーメントに偏りがちである。その結果、女の子が基本的権利を享受する上で重要となる、性とジェンダーに基づく暴力(SGBV)・性と生殖の健康(SRH)・家庭内労働・役割や意思決定への参加といった、教育・経済領域以外の要素が軽視されることが多い^{43,44,45,46,47}。コミュニティの貧困に対するレジリエンスを高めることを目的として、「女の子の力」言説は、貧困の根底にある政治的・経済的要因への対応よりも、女の子や女性が男性の家族構成員よりも利他的であることを前提とする有害なジェンダー規範を強化する傾向がある⁴⁸。

第四に、女の子が直面している差別や危険に取り組むことなく、個人の主体性や選択に過度に焦点が当てられることの危険性が、フェミニストの批判によって指摘されている⁴⁹。たとえば、武術による自己防衛プログラムに参加したウガンダの女の子に関する追跡調査では、実際には彼女たちが反体制的行動を行ったと周囲から認識され、参加後に一層重大な暴力やハラスメントに遭っていたことが判明した⁵⁰。

つまり、女の子と彼女たちの主体性をより「好ましく」描写する方向への明らかな変化がみられるが、彼女たちに課せられる負担や、そうした描写が促進するエンパワーメントの種類については、依然として懸念が残されている。

2.4 女の子自身との調査

女の子の活動に関する調査は比較的新しい領域だが、女の子のアクティビストを対象としたいいくつかの調査は、彼女たちの経験がメディア・開発言説での描写とどう異なるかを理解する一助となる。

国連女性の地位委員会に参加し、プラン・インターナショナルなど女の子の権利を擁護する国際NGOの支援を受けている女の子のアクティビストを対象とした調査から、彼女たちの多くが、自身の関与が過度に管理されていることや、自らの貢献に対する大人の反応が形式的または台本通りで表面的なものに感じられることから、十分に力を発揮できていないと感じていることが明らかになった⁵¹。それは、別の学者による調査結果と一致しており、自身を賛同者であると考えた大人でさえ、大人主導のフォーラムで「適切」とされる範囲内に収まるよう、ユースの急進的活動を穏やかに抑えようとする傾向があることが示されている⁵²。国連財団によるGirl Upキャンペーンの参加者であった女の子のアクティビストを対象とした調査からは、彼女たちは常に活動の際に大人が設けた障壁を経験し、キャンペーンの宣伝資料に描写された華々しい女の子の姿と自身が乖離していると感じていることが明らかになった。彼女たちは、自身だけで変化を起こすことを狙っているのではなく、活動目標の達成のために大人からの一層の支援を求めているのである^{53,54}。彼女たちは、自分たちが取り組んでいるのは、あらゆるユースに開かれている学びと成長の過程であると認識していた⁵⁵。

調査から、女の子はメディアや開発言説で頻りに描写される個人的な活動より、集団的な活動の形態を好むことが判明している。南北アメリカの女の子のアクティビストを対象とした調査では、他のアクティビストとの交流が、彼女たちが達成し得ることに対する希望を維持するために極めて重要であることが判明した⁵⁶。同様に、アメリカ・イギリス・マラウイで行われたある調査は、女の子がコミュニティ内のジェンダー不平等に挑む集団的取り組みに関与していることを明らかにした。特にマラウイの女の子は、Ubuntuフェミニズム(訳注*共同体との関係性や相互扶助を重視するアフリカ起源の思想に基づくフェミニズム)の形で関与しており、女の子の集団的権利を重視しつつ、それをコミュニティ全体の幸福への関心と不可分のものとして捉えていた⁵⁷。

これらの調査には、自身のアクティビストクラブやGirl Upなどの国際的キャンペーンを通じて、組織的な活動に関与している女の子が含まれていた。一方で学者たちは、女の子が「政治を行う」ことの意味をより広く捉える必要性を指摘している。その背景には、歴史的にも現在においても、女の子が公式な政治の場から排除されてきたこと、さらに活動に関与している女の子自身でさえ、必ずしも自らを「政治的」とは捉えていないことがある。ある学者は、調査対象の女の子が関与していた社会運動や人権団体への公式な参加に加え、オンラインでのブログ発信・横暴な男の子や男性への対抗・他の女の子へのメンタリング・メディア制作など、多様な非公式の政治的実践を指摘している⁵⁸。

日常における女の子の政治的行動に関する研究は、さまざまな状況の中で、彼女たちが経験する不平等に対し、一見すると平凡で目立たない方法で挑んでいることを明らかにしている。こうした行動は、彼女たちが不正義に抵抗し、自身や仲間のより大きな自由の獲得を目指していることを示している。また、これらの調査は、女の子の活動において交差性への配慮が重要な役割を果たしていることも示している⁵⁹。女の子学分野の事例としては、カナダの先住民の女の子による脱植民地化への抵抗・アメリカの学校制度における人種差別に対する黒人の女の子の抵抗・アメリカで無登録移民の権利擁護を訴えるユース女性・互いに支え合いながら女の子のための変革を提唱するマラウイの女の子・アジア太平洋地域で新たなリーダーシップモデルを切り開くユース女性などが挙げられる^{60,61,62,63,64}。私たちによるこれまでの「現実の選択、現実の生活」のデータ分析は、女の子が生活のほぼあらゆる側面においてジェンダー不平等に挑んでいる実態を明らかにしてきた。具体的には、移動や行動、男の子との交友関係に対する厳しい制限を疑問視し、多くのジェンダー不平等の原因が大人にあると認識した上で、その是正を求めていた^{65,66,67}。それらすべての調査で、調査員は戦略的沈黙から顕在的対決まで、現状に対する疑問視から異なる将来への望み/想像に至る日々の行為が、彼女たちの活動の形となり得ることを示してきた⁶⁸。

2.5 調査方法

これらの調査事例から着想を得るとともに、これまで公式な政治領域外における女の子の日常的な抵抗のあり方について、私たちの理解が十分でなかったことを踏まえ、本調査では、彼女たちが幼少期から思春期へと成長する過程で、どのように不平等を疑問視し、変化を生み出していくのかを明らかにすることを目的とする。本調査の対象である女の子は多様な背景を持ち、必ずしも自身をアクティビストと認識しているわけではない。この点から、たとえ彼女たちが自らを「政治的」と捉えていなくても、世界各地の女の子がどのように変化を生み出しているのか、その具体的なあり方を理解することが可能となる。さらに、本データは長期にわたる調査に基づくという独自の特徴を有しており、女の子の主体性が成長とともにどのように発達するのかを明らかにするとともに、その主体性を、家庭環境や保護者の見解といった文脈の中で理解することを可能にする。

本調査は、女の子の味方として行動したいと望む人びとに希望を持たせる知見を提供するが、同時に私たちは誤った希望を示さないよう慎重でありたいと考える^{69,70}。

女の子と女性に関する基本的権利の一部が後退する状況下で、私たちは世界中の女の子の多くにとって、いかなる形であれ、主体性を発揮すること自体が危険を伴い得ることを認識している^{71,72}。私たちは、彼女たちが既にどんな活動に関与し、どんな障壁を経験しているのか、またコミュニティにおいて望む変化を実現するために、大人にどんな支援を求めているのかを理解することに重きを置いている。さらに、たとえそれが、女の子のエンパワーメント・キャンペーンが想定しがちな優先事項と必ずしも一致しなくても、彼女たちの「具体的で固有の望み」を理解し、それに誠実に向き合うことを目指している⁷³。そのため、主体性を単に抵抗とみなす単純な理解を超え、彼女たちによるジェンダー規範の受容と抵抗の複雑さを捉える分析枠組みを構築する必要があった。

期待に応える

ジェンダー規範の受容



期待に逆らう

女の子の日々の抵抗

規範への疑問

- ジェンダー規範を認知し、その在り方に疑問を持ち始めるを疑問視しない
- それらが「自然」なもの、もしくは神から与えられたものか、と疑問を持つ

明示的抵抗

- 女の子が規範に挑戦することへの支持(例: 事例シナリオ)
- 不平等と闘うため、他者にもさらなる行動を求める

顕在的行動的抵抗

- 意図的かつ公然とした期待される行動の不履行
- 集団に変化を起こすために活動し、他者にも抵抗を促す

平等主義的主張

- 規範となる行動を支持しない
- 女性の基本的権利へのアクセスを支援

態度としての抵抗

- ジェンダー役割分業が現状のままではいけない、という見解の明確な表明
- 不正義や不平等への嫌悪の表現

秘密の行動としての抵抗

- 期待される行動を故意に行わず、それを保護者や他の年長者には知られないようにする

主体性の高まり

女の子のエンパワーメント

力を

3. 女の子の日々の政治的行動: 分析的枠組み

3.1 政治・主体性・抵抗・力

女の子の日常的な抵抗を理解するため、私たちは、期待に「応える」行動と「逆らう」行動という方法的戦略を用いてデータを読み解き、彼女たちの発言・意見・経験が、期待される規範にどの程度沿っているのかを検証した。こうした期待される規範は、文化的・歴史的・宗教的文脈によって調査対象者間で異なるものの、9カ国全体に共通して見られる特定のジェンダー観が確認された。具体的には、男性を稼ぎ手かつ経済的意思決定者とみなし、女性が家事やケア労働を担うべきとする信念、男性による財産所有や家計管理の傾向、相続における男の子の優遇、SGBVを男性の「生来の」攻撃性の結果とする見方、女の子が常に男性による被害のリスクにさらされているとする認識とそれに伴う移動制限、女の子や女性の限られた雇用機会、男性優位の政治的代表性、男女別に適切とされるキャリア選択に関する規範、SRHRおよびCSEへのアクセス不足、そして意思決定や権威ある立場における女の子や女性の限定的な役割などが含まれる。本報告書の範囲外であるため、9カ国それぞれにおけるジェンダー政治の包括的な文献レビューは行っていないが、Annexesには各国の女の子の権利および活動に関する既存調査の概要を示している。これら9カ国に共通するジェンダー不平等の特徴に関する本報告書の理解は、既存調査に加え、各国で女の子の支援に携わるプラン・インターナショナルのチームとの議論、ならびに長年にわたり保護者が示してきたコミュニティ規範に関する見解や説明に基づいている。

女の子の日々の政治的行動という包括的なテーマには、彼女たちが期待に「応える」形で、それらの行動を容容・支持・順応・他者への強制の事例が含まれる一方、逆に「逆らう」形で、それらの役割や行動の問い直し・顕在的な批判・断固として拒否する事例も含まれる^{74,75,76,77}。この女の子の日々の政治的行動という包括的テーマにおいて、私たちは「期待に逆らう」すべての意見や描写された行動を「女の子の日々の抵抗」と呼ぶ。

主体性と抵抗を混同する畏に陥ったり、女の子の意見・行動が「期待に逆らう」場合にのみ主体性が発揮されているとみなしたりしないことが重要である⁷⁸。ユース女性のリーダーシップに関する調査から着想を得て、私たちは女の子の主体性を、自ら意思決定を行い、人生の軌跡を形成し、周囲の環境に影響を与える能力と定義する⁷⁹。この定義に基づけば、ジェンダー規範を支持する形で主体性が発揮される場合も十分にあり得る。たとえば、女の子が中途退学して甥や姪の世話をすることを選択し、彼らの父親である自身の兄が家族のためにより多くの収入を得られるよう働けるようにする場合がある。この選択は、ジェンダー化された労働や機会のあり方に何ら挑戦するものではないが、十分に主体的で熟慮に基づいた決断となり得る。

したがって、本調査の分析的枠組みでは、尺度の中央点から両方向に主体性が強まることを示している(図1参照)。中央には、コミュニティにおけるジェンダー不平等に無自覚な者や、規範を強化する行動や挑戦する行動を伴わずに、曖昧にジェンダー平等を支持する者が位置づけられる。しかし、いずれかの方向へ進むにつれて、より強い意見とそれに対応する行動が見られるようになる。たとえば、「男の子と女の子は同じ家事をするべきだ」という単純な主張は、平等主義的な見解として、ジェンダー化された労働分業という支配的な規範に反するものである。しかし、このような発言が規範への疑問視や具体的な行動を伴わない場合、それだけでは抵抗としての主体性の顕著な表れとはいえない。

実際、保護者がこうした平等主義的な発言をした後、同じインタビューの中で、息子と娘にまったく異なる家事を割り当てていると説明するケースが多いことが明らかになった。同様に、「女の子と男の子に課せられる家事に違いはない」という発言は、本枠組みでは「ジェンダーの無自覚」であり、「期待に応える」ものとして分類される。これは、データから明らかになっているジェンダー化された労働のあり方を認識していないことを示すが、ジェンダー役割に対する態度的な受容や意図的な強制を意味するものではない。これに対し、暴力的な懲罰によってジェンダー的な家事分担を強制する行為は、「行動的強制」に分類される。一方、女の子が公然と家事を拒否したり、他者にもそうするよう促したりする行為は、「顕在的行動的抵抗」とみなされる。前者は強く「期待に応える」行動であり、後者はそれに強く反する行動であるが、いずれも高い主体性を示すものと位置づけられる。

データを読み解く過程で、本枠組みに基づき抜粋をコード化した。だが、明らかに、同一人物であっても、発言ごとに、あるいは年ごとに、期待に「応える」意見から「逆らう」意見へ、主体性の低下から向上へ変わることもある。女の子と彼女たちの保護者は、「抵抗・脆弱性・加担という立場の間を動的に移動している」⁸⁰。抜粋のコード化の際に、私たちはある特定の年のインタビュー対象者全体のジェンダーに対する姿勢を期待に「応える」/「逆らう」ものと定義することは意図していなかった。私たちは、彼女たちが女の子として成長する過程で経験する複雑さを理解し、どこに不平等に挑む余地があるかを把握するため、意見の変化やあるテーマと別のテーマ・ある年と次の年での意見の矛盾の分析に関心があつたのだ。

期待に「逆らう」ことを読み取る中で、私たちは沈黙と秘密裡も主体性の発揮であり得ることも理解した⁸¹。長い間、主体性は本質的に「声」と結びつくものとみなされてきたが、女性の抵抗に関する調査領域では、発言することが極めて危険な状況に置かれている多くの女性にとって、沈黙が抵抗の形として採り得るという認識が高まっている⁸²。沈黙を無力さの表れと機械的に憶測するのではなく、女の子と女性の沈黙が、いかに力の源泉・権力者への挑戦・生き残りのための交渉手段となり得るかを認識すべき、と訴える調査員もいる⁸³。私たちのデータにおいて、沈黙の意味の分析は極めて困難である。沈黙は幼少期に最も頻繁にみられ、彼女たちの沈黙が抵抗の形なのか、またはインタビューをした大人の質問への回答の仕方が分からないという表れなのかを判断するのは難しい。仮に抵抗の形であったとしても、私たちが10年以上経った現在で、その沈黙がインタビュー自体への抵抗だったのか、開発組織全体への抵抗だったのか、あるいは社会一般への抵抗であったのかを判断するのは不可能である。だが、私たちが分析可能であり、かつデータで頻繁に確認できるのは、秘密の抵抗だ。これは、女の子がジェンダー規範に意図的に背きつつ、それに関し沈黙を続ける形である。私たちは、それらをたとえ規範を顕在的に問いたすものではなくても、高度に主体的な行為であるとみなしている⁸⁴。

私たちの枠組みにおいて、主体性の高まりとともに権力が強まると考える。期待に「応える」行為の究極的な形では、調査対象者がジェンダー規範に従うだけでなく、他者にそれを、時に暴力的に強制するという、他者に対する「支配力」に言及する可能性がある。一方、期待に「逆らう」行為の究極的な形では、調査対象者が期待される行動を疑問視/拒否する力・自身の自由度を拡大する力・環境全体を皆にとって公平にする力という、「変革力」を示す可能性がある⁸⁵。分析では、女の子の日々の政治的行動での期待に「応える」と「逆らう」の全範囲での意見・行動例を調べた。しかし本報告書では、女の子が高度な平等と自律性を求める領域を支援する方策を見出すことを最終目的としているため、私たちが「女の子の日々の抵抗」と呼ぶ、期待に「逆らう」行動や意見に焦点を当てる。

3.2 女の子のエンパワメント

主体性とエンパワメントはしばしば同義語として用いられるが、本調査ではそれらを区別しつつも相互関連する概念であると理解することが重要である。Naïla Kabeerは、エンパワメントを、「それまで自身の人生に関して選択をすることができなかった人びとが、選択できるようになる過程」、と定義している^{86,87}。主体性はエンパワメントの中心に据えられるが、主体性だけではエンパワメントの達成はできない。ジェンダー不平等に関連し、主体性の行使により力を奪われる可能性もある。エンパワメントには、既存の力関係に挑む形で人生の選択を行い、それに基づき行動するという意味を持つ、前向きな主体性が求められる。

Kabeerは、エンパワメントを主体性・リソース・達成という、3つの面と関連させて探求することを提唱している。本枠組みは、ジェンダー不平等に対する問い直し・挑戦における、女の子の主体性を探求するものである。

しかし、私たちは、女の子が自身のコミュニティで望む変化を起こすためのリソースを有しているのか、分析から理解したいとも考える。また、彼女たちが主体性を発揮した結果、つまり達成した成果にも関心がある。それは、特定の成果が前進の印であるとする単純な憶測を超え、その背後にある主体性の程度の理解を試みるものである⁸⁸。たとえば、女の子が雇用されることは経済的エンパワーメントの成果を示唆するかもしれないが、女の子が自ら関心のある仕事を選び、新しいスキルを学び、自身に高価な品物を購入したりする場合と、家族が極度の飢餓に陥っているため、女の子が中途退学し、見つけられる有償の仕事なら何でも就かざるを得ない場合との間には、明確な違いがある。その2つの場合は、発揮される主体性の程度が大きく異なり、主体性の欠如はリソース不足と密接に関連している。従って、本報告書の分析では、女の子の主体性の発揮に必要なリソースは何か、そして彼女たちの変化の実現において、実現可能要素と阻害要素は何かを理解することを目指す。

3.3 枠組み

以下では、女の子と保護者へのインタビューの分析の際に使用した各分類を、それらを特定する行動や示された意見の例を挙げて説明する。

行動的強制

女の子や彼女たちの保護者が現在のジェンダー的役割が当たり前ものと考えただけでなく、積極的にそれらの役割を果たし、他者にもそれを強いる状況を指す。たとえば、トーゴのAla-Woniは長年、女の子は家事をすべきだという考えを受け入れるだけでなく、熱心に家事をこなし、妹にもその仕方を教えていた。

行動的受容

特定のジェンダー規範を受け入れ、積極的にそれに従う状況を指す。たとえば、ウガンダのAmeliaは2014年、母親が許さなかったため男の子と遊ばなかったと述べた。同様に、フィリピンのJocelynの母親を含む保護者の多くは、娘が成長するにつれ、言わなくても家事をするようになったと語っていた。これも行動的受容の一例と言える。

認識的受容

現在の社会でのジェンダー的役割が、性別による自然な性質・差異(ジェンダー本質主義)、または神により決められたものであり、いずれにせよ変えられないという考えを示す状況である⁸⁹。たとえば、ブラジルのCamilaは2023年、家族内の幼い子どもの世話のために中途退学しなければならない可能性があるという架空の女の子の物語に対する反応として、「男の子は子どもの世話ができないため、父親が働きに出ている間は母親が家にいることが唯一可能性のある解決策である」、と述べた。

利他的受容

女の子や保護者が他者(特に女性)への圧力を軽減する、または家族全体の幸福を高めるためにジェンダー的役割に従う状況である。彼女たちのそうした役割を不公平とする認識の有無や、それらを生物学的/神により決められたものであるという考えに対する疑問視の有無はさまざまである。たとえば2018年、ベトナムのTanは母親の疲労感を和らげられるため、一週間で一番好きな時間として、家事をする時間を挙げていた。

この分類は、アフリカ人フェミニストやウーマニストに関する詳細な調査から着想を得ている。彼女たちは、アフリカ女性のフェミニズムが集団的・利他的な形で示されるため、誤解・見過ごされることが多いと主張している。それらの主張は、個人はコミュニティ・祖先・環境と本質的に結びついていて、それらに対し道徳的義務を負うとする、共同体主義的価値観と関連しており、西洋的な権利の自由主義的・個人主義的な枠組みにそうした価値観を落とし込むのは容易ではない^{90,91}。そこで重要なのは、コミュニティ全体が必要とする主体性とリソースを獲得するまでは、そのコミュニティのすべての人が「エンパワーメント」されないという考え方である。

「エンパワーメント」の条件として、貧困下の家族に対する義務の放棄を女の子に求めるならば、その女の子は真にエンパワーメントされたとは言えない^{92,93,4}。

規範の認知

女の子や保護者が、男性と女性、男の子と女の子に期待される行動の違いを認識しているが、それに対する意見を特に示していない状況を指す。現状を支持する意見を必ずしも示してはいないが、皆がその姿勢を取れば、状況は決して変わらないため、ジェンダー的役割への疑問視を欠くその姿勢を、期待に「応える」と判断する。たとえばブラジルのBiancaは2018年、自身と妹が兄弟より多くの家事をこなすことを求められていると述べると同時に、全員が同じ分の家事をしているとも語った。彼女が不正義感を示したり、その期待への疑問視を見せたりすることはなかった。

ジェンダーの無自覚

男女間で扱われ方や期待される行動に関して差異はないと主張する状況を指す。繰り返すが、皆がその意見を持つならば、私たちが実際に存在していると認識する多くのジェンダー不平等への対応は決してなされない。したがって、平等主義的主張の1つの形であるとはいえ、私たちはそれを「期待に応える」状況と判断する。たとえばベトナムのKimの母親は2021年、今では男女平等が実現しており、女の子は困難を経験していない、と述べた。この分類と次の分類は、私たちの枠組みの中心に位置し、主体性と意見の強さが最も弱い分類である。

平等主義的主張

ジェンダー規範に挑む行動を伴わない、平等を支持することをぼかした発言をする状況を指す。ジェンダー平等を支持する発言が「期待に逆らう」ことを認識しつつも、家庭・コミュニティでの現在のジェンダー的役割に対する批判的な問い直しや、不平等な行動に対する積極的な挑戦が伴わない場合、そうした発言に伴う主体性はわずかである、と私たちは判断した。たとえばウガンダのSylviaの父親は、妻と家族や家計に関して共同決定を行っているが、別の年には、自身が主な意思決定者であると発言し、矛盾する態度を示した。彼の平等主義的発言は、意思決定への女性の平等な参加実現への要求の認識や、その考えを何となく支持している可能性と解釈できるが、別の年に家父長的な実践を示すという自己矛盾をみせていることを踏まえると、その発言の主体性を過大評価すべきではない。

規範への問い直し

女の子や保護者が、特定のジェンダー規範に対し、必ずしも不公平だと明言してはなくても、疑問を持ち始めた状況を指す。これには、行動パターンが自然や神により決定されているのかを問い始めることも含まれ得る。たとえばドミニカ共和国のSaidylは2021年、自身のコミュニティで男の子に女の子より遥かに高い自由度が与えられていることに気づき、同年、保護者の多くと何名かの女の子が、女の子の暴力に遭う危険性の高さを説明した一方、彼女はただ、そうである理由がわからないと発言した。

態度的抵抗

女の子や保護者が、ジェンダー的役割や期待への不公平感や嫌悪を示す状況を指す。エルサルバドルのKarenは2020年、母親に家事を命じられると、結局はこなすものの、怒りをぶつけることが多かった。そうした意見は、女の子が、秘匿性が保証されたインタビュー外で容易に示せるものではないが、私たちはそれを重要な疑問視・抵抗の形とみなす。

明示的抵抗

女の子が、たとえ自身で抵抗することが不可能と感じていても、ジェンダー規範への抵抗という考えを支持する状況を指す。たとえば、女の子の権利に関し意見表明する女の子の物語をインタビュー実施者が読み上げた際に、極めて好意的な反応を示す場合や、大人たちが女の子の基本的権利を十分に保障できていない現状いくつかの点を指摘し、一層の取り組みを求める場合が挙げられる。

4 本分類は、私たちの枠組みのなかで位置づけるのが難しいものであった。他の女性を助けるためにジェンダー規範に従うことは、高度に主体的な行動であり、そうした役割がすべて女性に押しつけられるべきではない、という批判的認識と結びつき得る。だが行動という観点では、それは既存のジェンダー関係を再生産している。

4 本件の詳細な分析が記載されているウガンダの報告書を参照のこと。

ベトナムのYenは2024年、大人は女の子の意見に耳を傾けるべきであり、女の子は自身の人生に関する決定を下す能力について、もっと信頼されるべきである、と述べた。

秘密の行動的抵抗

女の子が故意にジェンダー規範を破る行動を採り、そのことを秘密にしておく状況を指す。たとえば、ベトナムのAliceは2023年、雇用されていたが、彼女の就労を認めないはずであった父親にはそれを隠していた。

顕在的行動的抵抗

女の子が期待される行動に対して、公然と背く状況を指す。たとえば、ベトナムのLyは2016年、母親が報酬を与える時しか家事をしないと発言し、エルサルバドルのRaquellは2021年、自身が好きな家事だけをする、と発言した。

3.4 規範性に関する考察事項

本枠組みの採用にあたり重要なのは、フェミニスト組織の目標が、女の子全員を顕在的な行動的抵抗へと導くことではない、という私たちの考えを明確にすることである。本調査の目的は、あらゆる女の子が安全を感じ、自身のコミュニティ内外でのジェンダー不平等に挑めることができるよう支援する方法の特定にある。本枠組みは、図表の右側への移行が、あらゆる女の子にとって有益で望ましいと示唆するものとして解釈されるべきではない。本報告書の保護者の意見の分析が示す通り、多くの女の子にとってそれは不可能であったり、危険を伴うものである。私たちは、彼女たちが人生のどの時点で主体性の発揮がしやすいと感じるのか、およびリソースの入手可能性等、彼女たちの環境で何が主体性発揮の実現可能要素であるかを理解することに重点を置いている。全体的に、明示的抵抗は、秘密の抵抗や顕在的行動的抵抗より遥かに頻繁に起きていることが判明した。それは、女の子の抵抗という考えを支持しつつも、自身が抵抗する能力は有していないと感じる女の子の声に耳を傾ける大きな可能性があることを示唆している。大人や組織が、女の子の支援として何ができ、また多くの場合において大人が彼女たちの人生に障壁を設けることをどうなくせるか、深く理解することにつながる。

4. 保護者の見解の変遷

女の子の抵抗の実現可能/阻害環境

女の子の保護者の意見は、彼女たちのジェンダー規範への抵抗に対する実現可能性や阻害環境の理解のために極めて重要である。全体的に、保護者は機会均等を圧倒的に支持する一方、男女の「自然」または神から与えられたとされる素質や役割に対する彼らの信念が、彼らの娘の機会の享受を妨げていることが多いことが判明した。彼らの多くは、男性が家庭の稼ぎ手で意思決定者であるのは自然であるとし、男の子は生まれつき素行が悪く制御不能だとみなしていた。一方で、女の子は誤った判断を下しても、対応能力があるとみなされていたが、家族の意思決定に有効的に貢献できる能力があると評価することはほとんどなかった。彼らは女の子が思春期を迎えると行動・移動に厳格な規則を課し、期待される行動を行わない女の子は身体的懲罰を受けることが多かった。

4.1 ジェンダー平等かジェンダー本質主義か

調査対象者全体で、保護者は極めて厳しい経済状況下で娘に機会を提供するのに苦労していた点に最初に言及することは重要である。彼らの大多数は教育の平等な享受を強く支持しており、その教育が国費で賄われない場合、娘が就学し続けられるように長時間労働をしていた。フィリピンのChristineの母親は2017年、「私たちが生きている間は、生計手段が見つけられる限り、子どもたちに学業を修了させます」と語った。同様に、ウガンダのJustineの父親はこう語った：

「Justineは勉強が大好きで、いつも医者になりたいと言っています。彼女は勉強が好きで賢い子ですから、将来は大丈夫だと思います。なので、私が生きている限りは、彼女が夢を実現できるよう、奮闘するつもりです」

- Justineの父親、2018年、ウガンダ

娘が最終的には妻や母親になるという想定を疑問視する保護者はごく少数だったが、娘が学業の修了までそれを遅らせることを広く望んでいた。また、彼らの多くが娘のキャリア形成も望んでいた。

また、保護者は児童婚に強く反対していた。18歳未満の結婚を違法とする国内法改正に頻繁に言及したが、その反対は単なる起訴回避目的以上に強い意思を伴っているように思われた。たとえば、教育費が払えないため娘を14歳で結婚させたいと考える家族の物語に対する反応として、トーゴのLelemの祖母は2021年に、「最近の親は皆、自身が通った期間よりも長く子どもを学校に通わせたいと思うべきなのに、彼らは娘を嫁がせようとしているのが残念です」と述べた。同じ物語に対して、ブラジルのNataliaの母親は以下のように話している：

「悲しいことで、間違っていると思います。だって彼女はまだまだとても若いでしょう？それなのに、その男の人が彼女に何かを与えられるという理由で結婚させられようとしているのです。彼は年上の紳士で、彼女の父親であってもおかしくないくらいの年齢です。彼女は望んでいませんし、ユース時代を失ってしまいます。私は許容できません」。

- Nataliaの母親、2021年、ブラジル

調査対象者全体で、保護者は女の子が教育を享受できるべきであり、それが児童婚により損なわれるべきではないという強い意思を示した。

しかし、家庭内の役割・SRHR・コミュニティや家庭での意思決定に関する多くの保護者の見解は、女の子の基本的権利に対する彼らの支援を弱めるものであった。彼らは、特定の特徴・資質・能力が生まれつき男性的あるいは女性的であり、生物学的または神により決められたとする、本質主義的見解を示すことが多かった。そうした本質主義的な見方のために、彼らは子ども時代の機会均等を支持するにもかかわらず、女の子と男の子の行動に対する異なる期待により、女の子が兄弟と同じ機会を享受することを不可能にしていることが多いことに気づいていなかった。

家事分担に関し、何名かの保護者が平等主義的な見解を示したが、それらはインタビューの中の別の部分で語られた家事の分担方法とその理由と完全に矛盾していた。たとえば、カンボジアのDavyの母親は2019年、「男の子と女の子は同じ家事責任を担うべきだ」という主張に賛同し、「男の子も女の子も家事や農作業等の屋外での仕事を手伝えるから同意します」と述べた。だが、同インタビュー中で彼女は別の箇所、Davyが彼女の兄弟より多くの家事をこなす理由について、「私が疲れてしまう時があって、彼女に皿洗いを頼むの。彼女には、それは女性の仕事だと言っています」と発言した。そして彼女は続けて、Davyに「彼女の兄弟と共に農作業をする」のを許可していると説明する一方で、「私の息子たちは何もしません。学校に行き、食べ、遊びに行くだけです。時々家事を頼みますが、ごく稀です」とも話した。彼女は再度Davyの教育を強く支持し、たとえ家計が逼迫しても息子たちより熱心に学ぶDavyの教育を優先したいと述べたが、「女性の仕事」がDavyの学業成績に悪影響を及ぼし得ることを認識していないようだった。

同様に、ブラジルのBiancaの母親は2017年、男女は平等な権利を持つべきだと述べた後、女の子と女性が家事の大部分を担わなければいけないことを説明し、それがそうであるべきと示唆するような発言をした。

インタビュー実施者: ですが、それは主に女の子と男の子の責任なのですか。

Biancaの母親: 女の子です。

インタビュー実施者: そうですか。ここについてはどうですか。

Biancaの母親: ここの大部分は女の子の責任で、特に長女の責任です。

[...]

インタビュー実施者: これは変わるべきだと思いますか。

Biancaの母親: 女の子は男の子より多くをすべきだと思います。

インタビュー実施者: ですが、それはあなたの考えですか、それとも気づかれたことなのですか。

Biancaの母親: あのね、それが私の考えです!

インタビュー実施者: あなたが考えていることですね。わかりました。

Biancaの母親: だって、子どもはただ走り回って、何もしていないだけにしか見えませんので。

インタビュー実施者: わかりました。ええと...それらの責任や家事の分担方法は公平だと思いますか。家事に関しての話ですよ。女の子は家庭内で男の子より責任が多く、だから男の子より多くをしていると思いますか。その家事分担は公平だと思いますか。

Biancaの母親: わかりません。私たちの権利は同じだから、同じであるべきでしょう。だから同じであるべきです。

- Biancaの母親、2017年、ブラジル

彼女の矛盾する回答は、このテーマに関して深く考えたことがなく、コミュニティで一般的な状況を繰り返し述べていたことを示唆しているかもしれない。インタビュー実施者が繰り返し質問すると、彼女はより平等主義的見解を示したが、これは平等に関する態度表明に直接答えるよう求められた際に保護者の多くが示した反応と同様であった。インタビューと調査プロジェクト全体の文脈で、彼女や他の保護者がジェンダー平等を支持する形の回答を期待されていると感じていたのかもしれない。だが実際、彼らは極めて「期待に応える」行動を語り、息子より娘に多くの家事を課していた。同様に、ベナンのTheaの母親は2015年、家で家事が「公平に」分担されていると発言すると同時に、「一般的に女の子は男の子より家庭で忙しいです。それは彼女たちが良い妻・母親になるための準備であり、自身の家庭をどう切り盛りするかを学ぶ手段だからです」と述べている。エルサルバドルのGladysの母親は家事について2020年、「私の家で家事は[男の子と女の子の間で]同じです」と述べた。しかし、その後の調査期間では、Gladysは弟妹の世話を担っており、非常に時間のかかる役割であったが、彼女の兄は求められていないようであった。

家庭内の意思決定に関して平等主義的見解を示す保護者も同様にみられたが、それらは別の場面での見解と矛盾している。たとえば、ウガンダのNamazziの父親は2011年、「家族全員の福祉と幸福に貢献する」ため、妻と共同で決定を下していると述べた。だが同じインタビューで、「男性こそが家長だから」政府には女性より男性が多くいるべきだと述べた。2015年に再び家庭内の意思決定に関して問われると、以下のように話している:

インタビュー実施者: ご家庭でお金に関する決定は誰がしていますか。

Namazziの父親: 私です。世帯主として。

インタビュー実施者: どうしてですか

Namazziの父親: それは[私が]家族の長であり、これは私の家族だからです。

- Namazziの父親、2015年、ウガンダ

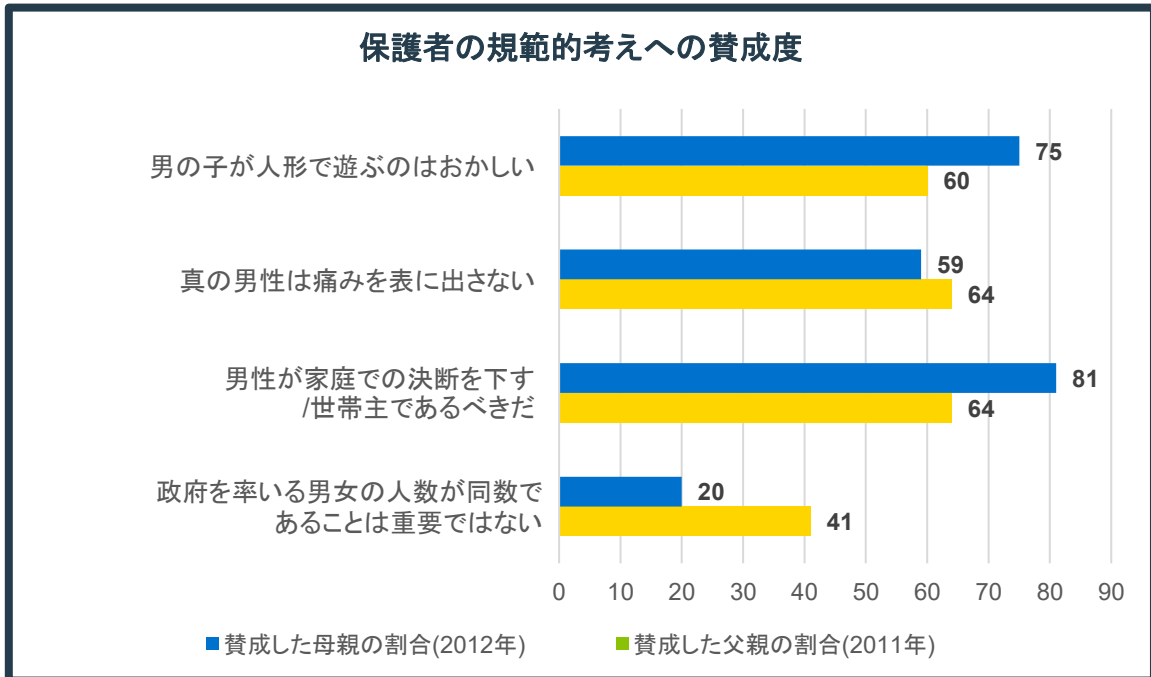
別の事例として、保護者が教育の平等な享受を支持すると述べつつも、経済的に切迫した状況下では息子を優先すると語ったものが挙げられる。たとえば、ベトナムのHuongの保護者は2010年、「勉強の必要性は男の子も女の子も同じです。娘の教育をできる限り支援しなければいけません。社会は発展しており、女の子も働けるようになるために教育を受けるべきです」と述べた。だがHuongの母親は2017年、息子が就職したらHuongの教育を支援してくれるだろう理由で、息子が高等教育を受けられるための貯蓄を始めたことを説明した。しかし同年、彼女はHuongの兄がHuongほど真剣に勉強していないと説明し、「昨年、彼は7年生で優秀な生徒の中には入らなくて、悲しかったです。コンピューターのせいで、勉強を怠るようになったからです」と述べた。そして2018年には、Huongの学習状況を「兄より優れている」と表現した。Huongはより真剣に勉強に取り組み、より良い成績をおさめたが、兄と同じ教育経験を享受するためには、「怠け者」とされる兄が学位を取得し・就職し・彼女への約束を果たすことに頼らなければならなかった。

保護者の中には、コミュニティで保護者が息子を優先する傾向はなくなったと明言する者も何名かいたが、その発言は別の場面での行動・意見と矛盾していたり、「娘の方が、素行がよく家族思いであるため娘を好む」といった極めて本質主義的な表現で語られたりした。興味深い事例はベトナムのTanの家族である。Tanの家族が両親と2人の娘で構成されていた2012年、「産むなら息子と娘のどちらがよいか」とTanの母親に聞くと、「どちらも同じです。皆、私の子どもです」と答えた。Tanの両親は平等主義的な見解を示し、2人の娘に遺産を均等に相続させる計画を立てていた。だが母親は2016年、「男の子を産んで、家族は本当に幸せです」と述べた。当時ベトナムでは2人っ子政策が実施されていたが、夫婦は息子を望んだため第三子を産むことを選択し、その結果家族は罰金を科せられた。Tanの両親は現地の慣習に従い、今は土地をすべて息子に相続させる予定でいる。「お金があれば3人に分けるでしょう。でも娘たちは結婚して夫の家に住むから、家と土地は息子が所有します」。母親は2人の娘の世話をする時間がなくなり、娘たちは成長するにつれ、調理や弟の世話を担うようになった。母親は2017年、息子の1歳の誕生日を盛大に祝った。「親戚や近所の人を招いて、15皿もの料理を用意しました」。だが、当時11歳のTanに彼女と彼女の姉妹の誕生会を開いたかと尋ねると、「家計が苦しかったからできませんでした」と否定した。

2021年までで、Tanは学業・家事・弟の世話をこなすことに疲弊したと語った。彼女は、シャワーを浴びる時間もなく、「目の周りが黒ずんでいて、友人にパンダって呼ばれ続けています」と悲しみを明かした。Tanの母親は2024年、再び平等主義的見解を示し、「今、人びとはただ子どもを産むだけで、男の子・女の子のどちらを望むということはありません」と語った。だが、彼女と夫が、男の子が生まれるまで子どもを作り続け、その後男の子を女の子とは異なる扱いをしてきたことが、Tanにどんな影響を与えてきたかについて、まったく認識していないようだった。

母親たちは、平等な政治的 대표や「荒っぽい」スポーツ等の男性的とされる活動への参加機会が女の子へ与えられることに対し、強い支持を示した。しかし、彼女たちの大多数は、「真の男性は痛みを表に出さない」という本質主義的見解に同意し、息子が人形遊びをしたり、ケアや養育を伴う遊びに参加したりすることに対し強く反対した。父親たちも、母親たちより程度は低かったが、平等な政治的 代表や女の子のスポーツ参加を支持したが、男性は痛みを表に出すべきでなく、男の子は人形遊びをすべきでないという点に同意した。

それは再び機会均等への一定の支持を示す一方、女の子と男の子・女性と男性が本質的/自然に異なっており、異なる役割を果たす必要があるとする規範が、幼少期の遊びに対しても依然として支配的であることを示している。



まとめると、保護者の多くは調査の中で平等主義的見解を示し、機会均等を強く支持した。だが、彼らはコミュニティに存在する、女の子と男の子が異なる役割を担い、異なる「自然な」素質を持つとするジェンダー規範を必ずしも認識しておらず、疑問視もしなかった。彼らは娘に従順で、多くの家事をこなすことが求め、息子は後継者であり将来の扶養者とみなす傾向があった。そうした本質主義的見解により、女の子の多くは、彼女たちの保護者が提供したいとした機会を十分に享受したり、成功をおさめることに苦労していた。

4.2 暴力的な懲罰の行使によるジェンダー規範の強制

女の子が、保護者から見て女の子に「自然」と考える役割を疑問視・拒否、特に家事の拒否をしたりすると、身体的暴力を含む厳しい懲罰を受ける場合が多かった。調査対象者全体を見ても、女の子が兄弟や男の子のいとこより多くの家事を課されている。したがって、これは女の子に期待される行動を行わないことを理由に罰せられるGBVを示しているといえる。たとえばベナンのLayla・ウガンダのRebeccaとJoy・フィリピンのChesa・ベトナムのYenの保護者は、娘が家事をこなさなかった場合、棒や鞭の使用を含み、殴打をすると明言した。ウガンダのNimishaの父親は2018年、どんな行動を子どもがしたら叩くかという問いに対し、「家事を命じた際に、嘲笑された時です。それは失礼な行為であるので、叩くのです」と説明した。カンボジアのNakryの母親・ベナンのEleanorの母親・フィリピンのJocelynの母親など何名かの保護者は、娘は殴るが息子は殴らないと述べた。Jocelynの母親は、それは息子が自分より背が高いためだと説明した。

外出や男の子との交流に関する規則を破った場合に、特に暴力で脅された女の子もみられた。ブラジルのJacquelineの母親は、娘が男性の友人を作ったら殴ると述べ、また、ブラジルのSofiaの母親は2019年、夜遅くまで男の子とナイトクラブに出かけたことで保護者に激しく殴られた女の子の物語に対する反応として、「子どもの行動次第だから」と、場合によっては子どもを殴ることは問題ないとした。

トーゴのAziaが「よい女の子」であることとは何か、に対して示した回答は、深くジェンダー化された暴力と虐待の形態の脅威を明示していた。

インタビュー実施者: 女の子は男の子に対しどう振る舞うべきだと思いますか。人びとは女の子が男の子に対しどう振る舞うのを期待していますか。

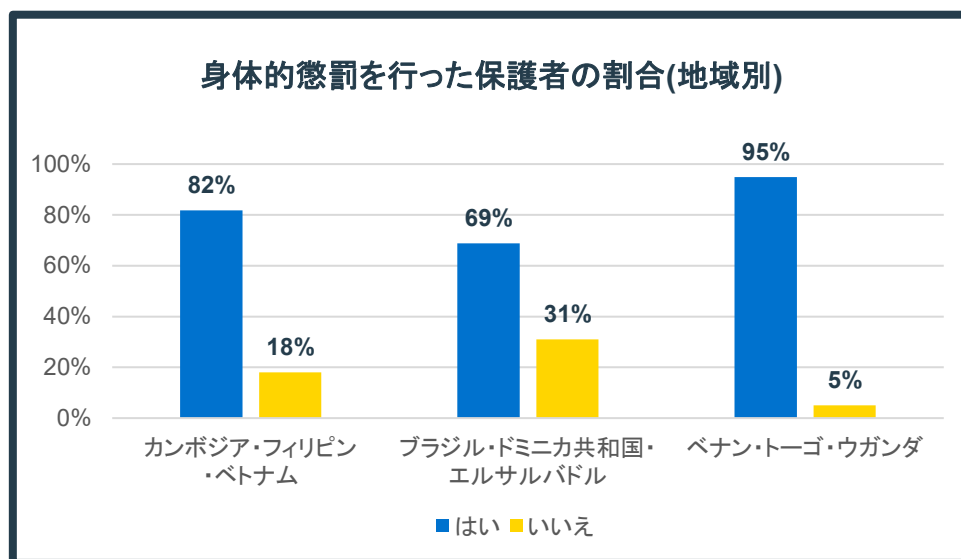
Azia: 女の子は男の子に対し行儀よく振る舞い、仲良くすべきだと思いますし、皆そう思っているはずですよ。

インタビュー実施者: ルールを破り、「いい子」じゃなかったら何が起きますか。

Azia: 殴られて、何も食べさせてもらえません。

- Azia、11歳(2018年)、トーゴ

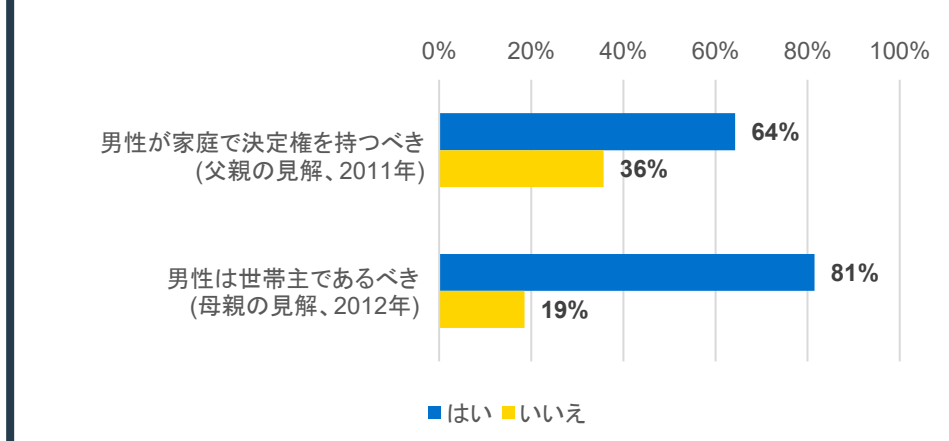
調査対象者全体で、若干の地域差はあるものの、身体的懲罰が広く行われていることが確認された(下図参照)。しかしながら、全3地域で、身体的懲罰は期待される行動を行わない女の子に対する明らかな脅威であった。



4.3 男性を世帯主として優遇する規範

教育の享受に関する平等主義的見解や、就労を目指す女の子と女性に対する広範な支持はみられたが、保護者は全体的に「男性が扶養者であり世帯主である」「男性が家庭内の意思決定者として適している」という考えを支持し続けた。2019年、保護者の43%が「財政的決定は男性が下すべきである」という主張に賛成した。また、下図が示す通り、上記のテーマに関する意識調査結果を母親と父親で分けることによっても知見を得た。

保護者の家庭内の意思決定に対する見解



トーゴのAla-Woniの父親は2018年、次のように説明した。「父親である男性が意思決定者で、男性が家にいない場合は、女性が意思決定します」。時に、母親の収入が父親を上回っていても、父親が依然世帯主であり主な意思決定者とみなされていたこともあった。ベナンのAnnabelleの家族も、時とともに状況が大きく変化したにもかかわらず、その傾向が続いた。Annabelleの母親は2009年、タクシー運転手として働く夫だけが家族の収入に貢献していると語った。Annabelleの姉は2010年に、父親が家族の就学や結婚に関する決定を下していると述べ、父親は母親の意見を考慮に入れる必要があると前置きしつつも、最終決定権は父親にあるとした。Annabelleの父親は2012年、妻が豆の販売で家族の主な稼ぎ手になっていると説明し、2015年には、インタビュー実施者と以下の会話を交わした:

インタビュー実施者: あなたの家族がどう生計を立てているのか、詳細に教えていただけますか。

Annabelleの父親: 家族は妻と私の働きのおかげでいい生活を送っています。家族のリーダーとして、私は大きな家計支出を支えています。リーダーとしての決断を下す前に家族内で合意が成されているので、大きな問題は起きていません。

- Annabelleの父親、2015年、ベナン

その時、Annabelleの父親はインタビュー実施者に、彼がタクシー運転手の仕事で先週約16ドルを稼ぎ、妻は農作物の販売で40ドルを稼いだと語った。自身の稼ぎが妻の週給の半分未満であるにもかかわらず、父親は依然自身を家族の「リーダー」と表現したのだ。

フィリピンのKylaの家族でも似た状況がみられた。Kylaの母親は叙任された牧師で、教会の主任司祭に任命されていた。その役職のため、彼女は高収入を得ており、教会が家族の多くの支出を賄っていた。彼女は学士号を取得しており、2016年まで、免許は有するが叙任はされていない牧師である父親の収入の3倍を稼いでいた。彼女は2012年、自身を家族の意思決定者だとし、「私が主に決定者になります。家族の中で年長者ですし、夫の不在時の決断にも慣れていますが、ただし決定前には夫に必ず相談します」と述べた。2016年にも同様の見解を示している。

インタビュー実施者: 大きな支出の決定は誰が行いますか。

Kylaの母親: 私です。私が上ですから。

インタビュー実施者: なぜですか。年齢が上、だからですか。

Kylaの母親: 年齢と私が先に牧師になったからです。結婚時に、彼の学費を私は負担しました。

- Kylaの母親、2016年、フィリピン

しかしながら、彼女でさえ、以下の2012年の抜粋の通り、男性が世帯主であるという意見を示している。

インタビュー実施者: 男性は家長であるもの、という意見についてどう思いますか。

Kylaの母親: ええ、もちろん、そうです。だから、家族は彼らの姓を受け継ぐのです。

- Kylaの母親、2012年、フィリピン

4.4 保護者の男の子の行動に対する見解

男性が世帯主で意思決定者であるという見解を示す一方、保護者は一貫して、男性的に自然と認識される行動を圧倒的に否定的な言葉で表現した。彼らは息子を制御不能な・怠惰な・言うことを聞かない・時に彼ら自身や他者にとって危険な存在だと描写した。

保護者は自身の息子を「手に負えない」「怠け者」「自己中心的」等の形容詞で表現することが多く、それを根拠に、どうせやらないからと、彼らに課す家事を減らし、移動制限に従わないだろうからと、高い自由度を与えた。たとえば、ウガンダのJustineの父親は2018年、よい男の子とされる条件を尋ねられてこう答えた。

「大抵の男の子は言うことを聞かず、何か頼んでも、うやむやにして回避するでしょう。なので、よい男の子とは従順な子なのです。私の2人の息子を例に挙げると、下の息子は活発で創造的ですが、上の息子は大変怠け者で、ただ座っているのを好みます」

- Justineの父親、2018年、ウガンダ

エルサルバドルのRebecaの叔母は2020年、「女の子は慎重でなければいけない」と感じていた一方、「男の子は小さな男性のようなもので[...]幼い頃は未熟だったり、騒いだりしてもいい(笑)」と感じていた。Rebecaの叔母のその発言は、女の子と男の子に対する行動に関する期待の違いを明示しているだけでなく、それらが直接、大人の男女の行動と結びつけられている点も示している。つまり、男の子は「未熟」で「騒がしい」とされつつも、既に「小さな大人」とみなされ、むしろそれにより彼らの行動が許容されるのだ。

男の子は女の子より勉強に励まず、仕事熱心ではなく、コミュニティ意識が低いという認識が示されているが、また場合によっては、彼らには強力な動機づけや励ましが必要とみなされ、男の子は彼らの姉妹より多くの機会を与えられることが多かった。たとえば、ブラジルのSofiaの母親は2018年、彼女の2人の子どもの教育費を賄えなくなった場合にどうするかを熟考した。

インタビュー実施者: もしお子さんたちのうち、学校に通わせる子を選ばなければいけないとして、誰を優先させるか選択できるとしたら...誰の教育を受ける機会を優先しますか。その理由は何ですか。

Sofiaの母親: それは難しいですね。私は男の子を選ぶでしょう。

インタビュー実施者: なぜですか。

Sofiaの母親: 男の子は勉強しない言い訳を探しているだけだから、私たちが働きかけなければ勉強しません。私の息子が、ああ、今日はやりたくないって、そう言っているのを見えています。

インタビュー実施者: では、もし選ぶとしたら、男の子を学校に通わせ、女の子を家に残す選択をするのですか。

Sofiaの母親: ええ。彼女にとってはより...困難かもしれないけれど、勉強が好きだから、オンラインで勉強するでしょう。

- Sofiaの母親、2018年、ブラジル

その仮定のシナリオで、Sofiaの勤勉さは、彼女の兄弟の教育の優先を正当化する理由にされている。というのも、彼女の兄弟は自発的に勉強するとは思えない一方で、彼女は自分で勉強するだろうと考えられているからである。

カンボジアのReaksmeyの母親は2024年、父親が亡くなり母親自身も負傷したことによる、家庭の経済状況の悪化により娘が中途退学しなければいけなかったと説明した。Reaksmeyは「動揺していて、悔しい」と感じていた。その時点までで、彼女は結婚し、子どももいた。一方、Reaksmeyの兄弟は「友人とあちこち出歩き、家にあるものを集めて売ってタバコを買って、家事を手伝わず、携帯電話を使って時間を潰す」ため、中途退学したと説明された。母親は彼が薬物を使用する仲間とつるんでいることを心配していた。

そのインタビューから、Reaksmeyの兄は就学機会が与えられていながらも授業に出席せず、家事の手伝いもしていなかったことが暗示されている。一方、Reaksmeyは家庭の経済的状況のために就学できなかった。上述のHuongの物語と同様、男の子に就学機会が与えられることが多く、時にそれは問題行動の抑制手段として採られた。一方、勤勉で従順な女の子が、家族が男の子と女の子の両方の教育費を賄えないために、就学機会を失っていた。

男の子は元々制御が難しいものとされ、保護者は彼らがしたくないことを強制するのは不可能と感じていた一方、上述の通り、女の子はしばしば暴力的手段により家事労働を強制されていた。その認識は女の子に極めて重大な結果を生んだ。たとえば、ベナンのAliceの父親は2012年、Aliceの兄と姉が求められる水準の成績を取れず、留年したことに言及した。彼は、Aliceの姉は「母親がいつも商売のために外出していたので、家事の負担が課せられた」ためだと述べた。つまり、家事の責任の重圧のために学業成果に影響が出たのである。対照的に、Aliceの兄は「怠け者で勉強しなかった」から落第した、と彼は説明した。男の子は学業・家事に関して怠惰である、とみなされることが多いが、女の子は両方で一生懸命である、とみなされる場合が多かった。保護者の多くが息子に公平に責任を果たすことを求めるより、娘が学業と重い家事責任の両方をこなすことを求めている。

保護者の男の子の行動に対する意見は、いくつかの矛盾した事例によく示されていた。たとえば、ウガンダのMirembeの母親は2019年、女の子は生まれつき素行がよいとしながらも、男の子に対する心配事は女の子より少ないと語った。ブラジルのBiancaの母親は2019年、男の子と男性は「複雑」だとし、2人の息子が近所に中途退学したことに対する失望を述べたが、国を治めるのは女性には責任が重すぎる、と続けて述べた。トーゴのAnti-Yaraの母親は2019年、女の子は素行がよいが経済的決定は男性が下すべき、と述べた。保護者の男性性に対する意見は一貫して否定的であったが、それが男性と男の子に家庭や時に国家レベルまで、あらゆる機会・責任を委ねるべきかを疑問視するに至ってはいないようであった。

ウガンダのBetiの父親は2019年、「男の子は女の子より高い自由度を持つべきだ」、という意見に賛成するかを尋ねられ、保護者の考えの矛盾を直接的に指摘した。

Betiの父親: 強く支持します。大抵の保護者は、男の子に高い自由度を与えます。それが、女の子より男の子の方が逸脱行為に至ることが多い理由です。女の子を脅したり叱ったりすれば、すぐに言動を改めるのです。

インタビュー実施者: 男の子を節度ある生活に改めるようにする、何らかの策は思いつきますか。

Betiの父親: 保護者として私たちはそれができないでいます(笑)。男の子に高い自由度を与えている一方で、弱い立場であることを理由に女の子の自由度を抑圧しています。

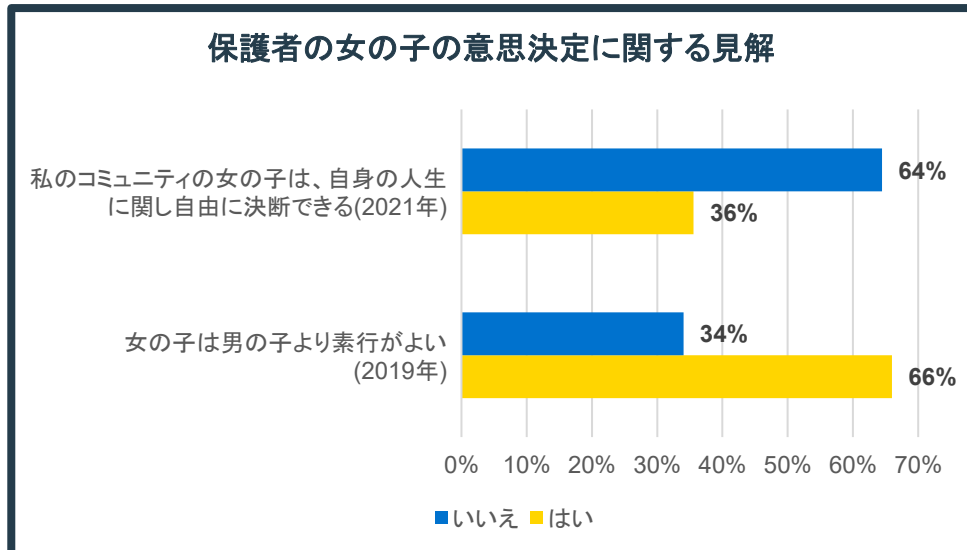
- Beti's father, 2019, Uganda

2019年、保護者の65%が「女の子は男の子より行儀がよい」という主張に同意した。それにもかかわらず、彼らは薬物使用・公共の場でのたむろ・女の子に対する誘惑・中途退学、といった男の子の「自然な」悪い行動に対し、女の子に対する制限の強化、という保護を行うことで対応していた。

4.5 女の子が認識している望まれない主体性

女の子はまた、生まれつき素行がよいとみなされていたが、保護者は彼女たちに自身の人生に関する決定を下す能力がない、とみなしていた。

保護者の女の子の意思決定に関する見解



調査対象者全体で、女の子は保護者の目から見て誤った選択を下す可能性については責任を問われる(負の主体性)一方、正しい選択を下す責任や自身の人生・家族・コミュニティをよい方向へ変える責任(好ましい主体性)を委ねられることは稀であることが一貫して確認された。

それは特に女の子のSRHRIに関して顕著だった。女の子は「悪い」友人の影響を受けたり、「不適切な」身なりや、夜遅くまで外出したり、性的関係を持ったりした場合、必ず非難の対象となった。だが、彼女たちへの自身の健康と幸福の管理のための必要な情報・医療サービスの提供は極めて稀だった。たとえば、ベトナムのLyが13歳の時(2019年)、Lyの母親は彼女の同級生が彼氏を持つに反対し、「彼氏を作ったらあなたを殺すと言ったのよ」、と語ったことを述べた。しかし同年、Lyの母親とインタビュー実施者は以下の会話を交わした。

インタビュー実施者: 妊娠や性行為等に関してはどうですか。彼女はそれらについて知っていると思いますか。

Lyの母親: 彼女はもう学んでいるので、知っていると思います。

インタビュー実施者: Lyと話しましたか。

Lyの母親: (笑)いえ、話していません。

インタビュー実施者: 彼女はあなたとこれについて話した時、恥ずかしがっていましたか。

Lyの母親: いえ、彼女は話していませんし、恥ずかしがり屋でもありません。

インタビュー実施者: それらのことに関して彼女と話すことを試みましたか。

Lyの母親: まだです。彼女はまだまだとても幼く、物事をあまりわかっていないので、妊娠や[出産]に関して話したことはありません。

- Ly's mother, 2019, Vietnam

調査対象者の保護者の多くと同様、Lyの母親は、Lyが恋愛関係を持つという「間違った」選択をした場合、Lyに責任があるとみなすだろう。しかし彼女が自身の身体や、そのような関係が何を伴い得るかを学ぶ責任を持つ年齢に達しているとは考えていない。

同様に、トーゴのAla-Woniの家族は常に彼女の教育を支援していたが、妊娠により学業を修了できないのでは、という極めてジェンダー的な懸念を示していた。父親は2016年に、「もし彼女が妊娠や、早くに結婚したら、彼女はもう学業を続けられないだろう」、と述べた。それらはAla-Woni自身が下し得る「悪い」選択として認識されていた。だが3年後、Ala-Woniの母親は、娘が性行為や思春期に関して何も知らないとし、「思春期やSRHIに関してはまだ話していません。彼女はまだ幼過ぎると思うのです」、と述べた。2023年までに、Ala-Woniは妊娠・結婚したが、彼女自身はそれを選んだものとは捉えていなかった。「今年妊娠したから結婚したの。[...]妊娠が結婚のきっかけで、結婚する前に成熟したかったの」。それは、保護者には、女の子は間違った選択をする可能性があるが、「正しい」選択ができる存在と信頼されていないことを示すものであった。ブラジルの調査対象者の多くの保護者の発言はそれを反映しており、Biancaの母親は2021年と2024年には、暴力や虐待から自身の身を守るの女の子の責任、と述べながらも、2023年には、Biancaが「愚かな」をする決断をする可能性があるため、彼女が自身で決断できると信頼できないと語った。

保護者が女の子の負の主体性を常に指摘し、好ましい主体性の発揮能力がないとみなすことは、彼女たちが意思決定を行うことを直接的に阻害するのみならず、女の子の意思決定に関わる能力への自信の育成を妨げる。

4.6 女の子の参加における重要な転換点である月経

幼少期に女の子は、コミュニティでの積極的な参加の機会を多少持っていたが、一旦月経が始まるとそうした機会が大幅に減少したことは明らかである。月経は全9カ国で一貫して、女の子の子ども時代/思春期での重要な節目とされ、保護者は彼女たちがもはや参加してはいけない活動や、今から求められる行動について強い意見を示した。

それらは、伝統・迷信から極めてジェンダー的な懸念・制限までさまざまであり、女の子の男の子との交流・行動範囲や運動・入浴・食事に関して焦点が当てられる傾向があった。調査対象者の女の子の多くは、月経が始まると男の子と遊ぶのを許されなくなったと述べた。ウガンダのAmeliaは11歳で男の子との交流を止めるよう指示され、フィリピンのDamaの母親は、男の子が言うことにもう二度と大笑いしてはいけないと、Damaに告げた。エルサルバドルのDorisは誰にも触らせてはいけない、と言われたという。

女の子と保護者の多くが、女の子に移動制限を課したことに言及した。女の子の多くが走らないように言われ、ベトナムのKimのように一切の運動を禁止された者や、ドミニカ共和国のRaisaのように遊ぶのを禁じられた者もいた。フィリピンの女の子の多くは月経が始まると入浴と水泳が禁じられ、Damaは叔母に内緒で入浴しに父の家にこっそり行くと述べた。

保護者はまた、女の子に月経開始時の食事制限を新たに導入した。ベトナムとドミニカ共和国の女の子は酸味のある食べ物を避けるよう指示され、エルサルバドルのGabrielとStephanyは魚と卵を避けるよう指示された。

女の子の健康に明らかな影響を及ぼすさまざまな誤情報と併せて、保護者が月経開始により女の子の社会生活やコミュニティへの関与の縮小を想定していることも明白である。彼女たちは、外出・交流・運動の減少と控えめな笑いをすることを期待されているのだ。

4.7 規範への抵抗をしながら、同時にそれを強化する保護者

時に、母親や他の女性保護者自身が大変勇気ある抵抗の形を示したこともあったが、彼女たちはそうした抵抗の形が娘の選択肢となり得ると認識することは稀で、それどころか、自身の娘の行動に対する期待の中で、自身が疑問視していたのと同じジェンダー規範を積極的に強化している場合さえみられた。

たとえば、多くの女の子が幼少期～思春期の間に、女性が世帯主の家庭で過ごしていた。ベナンのIsabelleの叔母もその1人で、叔母が世帯主とされていた。それ自体が、保護者自身も概ね支持している、男性が世帯主であるという規範への挑戦であるが、女性世帯主の多くは依然、ジェンダー的な家庭内労働の分担を強いていた。たとえば、Isabelleは男性のいとこたちより多くの家事を課せられていた。同様に、上述の通りフィリピンのKylaの母親は夫より遥かに多くの収入を稼ぎ、自身を家族の意思決定者だと述べていた。しかし、彼女はKylaの兄に家事を一切与えていないと2015年に説明し、「彼が唯一の息子だから」、と理由を述べた。ドミニカ共和国のNicollの母親は2020年、幼い子どもがいながらも大学の講座への受講登録し、それは彼女が外出中にNicollに弟妹の世話を任せることを意味した。

ベトナムのLyの母親は夫が亡くなった後、シングルマザーとなり、完全に自身の収入だけで自身とLyを養うことに対する経済的困難を経験していた。その状況下であっても、相続の慣習に関して尋ねられると、彼女は、息子がいたなら土地は彼に譲るだろう、と語った。

ベトナムのSenの母親は2017年、以下の興味深い考察を語った。

「個人的には黙っていません。基本的に、私が自身の意見を口にすれば、人びとに私は無教養で夫に対して無礼だと思われませんが、私は無礼じゃなくて、言わなければならないのです。昨日彼が間違っていたから、私に何も言い返しませんでした」

- Sen's mother, 2017, Vietnam

彼女は続けて、「私は女性ですが、性格は男性みたいなものです」、と述べた。Senの母親はコミュニティで女性に期待される行動に明らかに抵抗していたが、2018年に娘への望みを尋ねられると、「私も彼女が従順で友好的な性格であって欲しいです」、と回答した。

ウガンダのNimishaの母親は、路上での3人組の強盗未遂に遭い・抵抗したという驚異的な勇気ある行為を語った。彼らは彼女が衣服の下に金銭を隠していると主張し、それに反論するため、彼女は公の場で衣服を脱ぎ、彼らは結局逃げ去った。だが彼女は、レイプされる危険に晒されるため、ユース女性にそのような行動は不可能だとした。このような脅威のため、彼女はNimishaの行動を制限し続けた⁹⁴。

まとめると、保護者はさまざまな矛盾する意見を持つことが多く、機会の平等を強く支持することもあれば、場合によっては規範に対する疑問視さえ示すこともあった。しかし、女の子が自身の人生に関する決定を下す能力を有しているという認識はほとんどなく、彼女たちがそれらの規範を自身で問いただすに十分な年齢に達しているとも考えていなかった。時に、自ら規範に抵抗する母親でさえ、娘に規範を強制し、女の子の抵抗に対する世代間の支援は限定的であるように見えた。多くの家庭で、女の子がコミュニティに十分に関与するための支援リソースを欠いており、貧困やインフラの不備により多くのジェンダー的役割が強化されていた。しかし、女の子の抵抗を可能にする、あるいは不可能にする環境を創出する上で保護者の考え方は重要なリソースでもある。したがって、以下に示す女の子の意見や行動に関する記述は、彼女たちがジェンダー規範へ公然として挑戦することへの支援が全体的に欠如しているという文脈で読まれる必要がある。顕在的な抵抗に成功した女の子もいたが、女の子の多くは控えめで戦略的な抵抗の形を採用した。私たちの枠組みを用いて、彼女たちが変化を起こすのを支援する方法に明確な示唆を与える、いくつかの興味深い事例を特定することができた。

5. 「現実の選択、現実の生活」 調査対象者の女の子の日々の 抵抗

ここから、女の子の意見と行動に焦点を当てる。特に、ジェンダー規範に抵抗し、期待される行動に「逆らう」彼女たちの意見と行動、つまり「女の子の日々の抵抗」に重点を置く。私たちの枠組みに基づき、女の子が以下の異なる種類の抵抗の形を示す事例を考察する：平等主義的主張・規範への問い直し・態度的抵抗・明示的抵抗・秘密の抵抗・顕在的行動的抵抗。

5.1 女の子の平等主義的主張

ジェンダー平等に関する広範な見解を共有してジェンダー規範に挑みつつも、現在のジェンダー的役割に対するより批判的な問いかけや、不平等への積極的な挑戦行動・姿勢を示すには至っていない状況を考察する。それは女の子のジェンダー規範への抵抗について理解するための重要な第一歩である。それにより、平等という概念への関心と、不平等への挑戦行動との間の隔たりを認識できる。女の子の多くがそうした平等主義的主張を示したが、本報告書の後述で明らかになるように、皆が自身の信念に基づく行動ができるとは感じてはいなかった。

5.1.1 教育の平等な享受が実現すべきとする考え

調査期間中、女の子は教育を受けることへの個人的な願望を語るだけでなく、教育の平等な享受に対する全般的な重要性も語っていた。それは各国で何名かの保護者が示した、女の子が教育より家庭内領域や将来の妻・母親としての役割を優先すべきとする伝統主義的な見解に逆らうものである。たとえばベナンの保護者の多くは、教育が女の子に自由を与え、結果的に彼女たちが不遜になる、と懸念していた。

女の子に対し2018年、「男の子と女の子は平等な教育の享受の機会を持つべきか」と問うたところ、99%が賛成と回答した。また、就学が女の子と男の子のどちらにとってより重要か、または同等に重要だと考えるかについても尋ね、さらに、女の子の就学が重要であるか、そしてその理由も尋ねた。質問された女の子全員が女の子の就学が重要だとしたが、彼女たちの13%がその理由を説明できなかった点は、特筆すべきである。それは私たちの枠組み上の「平等主義的主張」の状況を反映するものであり、平等へのある程度の支持は示すが、既存の規範に対する主体的な問いかけが必ずしも伴わないことを明示している。

女子教育を女の子の基本的権利ではなく、主に女性が担う役割を果たすための有用な手段、と捉える実利主義的な考えを支持する女の子も何名かみられた。2018年には、教育を将来保護者の世話ができるようになるための手段、と捉えていることを示す女の子がみられた。トーゴのNini-Rike(12歳)は、「役に立てるようになり、保護者を助けられます」、と述べ、ウガンダのBetii(11歳)は、「従順な女の子になれます」、と発言した。こうした考え方は女性と女の子をケア提供者と位置づける規範的役割を強化する見解である。トーゴのEssohanaも2018年(12歳)、「保護者が年を取ってから彼らを助けることができるよう、女の子は学校に行つて多くを学び、知識を習得しなければいけません」、と述べた。

同様に、ウガンダのRebeccaも女の子と男の子にとって教育は等しく重要とする意見を支持しつつも、教育は本質的に攻撃的であるとされる男の子の、ジェンダー規範に根ざしている「悪い行動」を抑止する上で重要だと考えていた。

「なぜなら、男の子は勉強しないと、アルコール・薬物・タバコ等、よくないことをし始めるからです」

- Rebecca, 12歳(2018年)、ウガンダ

だが、女子教育そのものの重要性を主張する女の子も何名かみられた。つまり、将来妻や母親としての役割を十分に果たすための手段としてではなく、識字能力の獲得・公共生活や労働市場への参加・将来的な参加の可能性を広げる手段として捉えていたのである。

「学位を修めれば、大人になってから弁護士や医者や秘書でも、何にでもなれるからです。それに対し、就学しなければ何も知らないままなのです...」

- Valeria, 11歳(2018年)、エルサルバドル

2023年までで、女子教育の重要性に関する意見がさらに寄せられた。エルサルバドルのGladysは女子教育の価値に関し、次のように説明した:「新しいことを学び、将来の勉強が彼女たちの助けになるからです」。同様に、トーゴのEssohanaは、保護者の世代が教育を受けていないため、彼女のコミュニティで女子教育は大変重視されており、女の子が就学し安定した未来を築く姿を見たがっていると語った。

「女子教育は有用です。女の子にも学び、将来仕事を見つける権利があるからです。それに、私たちの保護者は就学しなかったので、私たちは学ばなければいけません」

- Essohana, 16歳(2023年)、トーゴ

Essohanaの発言は、彼女の教育に対する意見が時とともに発展したことを示している。女の子が学ぶ権利を持ち、保護者が成し遂げる機会を得られなかったものを実現する権利を有することを彼女は認識していた。

5.1.2 キャリア志向と経済的エンパワーメント

調査期間の後半で、女の子から女性の経済的エンパワーメントに関する意見や、女性は経済的自律性を求め、伝統的に男性が支配的なキャリアに進むべき、という考えを支持する意見を聞くことができた。2024年に、自身のコミュニティでは男性優位の領域でありながらも、農業技術を学ぶことを志す女の子が、女性の同級生にもその領域への進出を促しているという物語⁵に対し、女の子に意見を聞いた。

その物語に対し、Tanは以下のように話した。

「今は状況が変わって、女性は男性と同様、あるいは男性以上に多くのことができます。誰にも依存していない、経済的に自立した女性も増えています。だから、そう考える人もいれば、時代遅れの考え方に固執し、現在の文化水準に追いついていない人もいます。物語の中の男性は古い考え方をしていると思いますが、[物語の中の女の子]は前向きに考えています。自己変革とは究極的には、自身の人生を変えることです」

- Tan, 17歳(2024年)、ベトナム

Tanの平等と女性の経済的自律性に関する痛切な意見は、調査対象者の間で共有され、各国の女の子がその物語に共感した。

女の子の多くが架空の女の子自身の資質に注目し、トーゴのFezireは彼女を「勇敢」と評した。カンボジアのMonyは自身の目標を共有できる勇気があると述べ、Kannithaは法学の勉強に粘り強く取り組んでいた自身の姿が物語に重なること語った。

「その女の子は優秀で賢く、それが実現できれば成功するでしょう...彼女は自身を信じ、勇敢で、農業は女の子には無理だという人の言葉に打ち勝つほどに強いです」

- Kannitha, 15歳(2022年)、カンボジア

⁵ 物語の全文と付随する質問については、2024年版「現実の選択、現実の生活」の技術報告書83ページ[「Out of Time: The Gendered Care Divide and its Impact on Girls」](#)を参照のこと。

ベナンのAlice・Annabelle・Isabelleとドミニカ共和国のDariana・Raisaは、女の子と女性が何でもできるという点で同様の見解を共有し、女性の経済的エンパワーメントは制限されるべきではないと述べた。たとえば、Isabelleは2024年(17歳)、「男性にできて、女性にできないことはありません。女性は決意すれば、男性と同様に何でもできます」、と述べ、Raisa(18歳)は、女性が学ぶ学問により軽んじられるべきではなく、それが「女性の能力を制限すべきではない」と述べた。それらの見解は、職業的平等を追求するユース女性の覚悟を彼女たちが称賛していることを示している。

同テーマに関する女の子の意見は、女の子を努力し続ければ何でも達成できる存在とする「女の子の力」言説を反映している。それらの女の子にとって、女性が「勇ましく」「勇敢で強く」「覚悟があり」、「自身の人生を変えることに前向き」に考えさえすれば、女性は男性ができることは何でもできるのである。そうした発言は機会均等が実現すべきと考える点で「期待に逆らう」が、彼女たちのコミュニティでのジェンダー規範への批判的問いかけをするわけではない。また、女性が機会均等を達成するまでの過程で経験し得る数々の障壁や考えを考慮した上で、コミュニティで女性が実際に男性と同様にあらゆることを成し得るかに対する深い考察を示しているわけではない。

機会均等の実現を信じる一方で、コミュニティで男女が通常担う役割に対する批判的な問いかけを十分になされないのは、女の子自身のキャリア志向にも反映されていた。女の子の多くがキャリアを築き自身で収入を得ることを望んでいたが、そうした志向の多くは伝統的に女性的/女性の役割とされるキャリアに集中していた。調査対象者の女の子の大多数は、人生のどこかの段階で、看護師・助産師・他の医療職・教師といったケアの専門職へのキャリアを志していた。

「看護師になりたいです...他の人を助けられるように」

- Jasmine, 14歳(2020年)、フィリピン

「成績がよければ、助産師になれます。それが私の夢です」

- Fezire, 17歳(2023年)、トーゴ

ケア専門職は、他者を助けること、と関連するものである。それは、女の子が長年の無償のケア労働を通じて植えつけられてきた、主要なジェンダー的美徳である。このように、彼女たちの志向の形成に対するジェンダー規範の影響が認められた。

2024年までで、少なくとも20%の女の子が教師・助産師・看護師のどれかを志望した。8名のアフリカ出身の女の子は裁縫師や仕立て屋を志望し、5名の女の子が美容やファッション関連のさまざまな職業を志していた。彼女たちは学業修了後のキャリア選択での機会均等を強く支持していたが、その職業選択はケアに対するジェンダー的な認識や慣行にほとんど挑んではいなかった。

だが、他の女の子の中には、女性が多くない職業領域でも、働く女性、特に自身を想像していることを示す将来の志望を語った者もいた。女の子の13%が事業主や会計士を志す、または経済学を学ぶことを語った。警察官や犯罪学の道に進むことを希望する女の子も何名かおり、フィリピンのDoloresは消防士を、カンボジアのKannithaとウガンダのBetilは弁護士を志望した。女の子の39%がSTEM関連分野⁶でのキャリア志向を示し、内6名が医師を志していた。だが、そうしたキャリアの追求を女の子が男の子同様に可能なのかと疑問を抱く女の子は極少数で、時とともにそれらの志向の多くが変化し、彼女たちは絶えず自身が得られる機会を再評価し、女性ロールモデルの行動を観察していた。全体的に、彼女たちはキャリアを築き収入を得たいという強い願望を持っていたが、女性と女の子に適切とされる典型的なキャリアに疑問を呈したり、与えられた機会に対する不正義感を示したりする者は極少数だった。

5.1.3 平等な自由

「現実の選択、現実の生活」の調査対象者の女の子が成長するにつれ、彼女たちの自由はさまざまな形で大きく制限された。彼女たちが思春期を迎えると、保護者は彼女たちの身の安全を危惧し、結果、彼女たちの移動や公共の場の利用を制限した。

⁶ 科学・技術・工学・数学。

また、保護者だけでなく女の子自身の中にも、活動の基盤を家庭内(つまり家事)とする従順な「よい女の子」であるべき、という期待があり、それが女の子の行動範囲を男の子より制限していた。

2021年と2024年、女の子に「男の子は女の子より高い自由度を持つべきだ」という主張への賛否を尋ね、2021年に反対したのは59%だったが、2024年にはそれが81.5%に急増した。それは、男の子と女の子の自由は平等であるべきと考える女の子が大多数に達したことを示している。

また、彼女たちは自由が平等であるべきと考える理由についても知見を得ており、彼女たちの多くが「私たちは皆平等だから」(Raisa, 15歳(2021年)、ドミニカ共和国)、男の子と女の子は同じ権利を持つべきだと主張した。

各国で、彼女たちは男性と男の子だけが自由を享受できるべきではないと述べた。

「男性だからといってしたいことが何でもできるわけではありません。私たちにも外出する権利があります」

- Karen, 14歳(2021年)、エルサルバドル

「女の子もしたいことができるべきです。男の子だけじゃなくて」

- Dama, 15歳(2021年)、フィリピン

「男の子も女の子も同じ自由を持つべきです。どちらも人間で、同じ権利を持っています」

- Folami, 15歳(2021年)、トーゴ

「男の子と女の子は平等だから、男の子が女の子より多くの権利を持つ、なんて思ってはいいけません。男の子がすることは、女の子もできます」

- Tan, 14歳(2021年)、ベトナム

ウガンダのShifalは2021年(15歳)、代替的な「期待に応える」意見を示した。自由は男女平等であるべきだが、子どもには制限が掛かるべきである(「子どもは皆、[導かれる]べき存在であるため、彼らが望むままに行動できる自由を与えるべきではない」)。

2024年に再度尋ねられた際も、女の子は「男の子も女の子も人間で、私たちは同じだから」(Yen, 18歳、ベトナム)・「女の子と男の子は同じ権利を持つべき」(Fernanda, 18歳、ブラジル)・「今すぐ平等であるべき」(Jocelyn, 17歳、フィリピン)、という強い思いを抱き続けていた。ベナンのIsabelleは2024年(17歳)、その主張に支持を示したが、男の子と女の子が平等な自由を持つことは現実ではみられないと指摘し、「保護者は男の子に女の子ほど厳しく縛りを課しません」と語った。

ウガンダのSheila・Sylvia・Nimisha・Dembe・Beti・Ameliaは全員、男の子が高い自由度を持つことは女の子が危険に晒される可能性を高める、という別の根拠で反対した。彼女たちは男の子と女の子の間の平等を主張したが、その根拠に男の子と女の子の行動様式に関する本質主義的見解を置いた。ここでも女の子は平等主義的主張に強く賛成を示したが、皆がジェンダー的な行動様式を疑問視する段階まで踏み込んだわけではなかった。

全体的に、女の子の大多数は機会均等を支持し、男の子と男性ができることは彼女たちもできるべき、という考えを示した。彼女たちは概して、実現を阻み得る障壁のために、そうした機会を得て・実現できるかに疑念を抱くことはなかった。それでも、それらの調査結果は、彼女たちがそのような可能性の実現が可能な環境で成長するのを望んでいることを示している。

5.2 規範への問い直し

女の子がジェンダー規範を疑問視する状況に焦点を当てる。それには、特定の役割や規則がなぜそうであるのかへの問い直すこと・それらが自然的な必然性によるものとされることへの疑念・不公平と断言はしないまでも、別のあり方も可能ではないかという思考も含まれる。

それは主に、ジェンダーに関する本質主義的見解を、明示的に、または行動により暗示的に問い直す形で示された。それには、おもちゃや特定の遊びを「男性的」・「女性的」と分類させる、幼少期の遊びに関する規範を気づかないようにしたり、明らかに無視したりするといった単純な行動も含まれた。

たとえば、フィリピンのChristineに2014年(8歳)、一番好きなおもちゃを尋ねた際、彼女は人形とトラックと答えた。

時に、疑問視は明確なものとなった。たとえば、トーゴのAyomideは2016年(10歳)、「男の子はサッカーをしていいです」と口にし、そのことが彼女をどんな気持ちにさせるかを尋ねると、「不快で、だから彼に「なぜ私にサッカーを禁止させるの」と尋ねます」と答えた。インタビュー記録からは、Ayomideが上記で言及していたのが男性の親族や教師を指しているのか、あるいは、おそらく女の子を遊びに参加させなかった男の子たちを指しているのかは不明である。だがAyomideの発言から、遊びに関するジェンダー的なルールを疑問視し始めたことは明白であり、それは自身に対してだけでなく、彼女の遊びを妨げていた男の子や男性に対しても向けられていたのだ。

同様に、ドミニカ共和国のDarianaとトーゴのEssohanaのそれぞれの考察は、広範にみられる男の子に女の子より高い自由度を与える子育ての仕方の背景にある理屈を、彼女たちがいかに疑問視していたかを示している。

「一方にルールを設ける際には、双方に設けるべきだからです。つまり、男の子だからといって、女の子より大きな自由を与えられるべきではありません。双方に危険を伴います」

- Dariana、18歳(2024年)、ドミニカ共和国

「どこにも、男の子は自由であるべきと書かれていなかったからです」

- Essohana、18歳(2024年)、トーゴ

上記から、DarianaとEssohanaが、男の子と女の子の扱われ方の違いに気づき・疑念を抱き始める様子が伺え、それが単に「自然な」状態だという考えを否定しているのだ。

た女の子は、男の子と女の子の自然な性質とされるものに対し、強い疑問を抱いていた。彼女たちの多くが、特に男性と男の子が元々暴力的であるとする考えを疑問視していた。ブラジルのBiancaは2021年(15歳)、男性が本質的に暴力的なのではないとし、「生まれつきだからではなく、育てられ方次第なのです」、と論じた。Camilaも同様に2021年(15歳)、「彼らは世の中から暴力的になることを学ぶのです」、と述べた。2名の発言から両者が、ジェンダー的役割は、外的要素が内在化され実行されるものだと認識していることが認められる。同様にエルサルバドルのMarielとベトナムのQuynhは、その考えは正しくなく、すべての男性が暴力的であるわけではないと論じた。

「すべての男の子と男性が女性に対し攻撃的というわけではありません。女性を尊重する男性も確かに存在するので、彼らがどんな価値観に基づいて育てられたかにより、異なるのかもしれない」

- Mariel、14歳(2021年)、エルサルバドル

「男性は女性より攻撃的であったのは、大抵は過去のことです。今は平等で、男の子は暴力的・攻撃的な行動を起こすことなく女の子いつも遊びます」

- Quynh、14歳(2021年)、ベトナム

2021年、何名かの女の子が女性も攻撃的・暴力的になり得るという認識を示した。ブラジルのJulianaとSofia(14歳)は、「男性より攻撃的な女性もいます」、と述べ、エルサルバドルのKaren(14歳)は、女性が「強い性格」を持つ場合があると発言し、ベトナムのTan(14歳)は、「私みたいに女性の方が攻撃的な場合もあります(笑)」と述べた。

「男性は女性より生まれつき暴力的・攻撃的である」という主張を支持しながらも、Damaは2021年(15歳)、「男性は本当に傲慢です。時々「女の子は男性がやることなどできない」って言います」と述べた。それは、男性は元々攻撃的と捉えたり、女性の役割は不変であるとしたりする位置付けを、Damaが許容していなかったことを示している。

その主張への意見を2024年に再度尋ね、時とともに彼女たちの意見がどう変化したかを検証した。2021年(14/15歳)では、男の子と男性が女の子と女性より本質的に攻撃的・暴力的であるという主張に反対した女の子は32%だったが、2024年(17/18歳)には38%がその主張を疑問視した。

以前より多くの女の子が、男性の暴力は「家庭で学ぶこと」によるものとし(Rebeca、18歳(2024年)、ドミニカ共和国)、「[攻撃的に]なるよう教えられれば、そうなります」(Gabriela、17歳(2024年)、ブラジル)、という事実を認識していた。ドミニカ共和国のMadelinは2024年(18歳)、男の子は「父親の行動を見て」それを真似する、と指摘した。暴力が先天的なものではなく学習の結果であるという認識の広がりにより、女性も暴力的になり得ると認識する女の子も増えた。ドミニカ共和国のValerieは2024年(18歳)、「(女の子も男の子も)[暴力を]学ぶのだと思います」、と述べた。

「男性が皆攻撃的ではないと同様に、暴力的な女性もいます」

- Reine、17歳(2024年)、トーゴ

「男性だけでなく、皆が攻撃的・暴力的になり得ると思います」

- Ly、18歳(2024年)、ベトナム

「私の周りで、ほとんどの男性は攻撃的ですが、女性も35~40%はそうです」

- Yen、18歳(2024年)、ベトナム

以前と同様、「男性全員が攻撃的・暴力的なわけではない」(Christine、18歳(2024年)、フィリピン)という現実を自身の周囲を理由に、主張に反対する複数名の女の子がみられた。Quynhは自身の家族関係がその考えとは異なることを説明した。

「それは正しくないと思います。たとえば、私の家では父は静かで、母の方が大変真剣に物事を捉えるので怖いです。それに兄は優しく、家の掃除もしてくれるし、料理も上手です」

- Quynh、17歳(2024年)、ベトナム

自身の周囲を考慮し、人びとが実際にはジェンダー規範的理想からいかに逸脱しているかを目にしたことで、女の子は教え込まれたジェンダー本質主義的規範を疑問視し始めた。したがって、彼女たちが周囲のジェンダー規範を安全に問い直せる環境で育つようにすることが重要である。それは、それらの規範への明らかな抵抗ではなくても、ジェンダー的役割は必ずしもそうでなければいけないのか、と疑問視する重要な一歩であり、女の子の多くにとって、その問いが一層主体的な抵抗の形へとつながったのだ。

5.3 態度的抵抗

女の子がジェンダー的役割に対し強い嫌悪感や不正義感を示し、ジェンダー規範への態度的抵抗を示す状況に言及する。しかしながら、態度的抵抗の重要な特徴として、彼女たちは秘匿性が保証されたインタビュー外で意見を述べたりや保護者の指示に明白に背くといった、一層顕在的な形でジェンダー規範に挑むことができないという点がある。

5.3.1 女の子は家庭内の役割が不公平だと描写する

世界中で、無償のケア労働の4分の3超が女性と女の子によってなされている。これは、ケア労働が女性的な役割であるとする社会のジェンダー規範や家庭内の力関係により、女性の家族の構成員が担わざるを得ないためである。調査対象者全体で、女の子は平均1日当たり5時間15分を無償のケア労働に費やしていた一方、彼女たちの兄弟や他の男の子の仲間が担う家事は、彼女たちより遥かに少なかった⁹⁵。

女の子の多くは、ジェンダー的性別役割の区分けや期待を疑問視するだけでなく、それらが不公平で男の子を優遇していると認識していた。彼女たちは、特に家事分担に関する現状の取り決めに対する不公平感を示した。

2017年までで、ウガンダのSylviaは学校で女の子が男の子より雑用を多くさせられていることに気づき、それを不公平と考えていた。トーゴのAnti-Yaraも同様に2019年と2021年に家事分担に対する不満を示し、トーゴのLadiも2021年(15歳)に兄弟について、「彼らは今も農作業はして家事は女の子の仕事だと言って、嫌がり続けていて、腹立たしいです」、と語った。

ベナンのCatherineは2015年(8歳)、男の子と女の子の時間の使い方の違いに気づき、彼女が同い年の他の子どもほど遊べず、母親の手伝いに行かなければいけないことがあることを認識し、「不公平だ」と訴えた。

2015～2019年に、ブラジルのGabriela・Bianca・Camilaは皆、男の子が女の子よりこなす家事が少なく、遊ぶ時間が長いのは不公平だと述べた。たとえば、Camilaの兄弟は彼女より家事をしないことに言及した。

**「自分の家なのに、彼らに頼むと泣くので[女性]がしないといけません。男性は何もせず見て
いるだけ。カッコいいかは疑わしいけど」**

- Camila、12歳(2018年)、ブラジル

この家事分担を振り返り、Camilaは男の子が遊ぶのを楽しめる一方で自身ができないのを悲しく感じていた(「悲しい、ただ従うしかないの」)。

カンボジアの何名か女の子は家事の分担に対する不満を語った。Nakryは2016年(10歳)、「男の子は怠け者だから、水汲みは男の子で、家の掃除は女の子がします」、と不満を述べた。Sothanyも2016年(9歳)、女の子に期待されている形と同じ形で男の子が保護者を手伝わないのは不公平だとした。「不公平です。男の子が保護者を手伝わないのはとても悪いことだと思います。保護者を手伝う男の子は極少数であることに気づきました」。Monyは2018年(11歳)、ジェンダーに基づく役割の分担が、平等ではないと認識しつつも「男性が女性の仕事を助ければ平等になります」、と述べた。

フィリピンのDarnaは2012年(6歳)、当時の状況に対する怒りを語った。Darnaは兄が家事をせずにバスケットボールをする姿に怒りを覚え、学校で男の子が騒いで女の子の物を壊すのを嫌がった。Darnaは2020年、兄や父親の自身に対する過保護な態度を疑問視し、不満も多少示した。彼女は学校のグループ課題をする場合を含めて、友人と頻繁に外出したかったが、それができなかったのだ。

「同級生と共同で授業の課題がある時、時々同級生の家に課題をするために行く必要があります。でも、私の兄は、特に家が自宅から遠い場合、許してくれません。そうされるのが嫌です」

- Darna、14歳(2020年)、フィリピン

Darnaは2020年、父親が自身に対して「私が女の子だから」といって兄弟よりも厳しく、「兄たちはしたいことは何でもできる」、と語った。Darnaはこの考えを2021年(15歳)にも示し、それまでには明示的抵抗へと発展させ、男の子と女の子の間の平等な家事の分担・男の子への暴力的にならないようにさせる教育・女の子の意見の傾聴・男の子と女の子への同等な自由の付与を大人に訴えた。同年、彼女は、「女の子も自由を享受できるべきです。男の子だけじゃなく、女の子もやりたいことができるべきです」、と述べた。

5.3.2 女の子は男の子と女の子に対する期待の違いが不公平だと描写する

エルサルバドルのGladysは2021年(14歳)、女の子と男の子に期待される行動の違いや、男の子の方が遥かに大きな自由を与えられる傾向に言及した。同年、コミュニティである女の子がスポーツ施設を女の子が利用できるよう提唱する物語に対する反応として、彼女の学校の状況を語った。

「[教師たちは私の女の子の友人を]遊ばせず、男の子だけが遊べていたので、彼女たちも遊べるようにするよう、彼女たちは彼らに訴えに行きました。そしてそれが実現し、皆が遊べるようになりました」

- Gladys、14歳(2021年)、エルサルバドル

Gladysは2021年、サッカーや外出等、女の子には許されないが男の子ができることが他にもあることに気づいた。「男の子はどこでも行けるけど、女の子はダメで、ずっと家にいないといけません」、と発言し、それを不公平だと考えていた。「おかしいです。皆平等に扱われるべきだから、そうあるべきではないです」。

エルサルバドルのGabrielaは2016年、おじが家事をしないのは不公平だとし、また男の子が女の子の同意を得ずに触ったり「ブス」と呼んで嫌がらせをしたりするのが嫌だと語った。

Gabrielaはまた2021年、サッカーは女の子にはできない、男の子がと言うのをやめてほしいと語り、2024年には、女性がコミュニティの意思決定プロセスに関与していないのは間違っていると彼女は考えていた。

フィリピンのJasmineは2024年(18歳)、「女性が意思決定に関与していないのは不公平です。指導者の大多数が男性で、それは公平ではありません」、と述べた。ベトナムのYenも2021年(15歳)、DarnaやJasmine同様、ジェンダー規範に対する強い態度的抵抗を示し、「男の子を女の子より優先するという考えをなくす」ため、女の子の重要性を人びとに教育する必要性を語った。

5.3.3 女の子が従わないと脅す

不満の表明から一歩踏み込み、エルサルバドルのKarenは、保護者への怒りを語った。Karenは2020年に母親の指示に反抗するようになり、母親はKarenが怒り「今ではそれらをさせるのが困難になった」、と述べた。注目すべきは、同時にKarenが2020年(13歳)、「話しても話しても、聞いてくれず、気にもしてくれません。かんしゃくを起こせば殴られる、そんな感じです」、と自身の意見に耳を傾けてもらえていないと感じている、と話した点である。2021年まで、Karenは外出禁止という罰を受けるようになったと説明し、それは前年に母親が語った内容と関連する。Karenは2021年、「宿題をしない場合・家事をしない場合・時には自身の洗濯をしなければいけない場合、外出できません」、と説明し、「私は怒って、母との交渉を試みます」、と話した。Karenの物語は、女の子の保護者から強いられる規範への抵抗の一例であり、彼女の場合は怒りの表現によって抵抗している。彼女は完全たる家事の拒否や母親への反抗等の顕在的行動的抵抗は示していないが、母親に対する怒りの表現により抵抗を示している。

同様に、ベトナムのLyやエルサルバドルのDorisとGabrielaは、自身に対する期待への抵抗手段として、保護者への不服従をほのめかした。Lyは2015年、女の子は従順だという理由で多くの仕事を強いられているのは、不公平だと述べた。

「疲れと不公平感を感じます。女の子は従順だから、もっとしなければいけないなんて...男の子は家事をしなくてよく、ただ遊んでいます」

- Ly、9歳(2015年)、ベトナム

それは特筆すべき事項である。なぜなら、彼女は2016年までには、女の子が年長者の助言に従わないことで何が起きても構わないと発言しており、彼女の反抗への意欲と抵抗の強化を示唆しているからである。

Gabrielaは2020年(14歳)、父親に何度か許可を得ずに祖母や叔母の家を訪ねると告げた。父親が気づき、彼女が外出の準備をする姿を見て「ああ、時々私に逆らいたいのか」、と口にしながら、実際にはGabrielaは家を出る直前で止めた。それは態度的な反抗の1つの形であり、Gabrielaが父親の規範に顕在的に逆らえるとは感じられなかったとはいえ、その意思の表れであった。Gabrielaの父親は2020年、「彼女はあまりに自由を求めている...でも、私がダメと言えば、それは絶対です。すると彼女は落ち着きます。だから時々、何とか、突拍子もないことを言うのです」、と話した。Gabrielaは自由に対する姿勢と保護者への抵抗を続けた。Gabrielaは2024年(17歳)、女の子も平等に自由を享受できるべきで、保護者の影響を受けずに自由に決断できるべきだと語った。「大多数の保護者は、彼ら自身が望むように[女の子が]生きてほしいと思っているからです」。そうした洞察から、女の子がジェンダー的役割や期待に対して不公平感を示していることがわかり、それは態度的抵抗の重要な形である。

それらの調査結果は、態度的抵抗を示す女の子が、自身に期待される行動や役割に対し不満を抱いていることを明示している。だが彼女たちは、そうした気持ちを顕在的に発言できたり、大人が自身の声に耳を傾けてくれていると感じられたりはしていない。したがって、女の子が安全で自由にジェンダー不平等に対する不正義感/嫌悪感を表現できる環境を、大人が整える必要がある。

5.4 明示的抵抗

私たちは、明示的抵抗という用語を、女の子が必ずしも自身でジェンダー不平等に対する顕在的行動的抵抗を行いはしないが、女の子の抵抗という考えの支持やジェンダー不平等への働きかけ強化を他者に求めるあらゆる方法を女の子が採る状況を指して用いている。

女の子が、大人がジェンダー不平等を生み出す役割を果たしていると特定すること自体が重要な抵抗の形であると私たちは認識している。これは不平等そのものに対する抵抗であるだけでなく、メディアや多くの女の子が自身だけでジェンダー平等を達成できる能力を持つと位置付ける、女の子のエンパワーメント・キャンペーンにおいて、支配的な言説に対する抵抗でもある。彼女たちが求めている変化の形を傾聴することは、彼女たちの抵抗への支援を図る大人や組織にとって明らかに大切な事項である。

5.4.1 女の子は男の子の家事責任の増大を求めている

家事分担に対する不正義感、または態度的抵抗を示す女の子の中にはさらに踏み込み、家事の公平な分配の必要性を主張し始めた者もみられた。しかし、その調査結果を過大評価すべきではない⁷。というのも、長年の調査で一貫して、女の子は時間に対するさまざまな要求に圧倒し疲弊していたが、家事によって家庭に貢献していることに対し、彼女たちが頻繁に誇りに感じていたためである。だが、家庭内のジェンダー的な労働分担を当初受け入れていた女の子の中に、成長するにつれ変化を求める声を上げ始めた者もみられた。

たとえば、トーゴのTeneは2017年(11歳)、よい女の子は「家では言われたことはすべてやらなければいけません」と語り、一方よい男の子は、「両親を敬い、畑仕事をします」と述べた。彼女は2020年に、自宅と学校で血洗い・水汲み・調理・掃除を担っていると語った。家事が楽しいかと彼女は尋ねられ、「はい、全部好きです。私によいことですから」と答え、したくない家事はないとした。しかし2021年、COVID-19パンデミックと学校閉鎖で男の子と女の子の時間の使い方が変わったかを問われ、彼女はこう回答した。「私の兄弟の時間の使い方は変わっていません。畑仕事はしますが、家事は嫌がります。私は彼らも家事をやるべきだと思います。私は畑仕事を手伝いますが、彼らは私の家事を手伝おうとしません」。彼女は不平等に気づき始め、男の子はより家事をすべきだと求めていた。

同様に、ウガンダのJustineは2014年(7歳)、血洗い・敷地内の掃除・水汲みをしていると語り、家での仕事量をどう思うかと尋ねると、「特に何も感じない」と答えた。しかし彼女は2018年(11歳)、状況に対してかなり強い感情を抱いているように思われた。幼少期を通してJustineは常に医者になることを望み、家事の分担がその実現に対する障壁となり得ることを12歳の時には認識していたようであった。特に彼女は、自給農業(「畑に行くこと」)に男女共従事しているが、家事の時間を確保するために早朝に行かなければいけないのは女性である、と指摘した。

「男女とも畑に行きますが、時間通りに食事の準備をするように戻るのは女性なので、不公平です。つまり女性が畑に行くのは、家事をこなすために早朝でなければいけません。女性も収入源を探しているのに、男性も家事や料理をすれば問題ないですが、そうではないので、不公平です」

- Justine、11歳(2018年)、ウガンダ

Justineは変化への望みを示し始め、役割が平等に分け合われるのは「問題ないだろう」と述べている。

ドミニカ共和国の女の子の多くは当初、家庭内の役割を受け入れていたが、思春期を迎える頃には変化を求め始めた。Griseldaは2019年(13歳)、「男の子も女の子と同じ義務を持つべきです! [...] [彼らが持たない]のは怠惰だからです」、と述べた。Darianaは2019年(13歳)、彼女の兄弟により家事をさせるべきだと主張し、「[しないのはおかしいです。]男の子であっても家事をすべきです」、と発言した。Nicollは2019年(13歳)、男の子と女の子の間の不平等な家事分担と男性の家庭内労働への関与の欠如を結びつけて指摘した。「そうして慣れてしまうから、大人になって結婚しても何もしないのです」。

フィリピンのReynaは12歳の時、クラスの男の子数人が彼女に自分たちの雑用をやらせて、いじめようとした出来事を語った。

⁷ 女の子の無償のケア労働に関する調査結果の詳細は、2024年発行の報告書「時間がない: ケア労働におけるジェンダーギャップと、女の子への影響」を参照のこと: <https://plan-international.org/publications/out-of-time/>

彼女自身は彼らに対抗できるとは感じられなかったが、教師に報告し、その不平等への対応責任を大人に委ねた。それは明確な抵抗の重要な1つの形である。

インタビュー実施者: 他の子どもからいじめられることがありますか。

Reyna: はい。

[...]

インタビュー実施者: それは女の子、それとも男の子の集団ですか。

Reyna: 男の子です。

インタビュー実施者: 男の子が命令するのですか。

Reyna: はい。

インタビュー実施者: 先生から課された作業をやりたくなく、代わりにあなたにやらせようとするのですか。

Reyna: はい。

インタビュー実施者: 先生にそのことを伝えますか。いつもどうしていますか。

Reyna: 先生にそれを伝えます。

インタビュー実施者: 先生は何と言いますか。

Reyna: 彼女は彼らを呼び出して叱ります。そして彼らに、彼ら自身の作業に加え、私の作業も全部するよう命じます。

[...]

インタビュー実施者: 先生にそれを話すのは怖くないですか。

Reyna: いいえ。

- Reyna、12歳(2018年)、フィリピン

上記の事例では、Reynaは勇気を出していじめっ子を教師に報告したことが示されており、それによって彼らからの報復を受ける危険を冒していた。彼女は明らかにそれができると感じ、教師が報告された行動に対応してくれると確信していた。支援的な教師は、彼女が変化の実現のために必要としたリソースの1つである。そのリソースなしでは、女の子の多くは不公平な行為の報告ができるとは思えず、単に無意味だと感じるかもしれない。

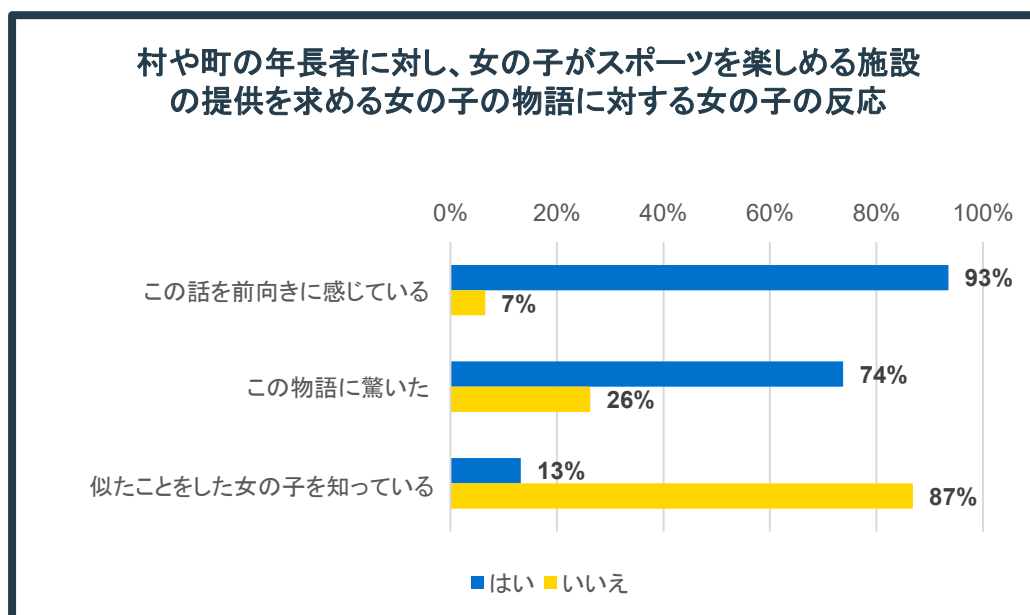
5.4.2 女の子は仲間の女の子への配慮の向上を求めている

調査チームは2021年、女の子がスポーツをする施設を整備してもらおう、村や町の年長者に求めた、ある女の子の物語に対する意見を調査対象者の女の子に聞いた。それは、2019年時点で、女の子の多くがジェンダー不平等を疑問視し始め、行動に関する規則に背く者もみられたが、女の子の権利について明確に発言している者はほとんど認められなかったという観察結果に基づくものであった⁸。私たちは、彼女たちのリーダーシップに対する意見を深く理解しようと図った。その物語は、文化的文脈に応じてサッカーやバスケットボールであったりする、典型的に男の子のスポーツとされるスポーツを女の子が行う能力に意図的に焦点を当てていた。その物語は全調査対象国でほぼ同様の内容とし、文化的・文脈的違いに応じて一部調整した。物語では、15歳の女の子が「グラウンドが暗くて遠く、サッカーは男の子だけがするものだから」という理由でサッカーを禁止される。彼女はコミュニティの年長者に、女の子が安全にサッカーや他のスポーツを楽しむ場所を提供するよう求める、というものである(Annex 2参照)。

調査対象者の女の子には、物語に対する感想・女の子の行動に驚いたか・似た行動を取った女の子を知っているかを尋ねた(3つの質問に一切回答しないことを選択した者も何名かいた)。

⁸ 2019年の調査結果の詳細は、「Girls Challenging the Gender Rules: Synthesis Report」を参照のこと: <https://plan-international.org/publications/girls-challenging-gender-rules-synthesis/>

結果として、物語に感情的な反応を示した女の子の93%が肯定的な反応を示し、女の子とその勇気への支持が示された。しかし、女の子の74%が彼女の行動に驚きを感じ、87%が自身のコミュニティで似たような行動を取った女の子は知らないと回答した。それらの回答は下図に割合で示されている。



それらの回答は、私たちが明示的抵抗とするものを示している。女の子の大多数はジェンダー不平等への抵抗という考えを支持し、女の子の権利を擁護するNGOとの個別インタビューでその支持を明確に表現できている。しかし、女の子の行動は驚くものであると感じ、同様の行動を取った女の子を知っている者は少数であった。それは、彼女たちがどんな抵抗を行いたいのか、または大人が彼女たちに提供できると考えられる施設は何かを探るために、彼女たちの声に耳を傾ける、信頼できる大人の明らかな必要性を示している。彼女たちは自身で変化を起こす女の子に対する明確な支持を示しながらも、結果から、自身でそれができる女の子を知っている者は極少数であることが示唆された。

調査対象者の女の子の内、2名のみが、上記の物語の女の子と似たような行動を取ったと回答した。フィリピンのDarnaは、学校の体育教師に包括的に対応をするよう訴えた、と述べた。

インタビュー実施者: Anaの行動をどう思いましたか。

Darna: Anaがしたことは問題ないです。

インタビュー実施者: 物語のAnaに関して、何が言えますか。

Darna: 彼女は皆に公平でありたいと考えていて、勇敢です。

インタビュー実施者: このような女の子に驚きましたか。

Darna: いいえ。

インタビュー実施者: なぜですか。

Darna: 私たちは既にそのようなことを試みました。

インタビュー実施者: 「試みた」とは、どういうことですか。

Darna: 少し前に学校で、バドミントン大会に派遣する代表選手が選ばれました。先生は、そのバドミントン大会の代表に選ばれるのは、他の大会にも出場したことがあり実力があると確信している2人の生徒だと言いました。その先生は、その2人が既に練習を積んでいるので、また彼らを代表にしたいと考えていました。でも私たちは、挑戦したい生徒全員に機会を与えて、誰が本当に実力者で大会に出すべきかを見極める、というのはどうかと先生に伝えました。

インタビュー実施者: その時、あなたがリーダーでしたか。

Darna: 私を含め数名いました。

インタビュー実施者: どうなりましたか。

Darna: 先生は提案を受け入れ、それで代表選出大会が開かれました。私はチームの代表に選ばれ、先生が許可したため、参加できました。

インタビュー実施者: 結果はどうでしたか。

Darna: 多くの生徒が挑戦を後押しされ、誰が本当に優れているかを見極めるのに参加を希望する全員を支援しました。

インタビュー実施者: 自身で提案し、先生がそれに応じ、結果がそうなったことを今、どう感じますか。

Darna: またやりたいです。たとえば、先生や年長者が(彼らに)許可しないであろう似たような状況が起きたら、(私は)自身の意見の提示を恐れるべきではないと思います。私が正しい可能性もあるのです。

- Darna, 15歳(2021年)、フィリピン

ベトナムのTanは、その物語の女の子に強い共感を示したが、女の子の行動は驚くべきもので、自身は年長者に何かを求めることはあまりに「恥ずかしくて」できないだろうと語った。だが彼女は、彼女をいじめる男の子たちに立ち向かい・反撃した話に言及した。その抵抗の形は物語と大きく異なるが、Tanは明らかに2つを関連付けており、大人と話すのは恥ずかしくてできなくとも、男の子の行動には挑戦していた。彼女は女の子をいじめる数名の男の子にこう言ったと話した。

「あなたたちは男の子でしょう...なんでそんなに臆病なの。同じことをまたしたら、後で何が起きるか分かっていないの」

- Tan, 14歳(2021年)、ベトナム

彼女は、それ以降その男の子が女の子を殴ろうとはしなくなった、と話した。Tanの回答は、その物語に対する女の子の反応の複雑さを示している。彼女は物語の女の子を称賛し、その行動に驚き、自身では同じことはできないと述べた。だがその後、彼女は自身が自己防衛や報復として、男の子に対し身体的暴力を行った経験を語った。これは、物語の行動よりも危険度が高いものとなり得る抵抗の形である。しかし、女の子の大多数は、物語の女の子のように行動し、大人に女の子のための働きかけ強化を求めたい気持ちはあるが、それが現状でできるとは思えず、実際にそうした行動を取る女の子の存在も知らないと言った。

5.4.3 女の子は意思決定への関与を求めている

保護者の間で、男性が世帯主で女の子は自身の人生に関する決定を下す能力がないとする明確な規範が存在したが、調査対象者の女の子の中の数名は、家族の意思決定への関与の機会を得られていた。たとえば、ブラジルのSofiaは2023年(17歳)、食事・教育・金銭の使い道に関する決定に関与したと述べた。それについてどう感じたかと尋ねると、彼女は「意見を聞かれなかったら、大変悲しいです」と答えた。2024年、彼女が、女の子が自身の人生に関して自由に決定できるべき、という意見に賛同したことは驚くべきことではなく、彼女はコミュニティの意思決定への女性の関与は重要だと発言した。「だって、そこにいるべきなのは男性だけじゃないでしょう」。

同様に、カンボジアのNakryも2021年(14歳)、大人は女の子の意見に耳を傾けるべき、という意見に賛成し、「女の子はよい意見を持っています[...]女の子は自身で決断でき、生きる・発達する・自由を享受する権利を有しています」と述べた。ベトナムのYenは2021年(15歳)、大人が女の子の意見に耳を傾けるのは「合理的」だとし、「女の子が経験している困難を理解できる」と述べ、女の子は「自身で決断すべきだが、同時に他者と相談し慎重に考え、自身にとって最善の道を選ぶべきです」と話した。

意思決定は、フィリピンの調査対象者の女の子にとって明示的抵抗の重大な対象テーマとして示され、何名かの女の子は女の子の関与を支持するだけでなく、現在意思決定の場から排除されていることに対する不正義感を示した。たとえば、Doloresは2022年(16歳)、彼女のコミュニティでユースに影響を与える最重要問題の1つに広範なポイ捨てを挙げ、「高齢者問題とは対照的に、ゴミ問題の解決へと活動するのはユースだけです」、と不満を口にしました。彼女は女性政治指導者を強く支持し、「女性やユース女性指導者は賢いと思います。彼女たちは、積極的・活動的で、女の子の懸念事項を容易に解決できるのがわかるからです」、と述べた。投票権を持つ「年齢に至った」ら投票するかという問いに対し彼女は、「投票権は年齢に基づくべきではありません。子どもの私たちも、コミュニティの指導者へ変化を求めています」と答えた。

Kylaは2020年(13歳)、大人は子どもをより信頼すべき、と述べた。Reynaは2022年(15歳)、将来リーダーとなって抗議運動・政治的キャンペーンに参加したい、と述べたが、それには大人が女の子を支援し、権力者に彼女たちの意見を伝えることで「私たちの代弁者となる」必要を訴えた。

Rosamieは2022年(16歳)、現地の政治家とユースに影響する問題に関して話すのは「恥ずかしい」と感じると述べ、「まだ何をすべきかわからないから難しい」とも語った。だが彼女は続けて、「権限を持つ人に働きかける準備をするために何が出来るかを議論する組織やグループ」が存在すべきと主張し、それに対する主要な潜在的障壁は「私たちへの支援や指導の欠如」だと指摘した。

この文脈で女の子は、特にコミュニティレベルでの意思決定への関与を望み、その実現のために大人が提供できる支援の形を特定した。たとえば、彼女たちがそれらの問題を効果的に議論できるグループや、意思決定者に直接懸念事項を伝える機会等である。彼女たちは、完全な関与を実現するために大人がすべきことを特定することで、一種の抵抗を示している。それは、意思決定から女の子を排除するジェンダー規範への抵抗であり、女の子は自身だけで変化を起こせる存在する「女の子の力」言説に対する明確な抵抗でもある。

5.4.4 女の子は大人にSGBV防止の取り組みの強化を求めている

これまでの調査データ分析から、私たちは調査対象者全体で、保護者が一貫して女の子の生活上の常態化した脅威としてレイプや性的暴行を認識し、彼らの大多数がそれを男の子と男性が有する自然な攻撃性の結果であるとみなし、女の子が回避しなければいけない不可避な危険と考えていることを確認した⁹⁶。保護者のGBVへの対応は、主に娘の移動と男の子との交友関係の制限であった。だが私たちは、女の子がコミュニティでのGBVの横行に対する大人の役割を疑問視し始め、コミュニティの安全の保障と暴力の責任を、被害を受けた人ではなく加害者に課すよう大人に求めていることを認めた。その分析を最新の状況に照らすことで、女の子が、男性と男の子の攻撃性が本当に「自然な」素質なのかを疑問視し、大人に行動を起こすよう求め続けていることが判明した⁹⁷。

たとえば、ベナンのAnnabelleは2021年(14歳)、「暴力や虐待から自身の身を守るのは女の子の責任である」という主張に強く反対し、「女の子だけでは不可能です。彼女たちを守るのは警察の役目です」と述べた。彼女は2024年(17歳)、彼女のコミュニティで女の子が経験している最大の困難について問われた際、さらに踏み込み、「私のコミュニティでは女の子がセクシャルハラスメントに遭っています。男の子から声をかけられて拒否すると、「そんな振る舞いをしていたら結婚相手は見つからないぞ」、と言われます」と発言した。彼女は、「加害者への啓発を行うため、女の子は大人と話し合うべき」と述べ、彼女たちはまず、必要なら「上級の権威者」に問題を提起でき得る人物である、村長に話すことを提案した。そして彼女は、男の子は「彼女たちを助け、不適切な言い寄りをしないよう、考え方を変える必要があります」と加えた。彼女はSGBVを、コミュニティ全体の行動が求められる問題と明確に認識しており、女の子の行動ではなく加害者の行動への対応に焦点を当てるべきだと考えていた。

ブラジルのBiancaは2021年(15歳)、「自身の身を守るのは女の子の責任である」という考えを否定し、「女の子だけに任せるべきではありません。コミュニティも支援すべきです」と発言した。翌年になると、彼女の批判は鋭さを増し、説明責任への訴えへと変わった。彼女はSGBVをコミュニティで最大の喫緊の問題とし、公共空間で女の子が感じる、常態的な恐怖に言及した。

「それは...私たち...女の子と女性が逃れられない安全の欠如です。夜道を歩くと、何が起こるかわからないので恐怖を感じます。世間には悪い人が沢山いて、脅威を感じて...何か...レイプか何か他のことが起こるかもしれない、と恐れています」

- Bianca, 16歳(2022年)、ブラジル

だが、同インタビュー時に彼女は「学校では[そうした問題について]教わりません」と話した。その理由を尋ねると、彼女は「きっと、私たちにそれらに関して深く知られたくなく、私たちの権利について知られたくないからです」と答えた。Biancaは、大人の無為だけでなく沈黙も、女の子と女性への暴力を継続させる要素として認識し始めていた。

ベトナムのLyは幼少期から男の子の脅威から身を守る術を学んでいた。彼女は2015年(9歳)、「友人によくいじめられます。Huynh(男の子の名前)がよくいじめます。いじめられるのは嫌です。いじめられても絶対に泣かず、すぐに反撃します」と語った。彼女は2017年、その立場を再び示し、「私は誰とでも友人になり、一緒に遊ぶけど、馬鹿にされたら殴ります」と述べた。そして彼女は2019年(13歳)、「私はとても攻撃的で、クラスの皆が私を怖がっています」と話した。

だが興味深いことに、彼女は2024年(18歳)、暴力や虐待から自身の身を守るのは女の子の責任ではない、とし、GBVを個人的な問題ではなくコミュニティの問題として捉え始めたことを示した。彼女は、「それは皆の考え方と行動次第です。もし、誰も暴力の行使をしようと思わなければ、自身の身を守らなければいけない人もいなくなります。なので、悪意を持つ人を正す方がよいと思います」、と説明した。Lyの意見も思春期の経過とともに変化し、女の子自身に自己防衛を求めるのではなく、大人とコミュニティが加害者の行動に対応すべき、という認識に至った。それは、男性による暴力が継続してしまういくつかの要因を明確に認識していることを示しており、女の子がそれらに対処するために大人がより多くのことを行う必要があると明確に求めている。Lyは、期待される行動への顕在的な反抗には言及していなかったが、安全で公平なコミュニティの構築のため、大人が強化すべき取り組みを特定していた。

5.4.5 女の子は性教育の向上を求めている

明示的抵抗の最後で再浮上したテーマは、女の子の性行為・妊娠に関して、より多く、またはより包括的な教育の享受に対する要求であった。彼女たちの多くがそのテーマに関する話し合いに不快感を覚え、保護者に明確に尋ねていることを示唆する者は皆無だった。そのため、その調査結果は、彼女たちが自ら大人に情報を求めることは難しいと感じる一方で、大人にはより良い対応を明確に求めているという、私たちのいう明示的抵抗の典型例を示している。調査期間で、女の子の83%がより多く・良質なSRHR教育を望んでいたが、娘とそのテーマを率直に話し合った保護者は極少数だった。保護者は一貫して、娘とそのテーマに関して話すことに不快感や否定的な姿勢を示した。保護者の多くは、そのテーマが女の子を性的に活動的になることを助長するのではないかと懸念したり、学校や宗教機関が扱うべきテーマと考えたりした。会話が行われた場合でも、その会話は曖昧で、彼女たちに体の理解ではなく、してはいけないことに焦点が当てられた。説明ではなく警告として語られることが多かった。一方、女の子は、月経衛生管理や妊娠回避を重点とした、自身の体に関する深い理解を望んでいた。たとえば、ベナンのAliceの父親が2024年、彼女が性に関する必要なすべての情報は教会の説教から学んでいる、と述べた一方、Alice自身は同年(17歳)、「妊娠回避の有効な方法を学ぶ「女の子クラブ」をコミュニティ内に設立したい」と語っている。

保護者と女の子の意見の違いは、エルサルバドルのDorisの事例研究が最も明確に示しているかもしれない。Dorisは2019年(12歳)、母親から月経が始まったら「自身で身を守り、誰にも触れられてはいけない」、と言われたことを話した。Dorisは同年、性について何も知らないと述べつつも、女の子がそれを学ぶのは「妊娠しないために」重要だと述べた。Dorisの母親は同年、娘に性に関して話したことはないとしながらも、「妊娠は責任を伴うものだから注意するように、男の人は去ってしまうから」、と警告していると述べた。また、「年を重ねたらボーイフレンドを作ってもいいと伝えています」、とも語った。Dorisの母親に2020年、DorisにSRHRに関して話したかを再び尋ねたところ、「注意しなければいけない、と伝えていますよ」、と述べた。Dorisは2021年(14歳)までで、性や思春期に関して教わったことはないと言ったが、女の子がそれらを学ぶことは重要だと考えていた。彼女は翌年までには妊娠した。Dorisは2024年(17歳)、いまだ思春期や月経に関してほとんど知らないと語った。彼女は再度、女の子がそのテーマ、特に避妊に関して教わることは重要だと感じると述べ、「そうすれば妊娠しないので、この生活、子育ては大変だから」、と語った。同年、彼女に誰が女の子に性や妊娠に関して話すべきかと尋ねると、「母親です。だって彼女たちは娘に正直でなければいけないので」、と答えた。

Dorisがそのテーマに関して母親と話し合ったり、より詳細な情報を求めたりすることができると感じていた証拠は認められない。多くの女の子にとって、このテーマに関するタブーは強過ぎる。しかし、個別インタビューから、彼女たちの多くが自身の体に関する情報の欠如が権利の行使に対する障壁だと指摘し、その欠如に対する対応を、大人全体、特に保護者に望んでいたことが判明した。

調査結果は、女の子がコミュニティ内のジェンダー不平等の再生産における大人の役割を認識しており、それらの問題への取り組みと彼女たちが望む変化の実現のため、支援の強化を大人に求めていることを示した。彼女たちが自身の意見を明示できないと感じていたことは重要な点であり、それは彼女たちが考えを共有し、コミュニティで問題と感じていることを話し合える場の創出の必要性を示唆している。大変多くの女の子がその形の抵抗に関与した事実は、彼女たちが行動的な抵抗を採ることなく、変化を実現できる力を強化できる余地が大人や組織にはあることを明らかにしている。

5.5 女の子の秘密の抵抗

本セクションでは、女の子の秘密裡なジェンダー不平等への抵抗や、彼女たちに期待される行動に背くあらゆる状況について論じる。保護者や教師は彼女たちの抵抗に気づかない場合が多いため、それは顕在的な行動的抵抗とは区別される。女の子はそれにより戦略的に自由度を若干高められるかもしれないが、その抵抗が気づかれずそのままならば、コミュニティ内のジェンダー規範への挑戦としては、顕在的行動的抵抗ほどに有効ではない可能性がある。とはいえ、それらの多くの事例は大きな勇気と創意工夫を示しており、女の子が時に期待される役割を拒否する姿を示す興味深いものである。

5.5.1 反逆的行動的抵抗

反逆的行動的抵抗という用語は、女の子が期待される行動に順応しているように見えるかもしれないが、その姿が実際の反抗を覆い隠す/注意をそらすものである、抵抗の形を指す。いくつかの事例では、女の子が別の形で自由度を若干高めるため、戦略的かつしばしば積極的にいくつかの役割をこなした、と語っている。

たとえば、ウガンダのJustineとSheilaはボアホール(井戸)からの水汲みが好きだと語り、Justineは、「水を汲んだ後、そこで少し遊べるから」、と説明し、Sheilaも、「水汲みに行く時に遊ぶの」、と述べた。家庭に水道がない家族にとって、徒歩での水汲みは1日に何度も繰り返す時間のかかる作業だった。だが彼女たち2名にとっては、保護者から離れ、さらなる家事を命じられることなく遊べる貴重な機会でもあった。両者とも水汲みが1日で1番好きな時間、とさえ表現した。

同様に、フィリピンのChristineは2020年(14歳)、料理が楽しいと語り、その理由として、「調理中は他の家事をしなくていいから」、と話した。どの家事を特に避けたいかと尋ねると、彼女は「弟の面倒を見なければならぬ時」、と答えた。女の子がしたくないことを避けるため、他の家事をしなければいけないと嘘をついた場合もいくつか確認された。たとえば、ベナンのTheaの母親は2020年、娘が教会に行くのを避けるため、「宿題をしなければならぬ」、と言い、実際にその宿題を翌日までしなかったことへの不満を漏らした。

保護者から何か、しばしば必需品やちょっとした贅沢、を得るため、意図的に家事を極めて従順にこなしていることに言及する女の子もみられた。たとえば、ベナンのIsabellは2016年(9歳)、「私が必要とするものを母が買ってくれるようにするためなら、喜んで何でもします」、と述べ、同様にベナンのLaylaも2016年(9歳)、「大人に服、特に祝祭日のために着る服を買ってもらうため、私と同じ年の女の子は彼らに敬意を示すべきです」、と語った。ブラジルのCamilaは、叔母たちの料理や掃除を手伝うことで、彼女たちがCamilaの学用品の購入を助け続けてくれるようにしていると語った。それらの抵抗の形の反逆性の程度には限界があり、彼女たちは結局、彼女たちの兄弟は期待されていない形でかなりの家事労働をこなさなければいけなかったが、それは明白に、どこかで自由度を若干高めるための戦略的で主体的な行動である。

5.5.2 秘密の仕事と収入

何名かの保護者は、娘が収入を得る、という考えに懸念や強い嫌悪感を示した。保護者が女の子の教育への影響を懸念し、彼女たちの就労を望まない場合もあれば、彼女たちには家でケア労働や家庭内労働をしてほしいと望む場合もみられた。保護者が、女の子が雇用された場合に起こり得る事態に対する、極めてジェンダー的な懸念を示す場合も少数ながらみられた。たとえば、ウガンダのJustineの祖父は2010年、「教育を受けた女の子が雇用を望む場合、彼女たちは雇用主と先ず寝なければ仕事を与えられません。結局、彼女たちは感染者から感染し、他の人を感染させます」、と語った。だが、女の子の多くは何らかの形で仕事を得ており、女の子の8名に1名(13%)が保護者に知られずに収入を得ていた。

その結果は、特にベナンとウガンダで顕著にみられ、女の子23名のうち9名が、思春期に保護者に知られずに収入創出活動に従事していた。たとえば、Sheilaの母親にSheilaが過去1年間に有償労働を行ったかを2024年に尋ねると、「そんなことあるわけないです。彼女は望んだけど、私は許しませんでした」、と答えた。一方、Sheilaは同年、義父の店で働いたことを語った。

「父はブティックを経営しており、別の場所でも服を売っていました。なので、父はもう一方の販売場所に行っている間、私にブティックの手伝いを任せていました。父がそちらから戻ってくる度、私に5,000ウガンダシリングを渡してくれました」

- Sheila、17歳(2024年)、ウガンダ

彼女は仕事を楽しんでおり、「いい仕事」だと評した。しかし、Sheilaの母親が実際にはその有償の仕事を認識していたが、Sheilaは単に家族の「手伝い」をしているだけと捉え、有償の仕事とみなしていなかった可能性もある。

同様に、ベナンのAliceの父親に2023年、Alice(16歳)が有償労働をしたかを尋ねると、「いいえ」、と答えた。だが、Aliceは2023年、「道路の砂を集めて売っていました。乾季には1鉢150CFAフラン、雨季には100CFAフランで売っていました。その砂は建設に使われます」、と話した。その仕事をするのを誰が決めたのか尋ねると、「お金を稼ぐために自身で決めました」と答え、「そのお金で服や靴を買います」と語った。Aliceはその経験から多くを学んだという。「稼いだお金をやりくりする方法を学んだの」。

ベナンのTheaは2021年(14歳)、母親の店を手伝う機会を利用して多少の金銭を得ていたと話した。「母が外出する時に私が店番をしますが、その時にBazin布地の値段を少し上げるんです。そうすると500~1,000西アフリカ・CFAフラン位収入を上げられます。これは兄から教わりました」。

その傾向は両国で顕著であったが、調査対象者全体で、保護者が娘の収入創出活動を知らない、または娘の行動を有償労働と認識していない場合が確認された。たとえば、ベトナムのYenは2024年までに、オンラインで製品を購入し、その製品の宣伝動画を制作し、その転売で利益を得ていたが、彼女はまったく稼いでいないと母親は思っていた。Sheilaの事例では、母親は娘の収入獲得を明確に禁じていたが、他の多くの事例では、保護者が娘の経済活動を認知していなかったのか、または男性が扶養者であるというジェンダー規範が極めて厳格であり、それらの活動を有償労働と捉えていなかったのかは不明である。

5.5.3 男の子との秘密の友人関係

私たちの分析から、女の子104名の内少なくとも40名が、保護者に隠して、または保護者の意に反する形で男の子との友人関係を築いていた証拠が確認された。それらの事例では、女の子自身は男の子の友人がいることを明かした一方で、保護者は同年または前年に、女の子に男の子の友人はいない・男の子との交友を禁じている・異性との友人関係を強く認めない、と述べていた。女の子に対し、具体的にそうした友人関係を秘密にしているかを尋ねてはならず、女の子と保護者の発言を対比させて導き出さなければいけなかったため、その数値は過小評価である可能性がある。しかし全調査対象国で、調査対象者の女の子のかなり多くが、思春期を迎えたら男の子との交流を一切避けるべきとする規範に、背いていたことは明らかである。

トーゴのFezireの母親は2020年、「よい女の子」は「保護者や年長者に礼儀正しく敬意を示し、勉強に専念し、男の子を避ける」ものである、と語った。同年、Fezire(14歳)は、戦略的行動として男の子の学級委員と友人になったと話した。「彼にはよく話す友人のリストに私の名前を書かないようお願いしているの」。ウガンダのBetiの父親は2019年、彼女が学校にいる間は心配する必要がないとし、「男の子と遊んだりしないからです。それが、私が彼女のことをあまり心配しない理由の1つです[...]家事を済ませると、女の子の友人のところに行き、一緒に喋って遊んでいます」、と語った。Betiに2021年(14歳)、自身を幸せにしてくれる人びとを挙げるよう求めると、友人のEliを最初に挙げ、「私は彼の授業の課題を手伝っています[...]彼は私の友だち。大部分の時間を彼と過ごしています」、と説明した。ベナンのIsabelleのおばは異性との交友関係を強く否定し、2020年に「彼女が男の子と交流してはいけません。将来が台無しになる可能性があるからです」、と発言し、2021年には、「彼女には男の子の友人は1人もいない」と、2024年には「地元の通りで男の子と外出などしていません」、と主張した。Isabelleは2021年、男性の友人はいないと述べたが、彼女の友人たちはFacebookで男の子と会話を交わしていた。彼女は2024年(17歳)、8名の友人を挙げ、その中には男の子が1名、含まれていた。「私たち女の子と一緒に楽しもうとしてくれるのは彼だけなので、友人の中で男の子は1名だけ。私たちは皆同じクラスで、勉強グループを組んでいます」。

ベトナムのHuongの父親は2021年、彼女の男の子との交友を「危険」と表現し、「それが最大の懸念事項です。今私は彼女に、男性の友人と遊ばないように、と繰り返し言っています」、と語った。

Huongには幼少期に常に男の子の友人がおり、彼女は2019年(12歳)、「男の子にとっても女の子にとっても平等であるべき」として、男の子と女の子と一緒に遊べるべきだと語った。保護者の多くが、女の子が思春期に近づくにつれ異性間交友を不安視していったが、カンボジアのReasmeyの父親は幼少期からそれを禁じていた。Reasmeyは2011年(5歳)で、父親に「女の子が男の子のように遊ぶのも、男の子が女の子のように遊ぶのもよくない」と告げられた。翌年には母親もそれに同調し、「サッカーは男の子の遊びだから女の子はするべきではなく、男の子は人形で遊ぶべきではありません」と主張した。だが、2014年にReasmeyは、Uyという男の子を最も親しい友人だと語り、彼や他の友だちと遊ぶと「楽しいです」と話し、男の子は遊べるが女の子は遊べないおもちゃや遊びがあるかと尋ねると「わかりません」、と答えた。

エルサルバドルのDorisの母親は2019年、Dorisが男の子と遊びに行くのを止めないため、「だから私は彼女に外出を許さないと伝えて」彼女を繰り返し罰したと説明した。ドミニカ共和国のChantalの父親は2019年、男の子を「少し危険です[...]男の子は今、小さな悪魔になっています」、と表現した。しかし同年、Chantal(13歳)は、「[男の子]とも、女の子とも」鬼ごっこや野球をしていると語った。ブラジルのLarissaの母親は2018年、女の子と男の子が学校で同じ教室にいることに対する不安を示し、「昔は男の子と女の子が一緒でも大した問題はなかったと思いますが、今は目を離すと問題が起きやすいです。大人数の男の子と女の子が一緒にいるのは少し心配です」、と語った。だが同年、Larissaは男の子と女の子が分かれて遊んだり、異なる遊びをしたりする必要があるという考えを明確に否定した。

インタビュー実施者: 女の子の友人と男の子の友人がいますか。

Larissa: はい。

インタビュー実施者: そうですね。男の子も女の子も同じように好きですか。

Larissa: はい。

インタビュー実施者: このコミュニティや学校では、男の子と女の子は一緒に遊んでいますか。

Larissa: はい。

インタビュー実施者: いつも一緒に遊みますか。どんな遊びをしますか。

Larissa: ええと、かくれんぼ・鬼ごっこ・ボール遊び・凧揚げです。

インタビュー実施者: あなたも凧を揚げたり、ボール遊びをしたりしますか。

Larissa: はい。

インタビュー実施者: 彼らはあなたと一緒にあなたの人形で遊みますか。

Larissa: はい、します。

インタビュー実施者: 彼らはごっこ遊びをしますか。

Larissa: 彼らもします。

- Larissa、12歳(2018年)、ブラジル

Larissaの母親は2020年、Larissaが男の子と遊ぶことに再び不快感を示し、思春期を迎えると女の子は「慎重深く、自身をさらけ出してはいけません、わかりますか」、と述べた。母親にLarissaがその規範を守っているかと尋ねると、彼女は、「私と一緒にいる時は、行儀がいいですよ、私の前では。でも、私たちの見えないところで何をしているかはわかりません」、と答えた。同年、Larissa(14歳)は、彼女にはまだ男の子の友人がいることを話し、男の子の親友がいるかと尋ねると、「います」、と答えた。

調査結果から、性的関係を伴わない異性間関係は、コミュニケーション能力の向上・ジェンダーステレオタイプやジェンダーによる区別に対する疑問視・脱却できる能力・セクシャルアイデンティティ/性的指向の確立等、思春期の若者の発達において重要な役割を果たす^{98,99,100}。しかし、調査対象者の女の子の少なくとも40名にとって、そうした友人関係は、思春期での男女間のあらゆる交流を危険とみなす保護者から隠さなければいけなかった。

5.5.4 女の子の秘密の恋愛関係

私たちは、秘密の恋愛関係や片思いをすることが、思春期の「いい女の子」が控えめさと性的純潔を保ち、恋愛を望まないことを求める既存のジェンダー規範に挑む行為であるとして言及する¹⁰¹。彼女たちは常に保護者や広範な発達論の文脈から、誘惑され、妊娠し、潜在能力を発揮できない「危険に晒された」存在として認識されていることを踏まえ、たとえ彼女たちが、秘匿性が保証された個別インタビューの中でしか語れなくても、彼女たちの片思いは反逆的行動の1つの形態と見なすことができる^{102,103}。

調査対象者の女の子の中で、調査期間中に秘密の恋愛関係や片思いをしたことがあると特定されたのは23名である。しかし、女の子が自身の関係を話さなかった場合は多いと考えられ、また、必ずしも保護者に対し、娘に交際関係があるかを尋ねてはならず、何名かの女の子がインタビューで率直に話した場合でも、保護者がその事実を認識していたかは不明な場合もある。そのため、この人数もまた、過小評価の可能性が高い。したがって、その23名の一覧に含まれるのは、保護者に伝えていないことを明言した者・近くにいる保護者に聞かれないよう声量を下げた者・保護者が娘の秘密の恋愛関係を知ったと明かした者のみである。その23名は、トーゴを除く調査対象国8カ国にいた。

思春期の女の子が恋愛関係を持つということを、調査対象者の保護者は概して許容しなかった。ベナンのMargaretの叔母は2023年、Margaretの行動に対し不満を漏らした。

「彼女は真実を語らず、私のお金を盗んで男の子に渡し、私の商品を売りに行って、好き勝手にお金を使っています。彼女には、Judicaelという高校の上級生のボーイフレンドがいます。8日前、[ある人物の名前]の友人が私の娘[Margaretのいとこ]に話しかけ、彼女が彼にお金を渡しているのを明かしたのです。私は常にMargaretにボーイフレンドがいるか尋ねていましたが、彼女は常にいないと言っていました。娘から情報を得て、私はMargaretに強く詰め寄って、やっと彼女はボーイフレンドがいることを認めました」

- Margaretの叔母、2023年、ベナン

だが、Margaretはインタビュー時にそのボーイフレンドについては言及しなかった。

一方、フィリピンのRosamieは明らかに自身の新しい恋愛関係についてインタビュー時に打ち明けたい様子だった。

インタビュー実施者: 人間関係で、何が変わりましたか。

Rosamie: (笑)もうボーイフレンドがいるの。

インタビュー実施者: 最近ですか。

Rosamie: ずいぶん長い間いなかったけど、今年から。(間を置いて微笑んだ)

インタビュー実施者: どうですか。

Rosamie: 彼が私の人生に現れてくれて感謝しています。(笑)

インタビュー実施者: 人生の新たな章にいるあなたの気持ちを話してくれますか。

Rosamie: (首を振る)いいえ、恥ずかしいです。ただ嬉しいだけです。

- Rosamie、18歳(2024年)、フィリピン

しかし、インタビュー実施者は観察記録に「彼女は同時に、ボーイフレンドについて詳しくは話したくないことを目線で示し、母親が通りかかればすぐ黙り込んだ」と記している。

その恋愛関係が自身の幸福に極めてよい影響を与えていると感じていても、関係を秘密にし続けなければならないと語った女の子も何名かいた。エルサルバドルのRaquelは、ある男の子との恋愛関係を大変肯定的に表現した。彼女は2024年、ボーイフレンドとその交際関係について語った。

「実は、私が悲しんでいたときに彼が現れて、彼は本当に色々な面で私を助けてくれました。私は彼に自分の身に起こることを何でも話せられると感じたし[...]そして事実、彼は私に強い自信を与えてくれて、他に沢山のことを感じさせてくれてます」

- Raquel、18歳(2024年)、エルサルバドル

そうした恋愛関係は女の子にとって前向きで成長につながる経験となり得るが、保護者に秘密にしておく必要性には危険が伴う。

秘密の恋愛関係は、ドミニカ共和国とエルサルバドルで重要なテーマとして示された。インタビュー結果によると、女の子24名の内11名が思春期に秘密のボーイフレンドがいた。性と恋愛関係に関する情報と医療ケアが不足している状況下で、それは児童婚・妊娠・性感染症(STI)・さまざまな形のGBV等、多くの女の子に生涯にわたる影響を与えた。たとえば、ドミニカ共和国のGriseldaの父親は2020年、娘に秘密のボーイフレンドがいるのではと疑い、2021年までにはGriselda(15歳)は出産し、22歳のパートナーと同居していた⁹。

⁹ ドミニカ共和国で性的関係への同意が許可される年齢は18歳であり、いかなる状況下でも18歳未満の結婚は禁止されている。だが、同国はカリブ海地域で早すぎる強制された結婚の発生率が最も高く、非公式な婚姻関係も頻繁にみられる。

ドミニカ共和国のKaterinとエルサルバドルのHillaryは15歳で秘密の恋愛関係を持ち、そして18歳になる前に同棲・出産した。

女の子は自身の行動に対する不公平でジェンダー的な制限に抵抗していたかもしれないが、彼女たちの秘密の恋愛関係は、法的に性行為に同意できる年齢に達する前に、ずっと年上の男性との性的関係持つこと等、多くの危険に晒されることにも留意することは重要である。しかし、タブー視する文化・厳格な道徳規範・SRHRに関する沈黙が、女の子に保護者から恋愛関係を隠すことを強い、彼女たちに健全な関係を理解し自身の幸福を守るために必要な情報や医療を提供されていなかった。それは、保護者が漠然とした脅しや警告以外の形で娘とSRHRに関して話し合うのを依然、ためらっていることで一層悪化していた。結果、秘密の恋愛関係を持った女の子は望まない妊娠やSTIの重大なリスクを負い、児童婚となった者の多くも、そうしたリスクから自身を守る方法を知らなかった。ドミニカ共和国とエルサルバドルの女の子の多くは、そうした秘密の恋愛関係の結果、妊娠した。

秘密の恋愛関係の別の重大な危険として、保護者に知られた場合の女の子への影響が挙げられる。ベトナムのTanは保護者に内緒で交際を続けようとしたが、後にそのことで罰せられた。彼女は2021年にこう説明した。

Tan: ええ、数カ月前、私と友人が恋に落ちたのですが、両親が知り、それで両親に怒鳴られました。

インタビュー実施者: ご両親に叱られたのですか。

Tan: はい。コンピューターを壊されました。

インタビュー実施者: 壊れたのですね。

Tan: はい。

インタビュー実施者: あなたとあなたの友人は今、どうですか。

Tan: 私とその友人は小学校1年生からの知り合いです。私とその友人はお互いに好意を伝え合いました。その後、私の補習クラスの先生がそれを心配して...私の両親に電話でそのことを話しました。それから父がコンピューターを壊したのです。

インタビュー実施者: その時、あなたはどのように感じましたか。

Tan: 怖かったです。両親が私の将来や私自身のことを心配しているとも感じたので、沢山泣いて目が腫れ上がりました。その後、両親に謝りました。今でもその友人とは仲がよく話もするけど、以前より少なくなりました。

- Tan, 14歳(2021年)、ベトナム

Tanの母親は、彼らが子どもの学習のためにインターネットを「遮断」し、Tanの学業用に購入したコンピューターは現在「壊れている」ことだけを述べた。女の子が、保護者に男の子との連絡手段として使っていた端末を没収・破壊された経験を語ったが、多くの場合、脅された結果の方が一層深刻かもしれない。ベトナムのLyが秘密のボーイフレンドがいた女の子の中に含まれなかったのは、彼女の母親が2019年に「彼氏を作ったらあなたを殺すと言ったのよ」と述べていることを踏まえると、驚くべきことではないかもしれない。

そして、彼女たちがボーイフレンドと同居することは、彼女たちを家庭内暴力(DV)に遭わせる危険も孕む。調査対象者の中で最も極端な事例として、ボーイフレンドと暮らすために家出したウガンダのJoyの事例が挙げられる。彼女が15歳の時、祖母は彼女の家族が彼女の行方がわからないでいることを述べた。「今頃、あの男の子と一緒にいると思うけど、正確な場所はわかりません」。Joyは保護者と彼女の恋愛関係を率直に話し合うことなく、彼らの元を完全に離れ、調査チームはそれ以降、彼女の状況を確認する追跡調査ができなかった。恋愛関係を秘密にする必要性が、望まない妊娠・STI・妊産婦死亡・DV等、重大な危害に彼女を晒した可能性がある。

ジェンダー規範に対する女の子の秘密の抵抗の形は、深刻な結果を招くリスクを負った上での勇敢さを示している。調査対象者の女の子の多くは、自身の自由度を少しでも高めるため、または自身や他者について深く知る機会を得るために、秘密裏に行動を起こしていた。

だが、そうした行為を秘密にしなければいけなかった事実が、職場での搾取やハラスメント・保護者に知られた際の保護者からの暴力・児童婚が孕む数多くの健康リスクといった、危険に彼女たちを晒した。したがって、私たちはそうした秘密の抵抗行為を美化するのではなく、女の子の能力や自由に対するしばしば制限的な保護者の考えに、彼女たちが対処する過程で示す主体性の重要な形として認識したい。そして私たちは、彼女たちが周囲の大人の支援を受けながら、幼少期～思春期に十分に学び・成長・探求できるようにする必要性を強調したい。

5.6 顕在的行動的抵抗

調査の中で、調査対象者の女の子104名の内49名が、期待される行動を顕在的に背いたり、コミュニティ内で女の子が担うとされる役割を拒否したりするといった、抵抗行動の1つ以上に関与している証拠が確認された。それらの女の子が彼女たち自身や保護者の政治的見解により選出されたわけではないことを踏まえると、その結果は特に重要である。事実、家族が調査に参加した当初、彼女たちは乳児であり、本報告書の保護者の見解に関するセクションで論じた通り、保護者の多くはジェンダーに関して強く保守的で本質主義的な考えを持っていた。そうでありながらも、彼女たちが思春期を迎えるまでには、彼女たちのほぼ半数が何らかの形でそうした考えを疑問視するようになっていた。そうした抵抗の多くは小規模で、正式な運動活動に関与していると話した女の子はいなかったが、彼女たちの多くが顕在的にジェンダー規範に抵抗していたことを示した。

5.6.1 女の子が自身の望むように服装を整え・振る舞う

10名の女の子、または彼女たちの保護者が、女の子が男の子のような振る舞いや服装をすることに関して言及した。それは、保護者が娘に女性的な服を着るよう説得できないことに不満を示す文脈で多く言及され、女の子に特定の服装や振る舞いを期待する規範が明確に存在し、そうした期待に応えないことに対する保護者の明らかな嫌悪感を示していた。たとえば、ブラジルのFernandaの父親は2018年、家族の間でFernandaの服装の選択に関して議論が起き、Fernandaは同性愛者嫌悪に起因する虐待の対象にさえなっていると示唆した。

インタビュー実施者: 最近彼女の服装が変わったと思いましたか。彼女は前より見た目を気にするようになりましたか。

Fernandaの父親: いいえ。彼女はあのようなシャツしか着たがらないため、私たちは彼女と議論したのです。

インタビュー実施者: サッカー用のシャツですか。

Fernandaの父親: はい。サッカー用のシャツです。

インタビュー実施者: 袖付きのですか。

Fernandaの父親: はい。彼女の母親は彼女に、「娘よ、もっといい服を着なさい、女の子らしいシャツを」と言うのです。

インタビュー実施者: 女の子らしいシャツとは、トップスのことですか。

Fernandaの父親: それが一般的です。

インタビュー実施者: 彼女は男の子のシャツの方を好みますか。

Fernandaの父親: ええ。彼女はボール遊びが大好きなので。そして、人びとは色々言い始めました。

インタビュー実施者: 彼女のシャツについてですか。

Fernandaの父親: はい。彼女があれしか着たがらなかったため、私は、「娘よ、もう大きくなったから、もっといい服を着なさい」と言いました。他の女の子たちがからかい始めたのです。

「ねえ、あなた、[同性愛者への差別的表現]になるつもりなの」って。彼女は怒っていました。

インタビュー実施者: つまり、彼女は同年代の女の子とは違う服装をしている、ということですか。

Fernandaの父親: まさにそうです。ショートパンツは普通で、彼女はどんなショートパンツでも着ますが、トップスは、お腹を見せるのが好きではないです。彼女はTシャツしか着ません。

- Fernandaの父親、2018年、ブラジル

上記の抜粋は、Fernandaの父親が、娘が「いい服」を選ばないことに不快感を抱き、彼女が受ける同性愛者嫌悪のからかいへの対応として、他の女の子のように「お腹を見せる」トップスを含む服装をすべきだと感じていたことを明示している。しかしその後も、Fernandaはサッカーを積極的に続け、自身が選んだ服装をし続けた数少ない女の子の内の1名であった。

2024年までに、2021年の女の子のサッカーに関する物語(Annex 2参照)と酷似した経緯を経た。Fernanda(18歳)は、「叔父と、サッカーで女の子が軽んじられていることを話しました。そしたら叔父がここでストリートーナメントを企画・運営し、賞を与えようとしてました。すごいことです。去年は褒賞がまだ女の子の方が少なかったですが、今年は男の子と女の子が同じでした」、と語った。女性らしくあるよう圧力を受けてはいるが、Fernandaは自身が望む服装を続け、男性的とされるスポーツへの女の子の平等な参加を提唱し続けた。

ベトナムのHuongの家族は子どもたちが期待されるジェンダー的役割に順応しないことへの不快感を次第に示していった。Huongの父親は2011年、「男の子が人形で遊ぶのはおかしい」という主張に反対し、「子どもは何でも好きなもので遊べばいい」、と述べた。だが、子どもたちが思春期を迎えると、父親も母親も彼らの行動に懸念を示すようになり、彼らは2019年、「[Huongの兄は]とても優しい性格だから、学校でいじめられないかと心配です。[...]娘があまりに活発なも気にかかる。彼女が転んだら、他の子ほどに強く耐えられないのではないかと思います」、と述べた。またHuongの父親は2021年、「息子は、優し過ぎて社会での競争に勝てないのではないかと心配で。娘は、積極的に交流をし過ぎており、何が正しく何が間違っているか判断が難しいのではないかと感じます。至る所で積極的にチーム活動に参加するので、どこがよくて、どこが悪いかわかりません」、と話した。Huongの兄は優しく思いやりのある子どもだったが、両親は彼に声を大きく出して自信に満ち、極めて活発であることを期待していたため、彼の姿は懸念材料となった。一方、Huongのスポーツへの情熱と自信は、両親が彼女に内気で優しい子になることを期待していたため、懸念要素となった。

Huongは2017年(10歳)、「クローゼットにはドレスが沢山あります」、と語ったが、「ドレスは好きではありません。私は自分が男の子だと思います」、と続けた。2019年までで、Huong(12歳)は、友人の大多数が男の子だと話した。また彼女は、女の子に期待される他の行動も疑問視し始めていた。たとえば、彼女は過去に、男性と結婚するだろうと思っていたようであったが、彼女は2019年には、結婚を望まないことを述べ、「1人の方が幸せで、自立度が高いです。夫がいれば、夫の望む通りに沢山のことをすべてしなければいけませんから」、と説明した。

5.6.2 女の子がサッカーをする

他の複数の国々も含めた多くの事例で、「男の子のように振る舞う」と明確にラベルを貼られていなくとも、女の子が男の子と結びつけられることが多い特定のスポーツを続けた。上述のブラジル・ベトナム・フィリピンの女の子に加え、ベナン・ウガンダ・トーゴ・カンボジア・エルサルバドルの女の子の多くも、サッカーが男の子のスポーツとされることが多い状況でも、サッカーを続けた。たとえばトーゴの何名かの女の子は、サッカーが女の子には禁止されていると述べたが、何名かの女の子が幼少期にサッカーをしており、その中の1名であるFezireは2019年(13歳)に弟たちとサッカーをしていたとされ、2021年(15歳)に、サッカーをするための安全な場を求める女の子の架空の物語に対し、こう反応した。「いい話ですね。女の子がサッカーをしたいと思うのはいいことです」。

ウガンダの女の子13名の内4名が、ベトナムの女の子9名の内5名がサッカーをしていた。また、カンボジアの女の子の半数(10名中5名)もサッカーを楽しんでいた。ウガンダのSheilaの父方の親族は、彼女がサッカーをすることに強く反対していた。彼女の父親は2011年、「サッカーは体を使い過ぎるため、女の子にはよくないと思います。女の子はネットボールだけで、サッカーはしてはいけません」、と述べた。両親の離婚後、Sheilaは父方の祖母と暮らしたが、祖母は彼女を激しく殴り、サッカーを禁止した。だがSheilaは2020年(13歳)までに、母方の家族のもとへ逃れ、そちらに住むようになり、自ら、「男の子とサッカーをして過ごしています」、と描写した。

エルサルバドルの何名かの女の子は、コミュニティの男の子は海岸やコミュニティのサッカー場でサッカーをすることを許可されているが、女の子は安全上の懸念から許可されていないことを説明した。しかし、Karenは思春期の間もサッカーを続けた。彼女は2019年(12歳)、「友人に、サッカーをするからあなたは男の子です、と言われました」、と話しつつも彼女はサッカーを続けている、と述べた。彼女は2024年(17歳)になっても、週に1回サッカーをしていた。「ええ、好きですよ。父がサッカー好きだから、それを受け継いだのです」。Karenは明らかに父親の応援・支援を受けており、それがサッカーを楽しむことを継続できる鍵となっていた。Karenの物語から、女の子の声を傾聴・後押しするよう、支援的な大人が前向きな子育ての実践を行う責任があることが読み取れる。

その証拠は、サッカーを男の子のスポーツとする規範が変わり始めていることを示唆する一方、保護者や他の女の子から得た十分な証しから、その認識が依然として広く一般に共有されていることも示唆され、したがってそれらの女の子がサッカーを継続的に楽しんでいることは、顕在的抵抗の1つの形として特定できる。

5.6.3 女の子は異性愛規範に抵抗している

フィリピンの女の子14名のうち5名は、保護者が子どもの遊びや服装に対し頻繁に同性愛者嫌悪的で保守的な見解を示したにもかかわらず、男の子のような服装や振る舞いをした、と描写された。たとえば、Mahaliaの父親は2011年、「男の子が人形で遊ぶのはおかしい」という主張に賛成し、「それを私の息子たちには許さない、ゲイになってしまうからです」、と述べた。Mahaliaの母親も2013年、「前は教師がゲイだった」が「今は違います」として、Mahaliaの教師たちに満足していると語った。そうした状況下で、Mahaliaは2017年、女の子は可愛く、「色白で」、「長髪」でなければいけない、と発言した。だが母親は2020年までに、「Mahaliaはtomboyみたいで[...]男の子のように振る舞うから、彼女のことはわからない」、と語るようになった。フィリピンでは、レズビアン の俗語として「tomboy」という表現がよく使われる。Mahaliaがどうtomboyのように振る舞うのを母親に尋ねると、Mahaliaが「水汲み」や「重いものを運ぶ」といった「男の子がする仕事をする」ことや、ドレスを着ようとしないことを挙げた。

Mahaliaは2024年(17歳)までで、インタビュー時に「今、ガールフレンドがいるの(笑)」と語り、どう感じているかと尋ねられると「幸せ」と繰り返し答え、彼女を「尊敬できる存在」と表現した。同年、Mahaliaの母親は「2人とも女性」という点に多少の違和感を示しつつも、「もし彼女のガールフレンドが彼女を幸せにして、彼女が本当にそれで幸せなら、私たちはそのままにします」と語った。Mahaliaは、調査期間中に公然と女性と交際していた調査対象者の女の子の2名のうちの1名であり、2名ともフィリピンの女の子である(もう1人のReynalについては後述する)。異性のような服装や遊びを強く否定する家庭で育ったが、彼女は幼少期～思春期に、その規範への順応の必要性を次第に疑問視するようになり、最終的には自身の性自認の表現と別の女の子との恋愛関係に幸福を見出した。

5.6.4 女の子は反撃している

私たちは、男の子からのいじめやハラスメントに対し反撃し、抵抗している女の子の姿を、女の子とその保護者の回答から確認した。ただしそれは、全調査対象国で顕著なものではなかった。ドミニカ共和国ではいくつかのそうした事例がみられ、Leyla叔母は2016年、「Leylaは彼女に触った男の子全員を殴ります」と語り、同年にKaterinの母親は、「Katerinに誰かが触ったら、彼女はその人物の片目を潰すでしょう」と述べている。エルサルバドルのRaquellは2017年、自己防衛のために女の子が強くなることは重要だと感じているとしたが、彼女自身が誰かを殴ったとは述べていない。

その行動は、ベトナムとフィリピンの調査対象者のデータで最も顕著にみられた。ベトナムの調査対象者の女の子9名のうち6名が、調査期間中に男の子を殴ったという。その2カ国の調査対象者の女の子が自身のジェンダー表現を疑問視し、男の子のような服装・行動を取る傾向が最も強かったことは、驚くべきことではないかもしれない。それは、保護者が保守的で同性愛者嫌悪的な考えを持っていても、それらの国の女の子が期待されていない行動が取れると感じていたことを示唆している。Lyは2019年(13歳)、「私は男の子みたいだから」、と男の子と女の子の間の違いを認めず、彼女に過去1年で自身の性格が変わったかを問うと、「はい、攻撃的になりました」、と答えた。彼女は続けて、彼女が攻撃的過ぎるためクラスの全員が彼女を怖がっている、と話した。

フィリピンの調査対象者の女の子3名が男性からのハラスメントやいじめに対し、暴力を伴う対処をした、と語った。最も注目すべき事例は、2014年に学校で男の子からからかわれた際の出来事を以下のように説明した、Rosamieの事例かもしれない。

インタビュー実施者: 学校で誰かに殴られたことがありますか。

Rosamie: 私をからかう同級生の男の子たちです。私も戦います。

インタビュー実施者: なぜあなたをからかうのですか。

Rosamie: まったくわかりません。からかう理由がわかりません。

インタビュー実施者: 彼らはあなたをどれくらいの頻度でからかいましたか。

Rosamie: 授業があれば。彼らは皆、毎日からかいます。私の男性の先生でさえ、私をからかいます。

インタビュー実施者: 先生がいても、ですか。

Rosamie: 1度、私をからかった人を殴ったことがあります。

インタビュー実施者: 誰を殴ったのですか。

Rosamie: [教師の名前]先生。

- Rosamie、8歳(2014年)、フィリピン

弱冠8歳にして、Rosamieは自身をいじめる男の子への対抗戦略を編み出し、自身をからかう教師にもその戦略を実践した。その報復行為による彼女への何らかの影響があったかは明言していないが、その後のRosamieへのインタビューから、彼女が次第にジェンダー的な期待の圧力を感じ始め、その形での自己防衛を止めた。それからわずか3年後に、彼女はインタビュー実施者と以下の会話をしている。

インタビュー実施者: いい女の子でいることは難しいですか。
Rosamie: 同級生が私をいじめる時は。
インタビュー実施者: あなたも彼らをいじめますか。
Rosamie: いいえ。
インタビュー実施者: そういう時、なぜ自分はいいい女の子ではない、と言うのですか。
Rosamie: 彼らがそうすると、私はすぐに怒ってしまうからです。
インタビュー実施者: 怒りを覚えた時、あなたはどうしますか。
Rosamie: ただ怒っています。
インタビュー実施者: いい女の子になるのは簡単ですか。
Rosamie: 簡単ではありません。
インタビュー実施者: なぜですか。
Rosamie: 彼らが時々いじめるからです。
インタビュー実施者: どう彼らに立ち向かいますか。
Rosamie: 彼らは時々腕白で、特に授業後、私がかばんに荷物を入れておくと、からかってきます。
インタビュー実施者: ご両親はあなたがいい女の子になることをなぜ望んでいると思いますか。
Rosamie: 他の子どもと喧嘩をしない、いい女の子になってほしいからです。

- Rosamie, age 11 (2017), the Philippines

Rosamieは11歳で、男の子にからかわれたり、いじめられたりした際に、彼女が身体的に報復することは期待されていないと理解していた。彼女は「よい女の子」の振る舞いに関して尋ねられた中でそう述べた。また彼女は、その期待に応えるのは「簡単じゃない」、と発言したが、同年彼女は、「ただ怒っています」、と述べただけで殴り返すことに言及しなかったため、概ねそれに従っているようにも思えた。それは過去のいくつかの調査結果とも一致しており、思春期前には、娘が男の子に反撃する様子を称賛し誇りに思う保護者も中にはいたが、思春期になると、女の子はどれほど男の子の暴力の対象となっても非暴力的であること、という強いジェンダー的な期待を支持することが認められた¹⁰⁴。

5.6.5 女の子は家事を拒否している

本報告書とこれまでの「現実の選択、現実の生活」の調査報告書が明らかにした通り、家庭内労働の不均等な責任や、女の子への兄弟より遥かに多くの家事を行うことの頻繁な要求に対し、広範な抵抗は認められなかった¹⁰⁵。しかし、女の子が家事の分担を疑問視したり、家事の遂行を明確に拒否したりした、いくつか事例が確認された。これは、調査対象者の女の子104名の内15名が、幼少期～思春期でさまざまな形で行った事例であった。

エルサルバドルのSusanaの母親は2019年、「彼女が家事をしない」、と不満を述べ、Valeriaの祖母は2021年、Valeriaは「家事が嫌い」で「従順ではない」、と話し、Raquelの祖母は2021年、Raquelが「好きな」家事しかしないと述べた。ブラジルのLarissaの母親は2024年、Larissaが時々家事を拒否し、携帯電話で遊んでいる、と説明した。

ウガンダの調査対象者の女の子の何名かは特に要求された家事が不公平だと感じた場合は、保護者に言われたことに必ずしも従いはしないという考えを支持した。何名かの保護者が、娘が年を重ねるにつれ、家事を怠るようになったと指摘したが、最も顕在的な抵抗の形を示したのはAmeliaであり、彼女は2023年(17歳)、有償の仕事の経験の有無を尋ねた際にこう答えている。「いえ。でも、私が忙しいのに兄弟たちがいつも洗濯を頼んでくるので、彼らの内の誰かが私を働かせたい場合は、私のサービスに対価を払わせます(笑)」。トーゴのAziaは2018年(11歳)、保護者にやりたくないことを指示されたらどうしているか、と尋ねられた際、「病気だと嘘をついて、しません」と答えた。

フィリピンのDarnaは家事を免れるために隠れていたと語った。ベトナムのLyは10歳の時には既に、「母がお金をくれるなら」、という条件で家事をすると決めていた。カンボジアのLinaは2018年(12歳)、彼女の母親は彼女に常に家事をするよう指示するが、「おやつを買うためのお金を稼ぎ、母のために少しお金を残したいから、時々自身で芋を収穫しに行きます(笑)」と話した。つまり、彼女は母親を助けようとしながらも、家で家事をするよりお金を稼ぐ、という助けの形を自身で選択していたのだ。

5.6.6 女の子は貯金している

男性が経済的扶養者で意思決定者であるという強い規範が存在するが、収入創出だけでなく、自身のために貯金する方法を見出した女の子も何名かいた。それは一部の女の子にのみ可能であった。女性が経済的決定にまったく関与しない家庭がいくつかあったり、母親が経済活動を行っていても、母親は娘には不適切であると判断したりする場合もみられた。たとえば、ウガンダのSheilaは調査期間の後半は母親と同居しており、母親は家族で唯一の稼ぎ手であった。Sheilaの母親は夫の死後、夫方の家族からSheilaの親権を取り戻すために闘い、世帯主としての役割を果たすといった、多くの点で規範に挑戦していたが、彼女は娘に対し依然いくつかのジェンダー規範を課していた。その中には、Sheilaの就労や貯金を許可しないことも含まれており、その点についてSheilaに2024年に尋ねた。

インタビュー実施者: あなたのコミュニティで、参加したい活動やグループはありますか。

Sheila: 村の貯蓄貸付グループと葬式時にお互いを支え合うことしか知りません。

インタビュー実施者: なぜそれらの活動に参加しないのですか。

Sheila: ちゃんと私を見たらわかるでしょう! (笑) 母こそ、それらのグループに入るべき人なのかもしれません。

インタビュー実施者: なぜあなたの母親が参加すべきだと言うのですか。

Sheila: 母は大人だからです。私が収入を得て、お金を貯めることは不可能です。

- Sheila、17歳(2024年)、ウガンダ

つまり、確立されたコミュニティや学校の貯蓄グループへの参加は、一見重大な抵抗行為とは思われないかもしれないが、何名かの女の子は行っていたが、女の子の多くには不可能であった、お金の管理と使い道の選択を、私たちはジェンダー規範に対する顕在的な抵抗の形とみなしている。

たとえば、ウガンダのJanelは2024年(18歳)、彼女が定期的に他人の農場で畑を耕したりや労働をしたりして収入を得ていると述べ、その収入をどうしているか尋ねると、「母に、これは私のものだと言います」、と答えた。ウガンダ・トーゴ・ベナン・フィリピン・ベトナムの調査対象者の女の子の中に、女性と女の子向けの貯蓄組合に参加した者の事例を確認した。ウガンダのJustineは2023年(16歳)、「学校に生徒が貯金をするグループがあり、私は会計係で、大きな責任があります」、と語った。

トーゴのLadiは2021年、彼女と友人たちが貯蓄グループを立ち上げたことを説明したが、興味深いことに、その友人たちは皆男性だった。

「私には学校の男の子の友人たちがいて、一緒に遊び・学び・貯蓄グループも一緒に作りました」

- Ladi、15歳(2021年)、トーゴ

同様に、ベナンのAliceは2021年、彼女と彼女の何名かの友人が共同で貯蓄組合を設立したと語った:

「私は(自身の収入から拠出した)お金を管理してもらうよう母に預け、一部は朝食の米代に充て、残りは学校の貯蓄クラブに払っています。毎日50フラン貯めており、友人と一緒にやっています[...]貯蓄クラブを作った時に、順番にお金を集める係を担当することとしました」

- Alice、14歳(2021年)、ベナン

興味深いことに、Aliceの父親は2023年時点では、彼女が収入を得ていることを知らなかった。だが、上記の2021年の発言から、Aliceが少なくとも2年前から収入を得ており、その利益の一部を貯蓄できていたことが示唆され、その収入の恩恵を受けていた母親はそれを完全に認識していたのだ。

銀行や現地のNGOが女の子のための貯蓄組合を設けていた場合もいくつかみられた。フィリピンの調査対象者の女の子14名のうち5名がそれに参加していた。Christineは2024年、貯蓄グループが有益であると述べ、Michelleは2022年(15歳)、「貯金の仕方を教える組織があり、特に急に重要な出費が必要になった時に本当に助かりました」と語った。ベトナムのUyenは貯蓄口座を使い、不安定な家庭状況から身を守る助けにしていた。Uyenの母親は、ベトナム戦争中にUyenの祖父が枯葉剤の被害を受けた影響で身体障がいと学習障がいを持っていた。彼女はUyenを自身で養育することができず、Uyenの幼少期に頻繁に長期間行方不明となり、父親についても不明であった。Uyenの祖母は退役軍人年金を受給しUyenを育てたが、彼女が成長するにつれ2人共、健康状態が悪化していった。祖母が2021年に亡くなり、収入は半分に減ってしまい、Uyenの高齢の祖父のケア負担は一段と重くなった。Uyenの祖父は何度も、彼女の面倒を誰が将来見るのかを心配していた。「私が死んだら、彼女の叔母が彼女を育てる責任を負います。私が早く死なないかと心配です。彼女が20歳になるまで生きたいと願っています。その頃には料理もできるようになるでしょう。それまで生きられるかどうか、わかりません」。

2019年までには、Uyenは、今後はいとこの助けを得て、お金を稼ぎ・貯め始める必要性を強く感じるようになっていた。

Uyen: 私の友人の誰かがオンラインで何か買いたい時は、私が代わりに買い、彼らに売っています。

インタビュー実施者: どこで・どうやって品物を買ったのですか。

Uyen: 私のいとこが買ってくれて、それを私の友人に売りました。いとこは「何か必要なものがあつたら、言って。売るために買ってあげるから」と言いました。

インタビュー実施者: そのような販売をし始めて、どの位経ちますか。

Uyen: 長いです。

インタビュー実施者: その仕事でお金はもらえますか。

Uyen: 私のいとこは私が品物を買うのを手伝うだけで、その品物を友人に売って得た利益は全部、私が高得ます。いとこには一切利益はありません。

[...]

インタビュー実施者: 同年代の子どもがその仕事をすべきだと思いますか。

Uyen: それは普通のことです。

インタビュー実施者: なぜですか。

Uyen: いとこが、貯金するには品物を売るべき、と言っていて、彼女は銀行で貯金カードを作ってくれますから。

インタビュー実施者: なるほど...では、銀行の貯蓄カードは持っていますか。

Uyen: はい。

- Uyen、12歳(2019年)、ベトナム

極めて不安定な経済状況下にいたUyenにとって、いとこの支援と銀行口座が開設できたことが、少なくともある程度自身の人生をコントロールすることを可能にした決定的要因だった。彼女は少額ながら貯金ができ、自身の教育費を支えることができた。

それらの女の子への貯金が持つエンパワーメント効果を過大評価しないことが重要である。調査期間を通し、多くの家庭は貧困下にあり、経済的打撃を受けた家族を、貯金を切り崩して支えるよう求められた女の子もいる。自身のための貯金を維持できた場合でも、月経用品や学用品等の基本的な生活必需品も購入できない家庭状況を助けるために貯金を使う場合が多かった。女の子の個人貯蓄口座では、彼女たちの家族やコミュニティ全体が経験している根本的な経済的不安定の解消にはつながらなかった。とはいえ、自身の貯蓄ができることは、何名かの女の子にとって、若干の自身の人生に対する影響力を得る1つの手段であり、男性が経済的な意思決定者であるとする規範に挑むものであった。

より広範に、調査対象者の女の子のほぼ半数(47%)が何らかの形で顕在的にジェンダー規範に背いていた。女の子向けの正式なグループや組織の利用ができた女の子はほとんどいなかったが、それらへの参加を望む者は何名かみられた。たとえば、Rosamieは政治を議論するための女の子向け組織を望み、AliceはSRHRを議論するクラブを望み、Sheilaは収入があれば貯蓄組合への参加を望んだ。

貯蓄組合を利用できた女の子は、それを重要な支援の形と描写した。彼女たちは高度な主体性を示しつつも、彼女たちには大きな変化の実現のために必要なリソースや支援的環境がしばしば大きく欠如していた。

5.7 女の子が変化を起こす

本セクションでは、抵抗を時とともに強化させ、ある程度高い自由度の獲得に成功した3名の女の子の事例研究を取り上げる。それらは、極めて勇敢で主体的な抵抗の興味深い事例研究である。また同時に、女の子が変化を起こすために必要とするリソース・支援的環境・彼女たちが望む変化の実現を妨げ得る制限的環境に関して、多くを教えてくれるものである。

5.7.1 「女の子も男の子と同様、ボールで遊べる」: Juliana、ブラジル

世界の多くの国で、女性がサッカーするのは、かつて、ある程度は今も、ジェンダー規範への挑戦とみなされてきた¹⁰⁶。サッカーは女性の「素質」に反するとされ、イングランド(イギリス)やフランス等の国々に追従し、ブラジルは1941年、女性がサッカーをすることを禁止した。ブラジルでは、サッカーが女性の「生理的な機能」に悪影響を与え、生殖能力が損なわれるという懸念と明確に結びつけられ、その禁止令は1979年まで続いた¹⁰⁷。ブラジル女子サッカー代表チームは世界最高峰の1つとして認識され¹⁰、試合が広範にテレビ中継され、スター選手は自身のプラットフォームを活用し、スポーツでの女性差別の撲滅を訴えている¹⁰⁸。だが、ブラジルの女子サッカー選手は、娯楽・競技レベル問わず、今もジェンダーバイアス・偏見を経験している¹⁰⁹。

Julianaは、ブラジル北東部マラニョン州の都市部で育った。母親は15歳で彼女を生み、2年後には妹が生まれた。母親が義父と異父兄弟と共に家を出て行ったため、幼少期からJulianaは母方の祖父母に育てられた。Julianaの祖父母は1970年代初頭に生まれ、その頃は女子サッカーが依然違法であり、その禁止令の影響は長く続いた。Julianaが4歳であった2011年、祖父はこう説明した。

「[女の子がサッカーをするのは]普通ではありません。女の子は、彼女たちにふさわしいスポーツをすべきです」

- Julianaの祖父、2011年、ブラジル

同年、彼は「法律がすべてを変えている」と認め、「今、女性は男性と同じ権利を持つ」と述べたが、その事実に対する複雑な思いを抱いているようであった。成長する中で、ジェンダーにより異なる規範・考えは、頻繁に女の子の行動や彼女たちに対する考えを規定する、浸透した社会的「ルール」への疑問視・挑戦をするJulianaと、伝統的な見解と期待を抱いていた祖父母の間でしばしば意見の相違点となっていた。彼らの議論の主要事項は、女の子、具体的にはJuliana、がサッカーをすることであった。

幼少期からのサッカーへの情熱が、Julianaがジェンダー規範や女の子と男の子に対する期待を疑問視し始めるきっかけとなったようである。彼女は2016年(9歳)、兄弟や近所の男の子とサッカーをするのが好きだと話し、2017年には、「男の子のようにボール遊びが好きな女の子もいます」と言及した。それが、Julianaに祖母が彼女に課した、男の子と遊ぶべきではない、という決まりに疑問を抱き始めさせた。Julianaの祖母は2017年、「彼女が沢山の友人を持ち、男の子と遊ぶのがずっと嫌でした」と語っており、翌年Julianaは、近所の友人の兄弟たちと遊ぶことを祖母に禁じられたと説明した。

「彼女[Julianaの祖母]は、男の子の周りにいるべきじゃないと言います。また、男の子がサッカーへの誘いに来たら、私がサッカーを止めるのを求めています」

- Juliana、11歳(2018年)、ブラジル

¹⁰ ブラジル女子サッカー代表チームは過去10年間で、FIFAランキングトップ10入りを9回果たしている。
(<https://inside.fifa.com/fifa-world-ranking/BRA?gender=women>)

祖母が反対し、Julianaは2018年、祖父が「彼女によい振る舞いをしてほしい...女の子の遊びをしてほしい」と望んでいる事実を認識していたが、彼女は男の子と遊び続け、サッカーも続けた。

Julianaは浸透しているジェンダー規範への抵抗を一層明示的に示すようになった。2019年に、男の子とサッカーをしたいと願った女の子が、それに対して保護者から(時に身体的)懲罰を受けたという物語に対する意見をJulianaに聞くと、彼女は怒りを込めて、その物語の女の子の保護者を「少し性差別主義者です」とし、女の子は保護者に逆らい、サッカーをするという夢を追求し続けるべきだと述べた。

**「彼女は続けるべきだと思います、彼女の両親の考えは少し性差別主義者のだから。[...]
そう、彼女が望めば、いつか選手になれるかもしれないから。だって彼女の夢は、私と同じく、
ボールを蹴ることですから」**

- Juliana、12歳(2019年)、ブラジル

Julianaは自身の状況を物語の女の子の状況と関連付け、サッカーをしようとした際に経験した反対に関して語った。祖父母の反対に加え、Julianaの友人からも彼女のサッカーへの情熱に対する反発を受けたことを話し、子どもがどうジェンダー規範を内在化・再生産・強化するかを示した。Julianaの友人に対する反応は、彼女がいかに強く期待に「逆らって」きたかを物語っている。

「[学校の友人が]馬鹿にして、男の子みたいって言うの。いつも男の子とボール遊びしているって...私は彼らにそれは性差別だと言っています。女の子も男の子同様にボール遊びできるから」

- Juliana、12歳(2019年)、ブラジル

2021年、自身のコミュニティで女の子がスポーツをする場を求めて提唱活動する女の子の物語に対する意見をJulianaに求めたところ、Julianaはその女の子を「自身の権利を訴える方法を知っている」と称賛し、自身が過去にサッカーをしたかったが、「男の子がサッカーは男の子だけのものとして私たちに許さなかった」、という似た経験を思い返した。同年、Juliana(15歳)は、その問題が「もう起きない」とこと、その時には男の子が常に彼女も試合に誘ってくれることを喜んでいと語った。

17歳になるまでに、Julianaは祖母をも説得しており、それは、女の子がジェンダー規範に「逆らう」ことが、保護者の考えや信念に影響を与え得ることを示している。2024年、Julianaは困難な時期を経験しており、祖母は彼女が「初期段階のうつ病」に苦しんでいるのではないかと心配した。2024年にJulianaはサッカーにのみ喜びを見出しているようで、「私を幸せにするのは[サッカーを]することだけです」、と語った。それまで祖母は、Julianaがサッカーをすることに完全に反対していたが、次第にJulianaが愛するスポーツをすることが彼女の幸福感に与える好影響を認識し、こう述べた。

「友人と一緒にボール遊びをする時、彼女は解放されます。彼女は楽しんでます」

- Julianaの祖母、2024年、ブラジル

そのため、祖母は態度を以前から180度転換し、彼女がサッカーをする時間を確保できるよう支援・応援するようになり、「それは私が彼女から奪うものではない」と語った。

Julianaのサッカーへの情熱は、他のジェンダー規範への疑問視・挑戦をするきっかけとなったようである。Julianaは幼い頃、女の子の外見や振る舞いに関するジェンダー規範の期待に「応える」傾向を示していた。彼女に2017年(10歳)、女の子が美しくあることは重要かと尋ねると、「[はい]、ブスなら男の子に好かれないから」、と彼女は答え、ジェンダー規範・女の子に対する美の基準・異性愛規範の強い結びつきを示した。彼女は2016年に、男の子は人形で遊ぶべきじゃなく、女の子は車で遊ぶべきではない、と主張し、2015年には、男の子は女の子みたいに歌ったり踊ったりするべきではない、とも述べていた。

「女の子は淑女らしく振る舞い、男の子は紳士らしく振る舞うべきだと思います...[女の子は]身だしなみを整え、髪を整え、足を組むべきです」

- Juliana、10歳(2017年)、ブラジル

だが、サッカーをすることを反対する人びとに反発する中で、Julianaは他の社会的期待にも挑み始めた。それは彼女が成長し、他の影響を受けた結果であろう。Julianaは2019年、自身の服装の種類が変わり、「より男性的」に装うようになった、と発言した。また同年Julianaは、「私にとって外見は重要ではありません」、とも述べ、彼女のそれまでの意見からの大きな転換を示した。

Julianaの物語は、彼女が情熱を傾けるスポーツをすることを妨げる不公平な制限を疑問視する中で彼女が発揮した驚異的な勇敢さと、次第に強まる主体性を示している。またJulianaの物語は、状況への対応からみられる彼女自身の気質に加え、彼女が変化を達成できるようにした、いくつかの実現可能要素を示唆している。特に、最終的に彼女がサッカーを続けられるようにした祖父母の考えの変化がある。

第1の実現可能要素は、ブラジルでの法改正である。それが、祖父母の子ども時代とは異なり、Julianaに法を犯すことなくサッカーをすることを可能にした。

第2の実現可能要素は、ブラジル全体での規範・考えの変化かもしれない。同国の大成功をおさめている女子サッカーチームに関心を寄せる人びとが増えており、2019年ワールドカップでは、同国の女子サッカーチームのフランスチームとの試合を世界中の約5,900万人が視聴した¹¹⁰。

第3の実現可能要素は、Julianaがサッカーをする施設を利用できているという事実である。友人や祖父母からその選択に対し、明らかな抵抗を受けたが、彼女はサッカーができる場所が存在し、そこへ行くことは完全には禁止されてはいなかった。

第4の実現可能要素は、Julianaの祖父母が彼女の健康と幸福にとってのスポーツの重要性を認識し、自身の見解を再考する寛容さを示したことである。懸念や保守的な考えを持ちつつも、彼女の祖母は長年にわたり孫娘の意見に耳を傾け、その意見を考慮する用意ができていた。そして何よりも、彼女はジェンダー規範より孫娘の幸福を優先したのだ。

5.7.2 「女性が家事をすべて担う」: Thea、ベナン

ベナンでジェンダー規範は、無償のケア労働を確固として女の子と女性の役割と位置付けており、女性は男性より8倍超の時間をケア労働に費やしている¹¹¹。全体的に、ベナンの女性は1日の約17%を、調理・掃除・水汲み・育児・市場での買い物等の責務に費やしているが、男性がそれらの活動に費やす時間は1日のわずか2%である¹¹²。女の子は幼少期から家事労働に従事させられ、妻や母親になるための「訓練」期間とみなされ始める。思春期を迎えると、そうした責務に費やす時間は急激に増加する。対照的に、ベナンの男の子の無報酬のケア労働は彼らが成長するにつれ、減少する¹¹³。同国のそうしたジェンダー的な労働分担は、女の子の教育¹¹⁴・雇用の可能性¹¹⁵・幸福¹¹⁶に対し広範に影響を与えている。しかし、「現実の選択、現実の生活」のベナンの調査対象者の女の子から得たデータは、彼女たちがそうした制限的なジェンダー規範に抵抗していることを示している。

Theaはベナンのクワフォで、母親と4人の兄たちとのシングルマザーの家庭で育った。Theaの父親は残念ながら、彼女の幼児期に亡くなり、彼女の母親は、女性が世帯主で家族の主要な稼ぎ手となるという珍しい立場に置かれた。

「夫が亡くなって以来、家族を支えているのは私だけです」

- Theaの母親、2015年、ベナン

Theaの母親はベナンでのジェンダー規範に「逆らう」他の意見も示した。彼女は2012年、自身が高校2年で「支援の欠如のため」に中途退学したことを語り、Theaが彼女より多くの機会を持てることを願い、近年の女の子に関する前進を称賛し、「女の子の就学率が上がっています」、と話した。

時が経つにつれ、家庭の意思決定への女性の権利に関する彼女の意見も変化していった。Theaの母親は2012年、「男性の家」であるため、男性が家庭で決定を下すべきだと述べ、彼女自身が意思決定者となったのは夫が亡くなったためであるだけだと説明した。だが2015年には、彼女はコミュニティ内で発言権や主体性を持ってない他の女性の状況を批判するようになった。

「私たちの周りのほとんどの家で[...]決定権を持つのは男性だけです。女性は食事をし、子どもを産み、黙っているだけでなければいけません。もし求められる沈黙を拒めば、夫の家から追い出されることもあります」

- Theaの母親、2015年、ベナン

そのように、家族の特殊な状況やTheaの母親が一部の領域で進歩的な意見を示していたが、Theaの母親が無償のケア労働のジェンダー的な責任分担に対して持っていた意見は、依然としてジェンダー規範に沿ったものだった。貿易商として家庭外で大きな役割を担っていたためか、Theaの母親は2011年、年が上の息子たちが食事を与えたり宿題の手伝いをしたりするといった、「幼い弟・妹の世話」の責任を負っている、と語り、それはベナンの調査対象者の間では極めて珍しいことであった。だが、Theaが家事労働に参加できるほどに成長するとすぐ、彼女は掃除や皿洗い等の家事を始め、彼女のケア労働の負担は年々増加していった。

Theaが8歳になるまでに、彼女と一緒に住み始めた女性のいとは調理・掃除・食事の支度をするようになり、家族の男の子たちはもはや家事に協力していないようであった。Theaの母親は2015年、家庭内労働の分担に言及し、労働は「公平に分担されている」とし、それを変える必要はないと述べた。

「[Theaと彼女のいとこ]がよき妻・母となるための準備であり、自身の家庭を維持する術を学ぶ手段ですから、それは当然のことです」

- Theaの母親、2015年、ベナン

しかし幼少期から、Theaはそのジェンダー的な期待に抵抗していた。彼女は7歳で皿洗いが嫌だと述べたが、その不満自体が、ベナンの女の子が期待される、喜んで従順にケアの規範に従う、というジェンダー規範に「逆らう」ものであった。彼女は2015年(8歳)、「家が清潔で整っている」のが好きなので掃除を楽しんでいる、と述べたが、Theaは自身に課せられた不均衡に多い労働量に対し、態度的抵抗を示すようになった。

「私は男の子より家事に多くの時間を費やしています。彼らは少し手伝えれば、すぐに止めて「それは女の仕事だ」と言うので...男の子が女の子に沢山の労働を押しつけるのは不公平です」

- Thea、8歳(2015年)、ベナン

彼女は2016年、自分の寝室を掃除して美しく整えるのは好きだが、「庭の掃除は授業に遅刻してしまうから嫌です[...]トイレ掃除は臭いがするから大嫌いです」、と述べ、再び態度的抵抗を示した。

数年後、思春期を迎えたTheaは母親の考えの影響を受けたように思われ、「よい女の子」とは「すべての家事をこなす者」、と説明した。

「男性が家長であるため、女性がすべての家事をします」

- Thea、11歳(2018年)、ベナン

同年Theaは、「男の子と女の子の間で行う仕事の種類に違いはありません」、と述べたが、それは彼女の母親の発言とほぼ完全に一致していた。しかしながら、Theaの母親は、家事をTheaに1日2.5時間させている一方、息子たちは1.5時間させている、と現実を述べた。Theaは2019年、母親がTheaに「良い主婦になるよう準備をするため」、家事をこなすよう求めていると説明し、Theaはこれに満足しているようであった。そして数年後、Theaは以下のように話してくれた。

「結婚したときに庭を掃くのに6分もかけたら笑われる、と母に言われました。なので、今は3分で終わらせています」

- Thea、15歳(2021年)、ベナン

しかし同年、Theaは再び、ジェンダー的なケア労働の分担に関する規範と、それが彼女の人生の他の領域に及ぼす影響を疑問視しているように思われた。

「家事をもっと早く終わらせて、勉強に充てる時間を増やしたいです。今はしなければいけない課題を理解して終わらせるのに時間が長くかかってしまいます。家でしなければいけないことが多過ぎて、友人と会う機会もあまりないです」

- Thea、15歳(2021年)、ベナン

Theaにとって学業は常に極めて重要なものだった。Theaは5歳で、自ら学校に登録するという並外れた行動をした。

「ある日、彼女は自ら望んで兄たちについて学校へ行き、登録を認められました。彼女は校長先生に「就学したい」、と伝えたそうです。校長先生が私に電話をし、娘が学校に行きたがっていることを告げました」

- Theaの母親、2013年、ベナン

それ以来、Theaは何度も学業を修了したいという願望を示し、彼女は2015年(8歳)、「それは大人になったときに重要な人物になるために大切だからです」、と語った。

「大学に進学し、医学の学士号を取得したいです。母が妊娠する前に学び始めていたのが医学だったため、医師になるのが夢です。母は学業を断念せざるを得ませんでした。私は母に誇りに思ってもらいたいです」

- Thea、13歳(2020年)、ベナン

したがって、Theaの無償のケア労働責任が教育に支障を及ぼし始めると、彼女が反発し始めたことは、特筆すべき事態である。17歳のTheaはこう話した。

「ええ、学業に関しては、すべていい成績にしたいのです。家事を減らし、本当に勉強ができる時間を確保したいのです」

- Thea、17歳(2024年)、ベナン

しかし同年、彼女は1日3時間を掃除・食器洗い・調理に費やし、宿題に1日わずかに1時間しか割いていないと述べた。一方、Theaの母親は2024年、彼女は「今は調理が上手で、私が家にいなくても食事を用意できます」、と語り、それが好ましい前進であり、彼女が成熟しつつある証拠であると示唆した。Theaの母親は、Theaに料理を学ばせることを決めたのは自身であるとし、「彼女は女の子だから、食事を準備する仕方を知る必要があります」、と説明した。

Theaは5歳から自ら学校に登録し、自身の学業の主導権を握るという強い主体性と粘り強さを示し、思春期では学費を賄うため働き始めた。母親がTheaに幼少期から助産師になるよう望んでいた一方、Thea自身は医師になることを夢見ていた。だが、Theaは彼女の家事責任が勉強の妨げになることに強い不正義感を感じていた。その状況に対するTheaの態度的抵抗は強まる一方だったが、彼女が18歳になっても勉強より家事に費やす時間が多く、彼女の母親がそれを、妻となるための重要なこと、とみなしていたために、兄より常に多くの家事を課されていた。

Theaの事例で、Theaは規範を明確に疑問視し、自身の学業を擁護・主導する主体性を持っていたが、彼女が自身の状況を変えられなかった要素は2つ存在するように思われる。

第1の阻害要素は、彼女の母親が支持し続ける、男の子ではなく女の子に対する本質主義的見解である。それは、女の子が大人になってから妻・母親として担うことが不可避な役割を果たせるよう、彼女たちは訓練される必要があるとするものである。Theaの母親自身も世帯主であるが、彼女は家事労働がTheaの将来の中核を成し、息子たちはそうではない、という考えを疑問視しなかった。

第2の阻害要素は、シングルマザーが世帯主であるという家庭環境である。Theaの母親は家族全員を養うだけの収入を得ることができてはいたが、高価な時短機器を購入することはできず、水汲みや手洗いで食器洗い・洗濯等の家事が全員で分担しなければいけない重い負担となっていた。Theaの母親はそれらの家事を極めてジェンダー的に割り振ったが、これは劇的な収入増やコミュニティのインフラの改善がない限り、Theaがそうした家事に膨大な時間を費やすことを回避できず、Theaに不公平な負担が生じた。

5.7.3 「彼女はtomboy」: Reyna、フィリピン

フィリピンは、多様なセクシャルアイデンティティ・性自認の受容に関する長い歴史があり、それは植民地化と広範なカトリックへの改宗以前までに遡る¹¹⁷。スペインによる植民地化で、流動的な性とジェンダーの理解が終息したが、植民地化前の考え方の名残は、概してジェンダーニュートラルなフィリピン語の中に認められる¹¹⁸。フィリピンの文化では性的指向を表す固有の単語が存在せず、同国で性に関する言語構造はジェンダーに関する言語構造の中に組み込まれており、ゲイの男性は同性愛を女性性に結びつけた単語である「bakla」と呼ばれ、レズビアン女性は「tomboy」と呼ばれる¹¹⁹。同国で、現在LGBTQIA+のアイデンティティの表現に使用される他の単語は、英語から直接借用されている。植民地前の名残は、同性愛を違法とせず、LGBTQIA+コミュニティに対する同国の比較的支持的な見解にも示されている¹²⁰。また、LGBTQIA+に属する人びとが同性婚の禁止等、さまざまな領域で重大な差別を経験していることが認められる¹²¹。表現や結社の自由に対する国家レベルの法的障壁は存在しない¹²²が、ユースを含むLGBTQIA+に属する人びとが、大学や職場等の公共空間でそれらの権利を侵害されているという報告は絶えない¹²³。

「現実の選択、現実の生活」の調査対象者の女の子の中で、2名の女の子が同性愛の恋愛関係にいたこと明らかしたが、2名共フィリピンの女の子だった。その内の1名がReynaである。マスバテ島の地方で生まれたReynaは、5名の姉と1名の兄を持つ7人兄弟の末っ子だった。時が経つにつれ、兄と姉は家を出ていき、年下の男性のいとこと、後に甥・姪が住むようになった。彼女の幼少期に、保護者は、女の子を何人も持った後に男の子をやっと得た喜びを繰り返し表現し、Reynaの母親は2012年、「息子を授かるまで長く待った」と語った。Reynaの父親は、重い家事を助けるのには息子がいることが望ましい、と考えており、女の子は従順で男の子は素行の悪さを支持される、というジェンダー規範的理想に沿う彼の子どもたちを誇りに思っていた。

「私の息子は、いたづらを隠すのが上手です。Reynaの姉(彼の娘の1人)は、本当に賢くて従順でね。彼女がまだ1年生のとき、他の子どもがまだ遊んでいる中でいなくなったと思ったら、彼女が本を読んでいる姿を見つけました」

- Reynaの父親、2011年、フィリピン

私たちは、Reynaの父親自身が、幼少期から同性愛者嫌悪的・ジェンダー規範的な考えを持っていたことを知った。彼は彼の兄弟が人形遊びをしたために兄弟を殴り、その結果、兄弟がゲイにならなかった、と誇らしげに語った。Reynaの兄に対しても同じことをするかと尋ねると、彼はこう答えた。

「やめるよう言いますが、もし続けたら、彼には杖が待っています」

- Reynaの父親、2011年、フィリピン

Reynaの父親は、彼の息子がゲイなら身体的懲罰を与える、とし、「彼らの大多数は不敬だからです」と同性愛者嫌悪の理由の説明さえした。だが一方で、彼は、男性は感情を表すべきだと考えており、自身が泣きたいときもあることを自覚していた。

私たちはReynaの保護者が彼女と彼女の兄姉が同性愛者であることに対する同性愛者嫌悪的懸念を常に聞いていた。調査初期は、Reynaの兄に関する言及が続いた。

「ええ、時々彼は人形で遊び、私たちはすぐ彼に「ゲイになってしまうかもよ(笑)」、と言います。時々、彼は姉たちのおもちゃで遊びたがります」

- Reynaの母、2012年、フィリピン

しかしReynaの保護者は、女の子がバスケットボールをするのは許容できると述べた。とはいえ、Reynaの母親は2012年、それは「まあいい」程度であることを示唆した。同インタビューで、彼女の母親はまた、男性が世帯主であるべき、とした。

Reynaの両親と後にReyna自身も、男の子/女の子の遊び・ジェンダー的なおもちゃに関し、何度も言及した。Reynaは幼少期(2009年～2010年)、保護者の許可を得て、近所の4歳の男の子と遊んだ。Reynaは人形で遊ぶとともに、保護者が男の子の遊びと考える遊びにも興じた。

Reynaは2013年と2014年に、彼女が男女両方の友人を持ち続け、鬼ごっこで遊び、女の子もおもちゃの銃で遊べる、と話した。Reynaは2015年(9歳)、男の子との友人関係はもうないが、女性の友人とよく「男の子」の遊びをし、男の子が参加することも時々ある、と矛盾したことも話した。その状態は2016年でもみられ、彼女は、時々男の子にばちこを借りて遊ぶこともある、とも話した。

Reynaがジェンダー的役割規範に順応し始めたのはその時期である。たとえば、Reynaは2014年、姉を「tomboy」と呼んでからかったことを明かした。彼女は彼女の父親も姉を「tomboy」と呼び、叔父は「toto」(「愛する小さな男の子」の意)と呼んでいたため、自身もそうしたのだと語った。それらの呼称は、Reynaの姉をレズビアンとレッテル貼りする蔑視の形だと解釈でき、Reynaは自身の人生に関わる大人の同性愛者嫌悪の影響を受けていたことが伺える。しかし、その出来事を語った際、保護者は彼女の姉が「tomboy」であることを認識しつつも、それに対して怒ってはいないと彼女が述べていたことは、特筆すべき点である。

Reynaは2017年(11歳)、将来なりたい人物像として、かわいくセクシーな教師で、母親にもなりたい、と説明し、それは規範的な理想的な美と、伝統的に女性的とされる養育・ケアの役割を反映していた。また彼女は、よい母親は調理し、よい父親は働く、とも述べた。2018年までに、Reynaは、子どもは2人ほしく、その内の1人は料理をする女の子で、もう1人は農場を手伝う男の子、だと語った。私たちは、Reynaの意見が概して「期待に込めていた」その時期に、彼女の保護者がいかに彼女の男の子との交流を制御していたかもわかってきた。Reynaの母親は「Piko」(遊び場での遊び)は男の子だけが遊ぶものとし、彼女にはもう遊んではいけない、と告げたり、男の子が周囲にいる時は外出してはいけない・男の子の言うことに大笑いしてはいけない、とも告げたりしていた。Reynaの父親は、10歳以上の女の子は男の子と友人関係を持つてはならず、特定の男性の友人と遊ぶのを止めさせた、と話した。

Reynaは2019年(13歳)、男の子はゲイだと思われるため、洗濯や女の子と時間を過ごすことはできないと語った。しかし同インタビューで、彼女は、男の子が「いい子で問題児」でなければ、女の子が男の子の友人を持つのは許される、と述べ、保護者の意向に反する考えを示した。当時、Reynaの保護者は、彼女がボーイフレンドを持って学業を修了しなくなることを懸念していた。Reynaは幼少期にジェンダー的役割を多少疑問視したが、思春期初期には保護者のジェンダー的で同性愛者嫌悪的な考えに回帰したように思われた。

Reynaは2020年、姉がレズビアンであると明かしたが、彼女自身・保護者の気持ちや姉の経験に関する詳細は語らなかつた。また、当時Reynaは学校に男性の友人たちがおり、人生の良い変化として最近恋をしたことに言及し、彼女が外出を望んだために父親に叱られて憤りを感じた、と語った。だが、彼女はジェンダー規範的な意見も再度示し、男の子はゲイ呼ばわりされたくないから泣きません、と発言もした。Reynaの母親は2020年、Reynaが外見を気にしておりボーイフレンドを持つことを懸念し、「ボーイフレンドができて怖い」、と述べ、Reynaの友人とのテキストメッセージを監視していた。

2021年、Reynaに秘密のガールフレンドがいることを私たちは知ったが、Reyna自身が話したのではない。Reynaの父親は、彼女が母親に彼女自身を「男の子」(レズビアンという意味)だと思ふ、と打ち明けたと私たちに話したのだ。同年、彼はその出来事について繰り返し言及し、同性愛者嫌悪やトランスフォビアであることが色濃く示された。

「彼女がそうだとは信じませんが、もし本当にそう(レズビアン)なら、どうしようもできません。でもできる限り彼女を変えます。そういう人びとは...男性でも女性にも変わって、それは心の病気です」

「まあ、彼女はレズビアンの姉の後を追っただけかもしれません」

「もし本当にそうなら、私には何もできません...でも私は言いました、将来苦しむのは誰かと。彼女たち自身です。お金があって、それがお前たちのジェンダーなら、老後をどうやって過ごすのだ。子どもなしで、誰が面倒を見てくれるのか、と」

- Reynaの父親、2021年、フィリピン

上述から、Reynaが勇敢にも母親に自身の気持ちを打ち明けたが、母親がそれを父親に話したことがわかる。彼女の家庭では、残念ながら、彼女の信頼を裏切った保護者が、彼女の性を姉の真似として軽んじ、トランスジェンダーであることを精神疾患とみなしていた。2022年以降、Reynaと彼女の家族から彼女の性に関する情報は一切聞かなくなった。

Reynaの事例研究は注目に値する。

Reynaの父親は、自身が幼少期に暴力で兄弟がゲイになるのを阻止したと自負し、2021年でも娘に関し、「可能な限り彼女を変える」と決意を示した。だが、Reynaも彼女の保護者も、彼女がガールフレンドを持ったために懲罰を受けた、という言葉及はしなかった。彼女の父親は繰り返し「彼女が本当にそうなら、私は何もできません」、と発言した。彼女が彼女の保護者の考えを明確に変化させることはなく、彼女のジェンダー表現や性的指向が尊重されない厳格な異性愛規範が存在する環境で生活を続けた。しかし、彼女はその家庭内の規範に勇敢に抵抗し、極めて最低限ではあるが、その抵抗に対して厳しく懲罰を受けることはなかった。Reynaの父親は依然、極めて性差別者・同性愛者嫌悪者・トランスジェンダー嫌悪者であり、彼の考えの変化を過大評価しないことは重要である。とはいえ、彼が異性愛規範を暴力で強いらなかったという事実は、彼自身が幼少期にそうしたことと、「現実の選択、現実の生活」調査の初期のインタビューで息子にそうすると脅したことを考慮すると、Reynaと彼女の姉の人生に対し極めて重大な意味を持つ。

その変化の実現可能要素として考えられるものがいくつかある。第1に、フィリピン全体でのLGBTQIA+の権利に対する寛容度が挙げられる。同性愛者嫌悪が明らかに広範に存在する一方、同性愛は違法ではなく、異性愛規範的行動を顕在的に疑問視する人びとに対する一定の寛容さも存在する。

第2の実現可能要素と思われるものは、Reynaの姉が明確にレズビアンであると示した勇敢さである。それが、妹に自身の性をより明確に示せる道を開いた。

Reynaの勇敢で主体的な行動は、必要なリソースと支援が得られたならば、一層大きな変化を実現したかもしれない。具体的には、保護者向けの前向きな子育てやLGBTQIA+の権利に関する啓発キャンペーンや保護者の暴力や「転換療法」から子どもを守るための強固な法的枠組みの整備等が挙げられる。

6. 結論

それらの調査結果から、女の子の現在の抵抗の形と彼女たちが関与したい抵抗の形に関し、いくつかの結論を導き出した。それらは女の子の活動を支援するプログラムや政策に、重要な示唆を与えるものである。

6.1 女の子の現在の抵抗の形

機会均等への支援

女の子の大多数が、特に教育の享受・キャリア志向(それがジェンダー的であることが多くても)・平等な自由と移動の権利・女性の経済的エンパワーメントに関して、平等主義的主張を示している。保護者も、教育の享受を含む機会均等と一定の政治的代表性を概ね支持している。だが、保護者の大多数は依然、特定の役割が「本質的に」男性/女性に属するとする、本質主義的な考えを持ち、それは、女性を家庭内領域と結びつけ、男性を稼ぎ手・意思決定権と結びつけることを伴うことが多い。保護者の多くは、そうした考えが**機会均等への支持と矛盾し、それを損なわせている**ことに気づいていない。

規範への問い直し

女の子の多くは、ジェンダー的な家事分担・彼女たちの移動や交友関係の制限・男性の暴力等、ジェンダー規範を疑問視し始め、それらが男女の自然的・本質的素質に関連するののか、もしかしたら**社会的要素・期待**によるものではないかと、問い直し始めるのだ。調査結果から、彼女たちが保護者より遥かに低い割合で、ジェンダー的役割が固定的で不変であると捉えていたことが判明した。

態度的抵抗

ジェンダー規範に対する態度的抵抗を示し始め、兄弟より多くの家事を課せられることに対する**不正義感**や意思決定の場での女性の不在に対する怒り等、ジェンダー的役割を**不公平**と表現し始めた女の子が何名かみられた。保護者に怒りを示し、従わないことをほのめかす女の子もいた。しかし、そうした女の子の中には、ジェンダー的役割に対する嫌悪の提示が、**自身が可能な抵抗の形の限界**だと感じている者もあり、それらの女の子は、背くと脅しつつも、結局は期待される行動を行っている。たとえば、女の子の多くが幼少期の間、家の家事分担が嫌であると述べたが、実際に割り当てられた家事を拒否した者はほとんどいなかった。

明示的抵抗

女の子の多くが変化を求めている。彼女たちは、家庭内労働の極めて重い負担の軽減のために男の子がもっと手伝うこと・女の子の関与に必要な支援と施設を大人が提供すること・女の子の意見に耳を傾けること・SGBVの対応に大人が積極的に取り組むこと・充実した性教育を提供することを求めている。調査対象者の女の子の83%が、量的・質的に充実した性教育を望んでいる。

それらの調査結果は、女の子の圧倒的多数が、**コミュニティを女の子にとって安全で公平にするために大人が**でき得る**ことを示唆している**。だが、女の子の権利について主張する女の子たちに関する物語に対する反応から、彼女たちの87%が、自身がそうできると感じていた女の子は知らないことが判明した。したがって、明示的抵抗は広範にみられ主体性も高かったが、それらは必ずしも彼女たちが個別インタビュー外で共有できると感じた意見ではなく、彼女たちが皆そうしたテーマに関する規範に顕在的に挑んでいたわけでもない。それは、**大人と組織が彼女たちの意見を一層傾聴し、彼女たちが望む変化の実現への支援を一層強化する重要性を示唆している**。

秘密の抵抗

女の子の多くは、秘密裡に抵抗している。調査対象者の女の子の8名の内1名は、保護者に隠れて収入を得ている。調査対象者の女の子104名の内少なくとも40名は、幼少期～思春期に、男の子との秘密の友人関係を持っており、24名は保護者に恋愛関係を隠していた。それらは彼女たちの行動に関する保守的な規則に対する極めて主体的な抵抗の形ではあるが、性教育やSRHの享受の機会が欠如する状況下でそれらは、**彼女たちの幸福に対する重大な危険も孕んでいる**。調査終了前に母親となった何名かの女の子から、妊娠は望んでいなかったことが明らかになっている。保護者が秘密の恋愛関係に気づき、脅し・所有物の損害・テクノロジーの利用制限を経験した女の子もみられた。女の子の多くは、期待される行動に背いたことで暴力的な結果を被っている。

顕在的行動的抵抗

調査対象者の女の子のほぼ半数が、女の子に期待されるものに合致しない振る舞いや服装・いじめや暴力からの自己防衛・家事の拒否・貯金による自身の財政管理等、ジェンダー規範に対する**何らかの顕在的行動的抵抗を示した**。

望まない男性の関心を避けるために暴力や攻撃性で身を守る女の子も何名かみられたが、思春期になってから、彼女たちの多くが、受動的であるべきとする女性的規範への順応への圧力を感じている。攻撃的行動を取ることが彼女たち自身の安全を脅かすものであることもまた、明らかである。

6.2 女の子が望む抵抗の形

集団的な抵抗活動に参加した女の子は極少数だったが、彼女たちの多くが参加を望んでいた。自身で変化を起こそうとした女の子の多くは、**大人が設けた障壁や彼らの無関心を経験した**。彼女たちは解決策として、彼女たちに影響を及ぼしている政治的・社会的・経済的問題に関して議論し、意思決定者に直接意見を伝えるための、女の子クラブの設立や、自身の財政を直接的に管理できる女の子のための貯蓄組合の創設等を提案した。

また女の子の93%は、既にそうした行動を起こした女の子は知らないとはいえ、コミュニティで女の子の権利問題について女の子が声を上げるという考えを支持した。

調査結果は、大きな変化の実現のためには、高い主体性を示した女の子でも**リソースと支援を求めている**ことを示唆している。本調査で特定された支援の形には以下が含まれる: 女の子グループ/クラブ/貯蓄組合の設立・ジェンダー不平等と女の子の権利に関するコミュニティレベルでの啓発活動・男の子と女の子双方への前向きな子育ての促進・体罰禁止法や転換療法禁止法と併せた、女の子のコミュニティへの平等な参加を支援する強力な法的枠組み・主要インフラの利用可能性の改善や時間短縮につながる機器の入手等、家族の無償ケア労働負担軽減を目指す取り組み・女の子が運動や遊びを行える安全なコミュニティ施設の整備。次のセクションでは、多くの女の子が主体的な抵抗の形に関与できる環境創出ため、重要な利害関係者に向けた主要な提言を提示する。

7 提言

私たちは、市民スペースが縮小し、世界中で女性と女の子の権利が後退している状況下で、以下の提言を提示していることを認識している。その現実には、活動の従事者を重大な危険に晒しており、声を上げたり顕在的に抵抗したりすることは、特に女の子にとって危険である。究極的には、世界の女の子の多くにとって、主体的に行動すること自体が危険になり得るのだ。

そうした背景を踏まえ、私たちの提言は、女の子に対し、顕在的な抵抗の促進を意図してはおらず、女の子が既実践しているジェンダー不平等に対する日々の抵抗・彼女たちが経験している障壁・彼女たちのコミュニティに望む変化の実現のために大人に求めている支援について、より深く理解することを目的としている。私たちは特に、彼女たちの主体性発揮能力の形成のために、彼女たちの環境やリソースがどうあるべきか、また多くの場合において、どのようにして彼女たちの前に大人が障壁を置くことを阻止できるか、という点に重きを置いている。彼女たちの声を傾聴することで、主体性・リソース・実現という真のエンパワーメントに必要な要素が特定できる。

女の子の声を傾聴することで、私たちは「～する力」の種類を拡大を図っている。それは、期待される行動を疑問視し拒否する力・高い自由度を求める力・皆が公平に暮らせる環境を創出する力である。秘密裏・顕在的を問わず行動的抵抗を採る女の子は、既に自身のコミュニティ内で規範を変える力を備えている。私たちはその力を一層強化し、ジェンダー規範への抵抗を明示できても行動に移せない女の子も、前向きな変化を起こす「力」を持つようにすることを目指す。具体的には、女の子が望む変化について議論できる場を大人が用意し、信頼できる大人がそれらの議論内容を意思決定者に伝え、対応がなされる仕組みの確立を目指している。私たちの究極的な目標は、彼女たちが行動的抵抗だけに頼る必要がなく、自身のコミュニティに変化を起こす力を持つことである。

したがって、私たちは以下の提言の提示により、女の子と彼女たちのコミュニティがジェンダー不平等を認識し、彼女たちがそれを特定するスキルを身につけ、自身で選んだ形の抵抗行動への実行・関与するために必要なリソースと安全な環境が利用できるようにすることを目指している。私たちの提案は、女の子が既に日々行っている多様な抵抗の形の補完となるよう設計されている。

Against the Grain Girls' Everyday Resistance



政府・当局

- 直ちに法律の中でのジェンダー平等の明文化・女の子の権利の行使を妨げる差別的な法的規範の撤廃・体罰/転換療法/他の有害な慣行の禁止法の立法/政策枠組みの施行/強化・その法律の実施/執行を保証するためにリソースを投入すること。
- あらゆる人が表現・結社・集会の自由の権利を行使できる、開かれた市民スペースを提供すること。
- 良質で包摂的なジェンダー・トランスフォーマティブ教育に投資すること。特にそれを教育カリキュラムに統合することに重点を置くとともに、ジェンダー平等や安全に変革のためのアクティビストとなる方法について議論できる、安全で支援的な空間を学校内に設けるようにすること。女の子とユース女性向けの金融リテラシー教育や、女の子の高等教育への進学やSTEM関連キャリア開拓のための進路支援等、機会均等の強化プログラムを実施すること。

- 安全でコミュニティベースのプログラムや女の子のエンパワーメント・リーダーシップ・権利の啓発の取り組みへの資金提供によって、ジェンダー不平等を維持させる**ジェンダー規範への挑戦に投資**すること。
- **女の子が自身に影響する問題について意見共有ができる信頼性のある議論の場を創設し**、そこでその意見を現地・地方の意思決定に反映させる仕組みを設けること。
- 女の子に、教育や雇用等の機会を選択できないと感じている、または利用しないと選択している理由について、聞き取り調査を実施すること。
- ジェンダー平等の啓発促進のため、**CSO・女の子主導の組織/グループを含むNGO・コミュニティリーダー・地方自治体に対する支援・リソース提供・連携**をすること。また、そうした女の子主導の組織/グループの創設を支援すること。
- 家族が水道・電気・時短機器を利用できるよう、必須インフラへの投資をし、**家庭の無償ケア労働負担を軽減**させること。

NGOとCSO

- ジェンダー規範を強化する行動や意見に挑戦するワークショップにより、**前向きな子育てを促進**すること。男の子に暴力を振るわないよう教える方法を提供し、女の子への身体的懲罰や男性の「自然な」暴力に関する社会的規範の変革を図ること。
- 女の子に対して、現在のジェンダー的役割が本来享受できるべき機会の利用をいかに妨げているか・労働者の権利と職場でのセクシャルハラスメント・金融リテラシーに関する**啓発ワークショップを直接提供**すること。
- 保護者・男性・男の子・宗教指導者・コミュニティリーダーなど、**女の子の生活での主要な集団を対象に啓発ワークショップを実施**して、好ましいロールモデルの探求・成功事例の奨励・女の子の自身の生活や家庭に関して意思決定者として行動する能力の認識を促進させること。
- **SRHR教育キャンペーンを展開**し、女の子に妊娠やSTIの可能性の回避方法に関する知識を習得させるとともに、信頼できる大人が彼女たちとSRHRについて話し合えるよう、保護者や教師を参加させて情報を提供すること。
- **女の子に雇用・職業訓練・研修の機会を提供**して、伝統的に男性が多い領域を含むさまざまな領域で自身の将来像を描け、自身を、家計を支える存在であり、かつ有能な意思決定者として認識できるよう支援すること。
- **女の子とユースに**、行政サービスの実情を追跡・評価できる**社会説明責任ツールの使用に関する研修**を提供し、それらのサービス改善を提案するスキルを構築させること。
- 女の子が安全に収入を預けられる**貯蓄組合の利用可能性を高める**こと。
- 女の子が日々の生活で不公平と感じる事柄・変化の実現のために必要なもの・NGOが彼女たちをどう促進・支援できるかを安全に議論できる場として、**女の子の協議機関や評議会の設立・強化**をすること。
- 集団行動に関する教育要素と組み合わせた、女の子が互いにつながり、抵抗の経験を共有できるオンライン空間を含む、**非公式な女の子グループや安全なスペース**を設けること。
- 財政的・非財政的リソース提供により、**女の子主導の組織/グループを支援**すること。
- 女の子の議論の場を運営し、彼女たちの意見を現地・地方・国家の意思決定者に届ける仕組みを確立し、**女の子と当局をつなぐ**こと。女の子が主導権を求めている場合、NGOは変化を推進する際に女の子のグループを対等なパートナーとして協力・資金提供すること。
- NGOは、キャンペーンや啓発資料で、**多様な抵抗の形を称賛**すべきである。女の子全員が顕在的な可視化された活動・抵抗に関与できるわけではなく、彼女たちが日々沈黙下でジェンダー不平等に抵抗する称賛すべき行為も認識すること。

地方自治体とコミュニティリーダー

- とりわけオンラインの安全性への注意を含め、**女の子が安全でいられるよう、彼女たちが必要とする施設と情報を提供**すること。

- 貯蓄組合や女子サッカークラブ等、**女の子主導の取り組みの設立を支援・促進**すること。
- 女の子との面談**を通して、彼女たちが期待される役割で変化を望む点・教育や雇用等の機会の享受と実現に必要なもの・秘密裏な抵抗行動を採らざるを得ないと感じる状況を聴き取ること。それにより、女の子が周囲の信頼できる大人から支援を受け、自信をもって成長・学び・探求できる環境を提供すること。
- 女の子が悩み事や、望んでいる施設、自身でもできると感じる抵抗**について、個々の女の子に発言やリスクを負うように圧力を感じることなく、**安心して話し合えるスペースを設ける**こと。責任ある大人はそうした場で彼女たちに指導・支援を提供し、彼女たちの望みが権力者に伝わり、対応が行われるよう、意思決定プロセスに反映させる仕組みを構築すること。
- 女の子との公聴会・諮問委員会・他の形態のユース代表等の取り組みにより、**女の子に現地・コミュニティでのリーダーシップと意思決定への関与の機会を提供**し、彼女たちが属しているコミュニティを自身で形成する機会を得るようにすること。
- ジェンダーに配慮し、必須インフラや短時間機器の利用可能性向上による、家庭での無償ケア労働負担を軽減し、地域レベルでの**社会支援の利用可能性を高める**こと。
- 女の子とCSOとの直接協議の中で、現地の議会の議題に対する女の子の演説等、女の子の有意義な関与により、**女の子主導の行動や懸念を可視化**すること。
- 事業活動全体にジェンダーへの配慮がなされている**ようにし、サービスの利用がジェンダーと年齢に対応したものであるようにすること。
- 暴力に関する法律の執行・法執行官の研修・通報の仕組みの改善・コミュニティレベルでのサバイバーを中心に据えた支援の提供を含む、**GBVへの対応措置が策定・実施される**ようにすること。

学校と教育者

- 女の子が自身にとって重要なテーマについて話し合い**、恋愛関係・友人関係・性行為・家事に対する意見を安全に共有できる**クラブやスペースを設ける**こと。また、彼女たちがリーダーシップ・リーダーシップスキル・好ましいロールモデルを学ぶ場も提供すること。
- 男の子と女の子双方が参加できる、スポーツ・遊び・おもちゃ・チームワーク等、**ジェンダー混合の活動が安全で互いを尊重し合う環境の中で行えるスペースの設置・強化**すること。家事よりも学習・遊び・休息を重視し、学校での女の子の負担を軽減させること。
- 学校でのリーダーシップと運動活動について子どもに教える、**ソフトスキルの育成をカリキュラムに組み込む**こと。
- 女の子が望む将来を想像・言葉で表現できるよう支援するため、描画や作文等の、創造的で年齢に応じた方法を採用し、**彼女たちが望む将来について考察・話し合い・共有できる機会を提供**すること。
- 教師と運営組織に対し、ジェンダーと年齢に関する意識啓発**を行い、彼らがジェンダー面でのエンパワメントを主導し、学校内でのジェンダー平等の実現のために必要な特別措置を実施できるようにすること。
- GBVへの挑戦に**男性と男の子を関与**させ、学校内の暴力・いじめ・ハラスメントの発生件数を減らす取り組みを提供し、男の子を女の子のエンパワメントの擁護者となるよう推進すること。
- 女の子の体の変化・健全な恋愛関係・同意・SRHRを網羅した**CSEを提供**すること。
- 女の子が学校の指導的立場に就く機会を得られ**、学校環境の形成への有意義な貢献ができるようにすること。
- 一般的な教育を受けていない可能性のある、疎外されて支援の手が届きにくい女の子が、教育・スキル構築技能向上セッションを受ける機会を得て・参加できるよう、**正式な学校教育の場以外で研修を提供**すること。

Annexes

Annex 1

- Participated
- Temporary Absence
- Not Part of the Study
- Left the Study

NAME	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
Africa																		
Benin																		
Alice	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Annabelle	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Barbara	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Catherine	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Eleanor	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Isabelle	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Jacqueline	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Layla	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Margaret	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Thea	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Togo																		
Ala-Woni	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Anti-Yara	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ayomide	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Azia	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Djoumai	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Essohana	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Fezire	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Folami	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ladi	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Larba	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Lelem	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Mangazia	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Nana-Adja	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Nini-Rike	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Reine	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Tene	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Uganda																		
Amelia	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

Beti	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Dembe	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Jane	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Joy	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Justine	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Miremba	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Namazzi	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Nimisha	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Rebecca	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Sheila	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Shifa	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Sylvia	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

The Americas

Brazil

Gabriela (Formerly Amanda)	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Bianca	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Camila	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Fernanda	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Juliana	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Larissa	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Natalia	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Sofia	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

Dominican Republic

Chantal	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Dariana	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Griselda	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Katerin	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Leyla	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Madelin	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Nicol	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Raisa	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Rebeca	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Saidy	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Sharina	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Valerie	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

El Salvador

Bessy	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Doris	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Gabriela	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Gladys	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Hillary	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Karen	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Mariel	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Raquel	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

Rebecca	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Stephany	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Susana	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Valeria	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Southeast Asia																		
Cambodia																		
Bopha	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Davy	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Kannitha	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Leakhena	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Lina	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Mony	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Nakry	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Reaksmey	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Roumany	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Sothany	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Philippines																		
Chesa	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Christine	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Darna	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Dolores	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Jasmine	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Jocelyn	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Kyla	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Mahalia	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Maricel	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Melanie	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Michelle	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Reyna	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Rosamie	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Rubylyn	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Vietnam																		
Huong	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Kim	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Ly	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Quynh	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Sen	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Tan	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Tien	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Uyen	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Yen	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

Annex 2

The girls' football vignette, as told to *Real Choices, Real Lives* cohort girls in 2021 (Philippines version):

So, this is my story. There is a girl named Ana, she's fifteen years old. She lives in a faraway barangay and she likes to play football. She noticed that most of the time all of the football players are boys and she's not allowed to join because they said, "You're a girl." But Ana knows that there are many girls who really like playing football. There are many old people in their area who say that girls shouldn't play football because the playing field is dark, far away, not safe for girls and all her playmates are boys so why should they play football. Ana said to herself that it's not equal, "It's not fair that boys can play football but us girls aren't allowed." Ana thought and mustered the courage to talk to the elders of their barangay.

She started by talking to her parents, next she talked to her teachers and barangay officials. She suggested that girls need a safe space to play football and other sports. Now, many girls heard that she did a dialogue, other girls also talked to many parents and the latter agreed with them. Until the barangay officials discussed that they would find a safe area to play football and other sports so girls in the barangay can play. Now Darna, how did you feel about the story?

Annex 3

Benin

Real Choices, Real Lives cohort girls live in the Couffo department in central south region of Benin, 120 km from the capital of Cotonou. It is semi-urban area, characterized by agriculture and poultry farming. Adja is the most spoken language in the area and the main religion is the endogenous religion followed by Christianity.

Girls' and Women's Rights in Benin

In 2004, Benin reformed the 1931 Family Law that was codified by the French colonial authorities and based upon customary law. The changes equalised the legal minimum age for marriage (18 for men and women); gave men and women equal rights in divorce, child custody and inheritance. The new law forbade the practice of levirate (in which a brother is obliged to marry his brother's widow), repudiation and polygamy. It also allowed women to add their maiden name to their husband's name, a practice that was not previously permitted.¹²⁴

More recently, in 2021, a series of reforms offered strengthened protections for women and girls. An overhaul regarding sexual health ensured that services would offer sexual and reproductive information, modern contraception, prenatal and postnatal health, access to safe abortions, and support to GBV survivors. Separately, the definition of GBV was expanded and criminal sentences were increased or instituted for sexual harassment, rape, child marriage and FGM. From 2022, the government began the cross-country rollout of free education for girls in upper secondary school.¹²⁵

The Government holds a comprehensive Children Code which addresses the prohibition of a range of harmful practices such as forced marriage, sexual abuse, female genital mutilation and cutting, trafficking, exploitation of children for domestic purposes, infanticide, illegal and prolonged detention, early pregnancy and using children as beggars.¹²⁶

Highly restrictive social and gender norms for girls in Benin mean they experience a range of discrimination and violence.¹²⁷ More than 50 per cent of men uptake decision making on behalf of women, regarding the woman's healthcare and investments for the household.¹²⁸

In Benin, women's decision making is limited in the private sphere and in public economic and political life. Women are primarily seen as caregivers and responsibly for unpaid household labour, which has implications for their ability to access decent work opportunities. From 2019, women's labour force participation was at 69.3 per cent, having risen from 57 per cent in 1990, though they are overrepresented in the informal sector compared to men (95.5 per cent vs 86 per cent).¹²⁹

Five women occupy the 23 ministerial positions available in 2021, in which women represent seven per cent of the National Assembly.

Historical Context

Benin, named Dahomey until 1972, gained independence from France in 1960. In the pre-colonial era of the 19th Century, women held roles as queens, warriors and in governmental positions. French colonisation saw a sharp decline in women's roles in public life, with few women able to hold positions of authority as before. Upon Benin's independence, women have strived to regain their roles in public life. The transitions towards democracy in Benin in the 1990s, and greater educational access, has slowly recuperated women's roles in Benin.¹³⁰

Girls' and Women's Resistance

Women's groups in Benin are actively seeking to empower their positions in land ownership and agricultural entrepreneurship. The 2016 project "Initiative for Empowering Women Farmers in Benin - "Miguézé!" has helped rural women in Benin access land, build agricultural and technical skills, establish women's Savings and Loans Groups, and encourages income-generating activities to boost food productivity and security.¹³¹ A network of women politicians working to improve women's rights and leadership - as the Union des Femmes Élués Conseillères Communales (UFEC) - support women through the administrative processes to obtain land rights and to advocate for their legal rights.¹³²

Brazil

Four of the girls live in São Luís, the capital of Maranhão province, and four live in Codó where three live in a rural area and one in a semi-urban community. All had close access to school but the Covid-19 pandemic and strikes greatly affected their education. Some families rely on agriculture for a living and the rest have informal jobs such as selling products at the market, painting, unregistered employees, and government assistance.

There are a high number of child marriages and teenage pregnancies in these two areas. The girls who live in São Luis have access to the internet, although this is precarious, and the girls in Codó do not have access to a mobile phone because there is no signal in the region, which has high levels of economic deprivation.

Girls' and Women's Rights in Brazil

The Convention on the Elimination of all Forms of Discrimination Against Women (CEDAW) was ratified by Brazil in 1979. Yet, in a breach of CEDAW, it was only men who were able to be legally recognized as the head of household until 1988.¹³³

The re-democratisation phase of the 1980s opened up discussions about the legitimate need for greater political participation by women, and in the 1990s political representation was given greater recognition.¹³⁴ The 1995 quotas for women candidates in politics was first established in 1995, with now at least 30 per cent of women candidates to be nominated by political parties. Despite this quota, this is not always enough to promote a change in those elected. As of 2022, women represent 18 percent of congress members,¹³⁵ 15 percent of legislators and 11 percent of ministers in Brazil.¹³⁶ In Brazil, 81 percent of sitting congresswomen and 75 percent of women running for mayor in 2020 experienced political violence.¹³⁷ In response, a 2021 law was enacted to prevent, repress, and combat political violence against women.¹³⁸

From 2017, Brazil's Labour Code prohibited gender discrimination during the hiring process and in 2023, it was further amended to require gender pay equity.

Historical Context

The republic constitution of 1891 - born out of the First Brazilian Republic - did not strictly prohibit women's right to vote but did not recognise women as citizens and individuals with voting rights. Though women were not legally deprived of the right to vote, those who tried to register to vote were denied this right. Brazilian feminists of the time were influenced by the suffrage movements of the United States and Europe. Their advocacy was purposeful, and sought to win over their claim to public life by arguing the domestic sphere would not be affected. The right to vote was actively extended to all women in 1932, but they only gained full equal voting power when their vote would be compulsory - like men's - in 1945.¹³⁹

In the early Twentieth Century, White landowners controlled much of economic and political life and women's social positions were limited. Poor and Black Brazilian women had poor access to education and difficult working conditions - as domestic servants or textiles workers - in the face of rapid urbanisation. By the 1980s, feminist groups emerged out of leftist parties, women's social movements and Indigenous movements to articulate the dimensions of social class, race, and gender as structuring social relations in Brazil.

Girls' and Women's Resistance

Various modern girl-led acts of resistance are apparent in Brazil, and often intersecting issues of gender equality, climate, race, and class. Girls and young women are participating in calls by education networks that demand quality and inclusive education in Brazil.¹⁴⁰

The feminist and anti-racist NGO, *Criola* in Rio de Janeiro has worked with Black women since 1992 to focus on women's and children's rights, grassroots movements for housing and healthcare, LGBTIQ+ issues and anti-racism. The youth-led organization called *Engajamundo* empowers Brazilian youth to participate in local, national and international political processes, particularly concerning their socio-environmental impact.¹⁴¹ The Feminist Activism among Youth in Brazil (FAYB) project is girl-led and uses creative and arts-based approaches to prevent gender-based violence (GBV) among young women (ages 16-24) in Brazil's favelas.¹⁴²

Cambodia

Girls are from villages across the Tbong Khmum province and the Siem Reap province, respectively. The population mostly follows Buddhism and the largest ethnic group is Cambodian. Most of the village population are farmers (rice farm, rubber plantation, core, casava and sale labour).

Girls' and Women's Rights in Cambodia

Khmer culture of Cambodia entails that women are expected to take up caregiving roles and orientate their lives around the domestic sphere. Much of Cambodian culture is based upon the *Chbap Srey*, or 'law for women', an informal set of rules passed down intergenerationally based on a centuries old poem. The rules instil highly regarded gender and social norms on how wives should honour their husbands and on the importance of boys 'education over girls'. Though it was previously taught in schools through the national curriculum until 2007, it is recognised some schools still teach the *Chbap Srey*.¹⁴³

The 1993 Constitution which followed the fall of Khmer Rouge enshrined equal rights between men and women, including for employment, pay parity, and in the value of household labour. Yet, in its first democratic election in the same year, only five of the 120 seats in the National Assembly were won by women (4 per cent). By 2021, women held 26 per cent of seats in the National Assembly.¹⁴⁴

Though Cambodia strengthened SRH laws in the 1990s with the the Birth Spacing Policy in 1995 and the Abortion Law in 1997, contraception access is limited in rural areas. The 2017-2020 National Strategy for Reproductive and Sexual Health by the Ministry of Health sought to improve sexual health service access.¹⁴⁵

Penal Codes from the 2000s provide a range of legal provisions to protect women and children against violence, including marital rape and domestic violence and human trafficking and sexual exploitation.¹⁴⁶

In 2019, a draft legislation on the Law on Public Order was circulated in which women dressed 'inappropriately' would be fined or prosecuted. Women's national rights groups protested this, but recognised that circulating the draft was a positive step towards public consultation.¹⁴⁷

Historical Context

Following the Cambodian Civil War, from 1975 and then until the end of the genocide in 1979, there was a deficit of male labourers which resulted in women taking on some manual labour positions. From the 1990s, many rural women migrated to urban areas for work in garment factories. Today, 90 per cent of Cambodia's garment workers are women and the garment workers unions have led successive workers' rights protests over recent years.¹⁴⁸ The Khmer Rouge regime imposed radical changes, considered to be the most gender-equitable time in Cambodia's history. In the wake of the regime's fall, many Cambodians wished to return to pre-Khmer Rouge traditions, leading to a revival of the traditional ideals of femininity and masculinity, including the Chbap Srei.¹⁴⁹

Girl's and Women's Resistance

Cambodian women often bear the brunt of land grabs and dispossessions and therefore are involved in activism and resistance to these practices.¹⁵⁰¹⁵¹ Often these women have adopted campaigns of nonviolent protest, using their position as wives and mothers to morally shame police when they are beaten.¹⁵² Equally, women, known as the "Friday wives", marched through the streets of Phnom Penh to picket courts and international embassies to demand the release of family members imprisoned for political opposition.¹⁵³

Dominican Republic

Girls live in two broad areas of the country: in communities outside of Azua (southern area of the country) and in communities across San Juan, in the Valle Region.

These communities are all rural and purely agricultural areas, and the girls come from low-income families. In Azua, the livelihoods depend on agriculture especially tomato and banana cultivation, while one of the communities is a coffee growing area. In San Juan, men of the communities involved in this study are engaged in agriculture and animal husbandry and the women in domestic work. In this area the most cultivated products are onions, pumpkins, beans, maize, avocado, among other minor fruits.

The predominant religion is Catholicism and, more broadly, Christianity.

Girls' and Women's Rights in the Dominican Republic

In the Dominican Republic (DR) sexism remains present throughout society and culture, reproducing patriarchal practices both within the home and in the public sphere.¹⁵⁴ The Dominican Republic has one of the lowest rates of gender equality in the LAC region.¹⁵⁵ Traditional gender norms still hold strong influence over the expectations of gender roles within Dominican society, with just 41.4 per cent of adolescents favouring normative egalitarianism between genders.¹⁵⁶ This means that in historically male dominated spaces, such as in politics or in the workplace, equality is not desired.

Gender stereotypes of women as mothers and belonging in the household are reinforced by the coupling of machismo with conservative Roman Catholicism.¹⁵⁷ These traditional gender norms are reflected in the attitudes of caregivers towards girls' behaviour. For example, it was found that Dominican families consider adolescent pregnancy as girls' responsibility exclusively.¹⁵⁸ This occurs in the context of little access to sexual and reproductive rights, and the criminalisation of abortion under all circumstances.¹⁵⁹

Women and girls in the DR face high levels of violence, with 2.9 women per 100,000 victims of femicide.¹⁶⁰

Historical Context

As other countries in the LAC region, the DR was colonised by the Spanish until independence in 1844. The DR has a small population of 10.7 million people.¹⁶¹ Among the Dominican population, 45 per cent identify as 'indio' (comparable to 'mestizo' or mixed-race), 33 per cent as 'moreno', 'mulato', or Black (signifying some level of African descent), and 18 per cent as white.¹⁶²

Girls' and Women's Resistance

Historically in the DR women have participated in resistance efforts despite the prevalence of *machismo*. Women have been part of the wars and revolutions that brought an end to colonialism, they have resisted dictators and protested military rule.¹⁶³ As a result, many of these women remain as symbols of feminist movements in the region. This includes the Hermanas Mirabal from the DR, who opposed the dictatorship of Rafael Trujillo and organised activities against his regime.¹⁶⁴

Moreover, Dominican women are part of regional feminist movements such as the *Ni Una Menos* collective (Not One Woman Less), demanding an end to the pervasive issue of femicide and seeking to combat the multitude of ways in which sexist aggressions manifest.¹⁶⁵

El Salvador

The girls participating in the study live in the department of La Libertad in El Salvador. Some of the families live in remote rural communities, in mountainous areas that are difficult to access during the rainy season. Others live on the outskirts of La Libertad (semi-rural). The families are located in the coastal area which means the girls are more prone to trafficking and commercial sexual exploitation, forced pregnancy, school dropouts, and this is aggravated by the pandemic that mainly affects children and adolescents.

Girls' and Women's Rights in El Salvador

Within the Latin America and the Caribbean (LAC) region, El Salvador has one of the lowest rates of gender equality, according to UN Women.¹⁶⁶ With high levels of machismo, paternalism, and conservative Roman Catholicism, gender norms and stereotypes that position women as natural mothers and their place as within the household are reinforced and maintained. Furthermore, abortion under any circumstances is illegal, same-sex marriage and same-sex adoption remains forbidden. This is despite the equal protection of, and the prevention of the denial of, civil rights based on nationality, race, sex and religion inscribed in law.¹⁶⁷

Women and girls in El Salvador contend with high rates of violence, with a femicide rate of 1.6 per 100,000 women.¹⁶⁸ One source of this violence is gangs and crime, within which girls have been victims of rape and homicide.¹⁶⁹ Girls also grapple with insecurity within the home, where they can face sexual and intrafamilial violence.¹⁷⁰ Poorer women can be especially vulnerable to this violence due to their lack of resources.¹⁷¹ Moreover, physical punishment of children by caregivers can be present within familial relations, and was found to be more socially accepted than other forms of violence.¹⁷²

Historical Context

El Salvador is a relatively small country, with a population of 6.3 million.¹⁷³ According to the VII Population Census and IV Housing Census 2024, 45 per cent of households were headed by women, signifying a transition in family dynamics.

While El Salvador has a diverse population, the Salvadorean state identified that the majority of the population are *mestizaje*, which refers to people of white and Indigenous mixed-race.¹⁷⁴ There is also a small population of African descent in El Salvador, which according to the VII Population Census and VI Housing Census 2024, conducted by the Central Reserve Bank (BCR), officially registered 25,690 people of African descent (0.4 per cent of the population). It is important to mention that this sector began to be recognised by the Salvadoran State in the 2024 census, which was a significant change in providing official data on its existence. On the other hand, only 1.2 per cent of the Salvadoran population identified themselves as Indigenous, representing a total of 68,148 people. However, this represents an increase compared to the 2007 census, which showed only 0.2 per cent.¹⁷⁵

El Salvador has contended with high rates of violence and insecurity, with a homicide rate of 107 per 100,000 people in 2015.¹⁷⁶ It has been argued that the historical violent colonisation, 12 years of civil war which ended in 1992, a lack of employment opportunities for former combatants, access to weapons, lack of services to minorities, and a disregard for human rights contributed to a violent context in which crime is a means of making a living.¹⁷⁷¹⁷⁸ However, since the “state of exception” to combat the high levels of crime and violence, the homicide rates have fallen to 7.8 per 100,000 people in 2023.¹⁷⁹ These efforts have enjoyed large public support although rights-based organisations have highlighted concerns.¹⁸⁰

Girls’ and Women’s Resistance

In the face of gendered inequality and violence against women, women in El Salvador continue to be active and mobilise as part of powerful and visible feminist movements across LAC.¹⁸¹ Originating in Argentina, the *Ni Una Menos* collective (Not One Woman Less) has spread throughout the whole region, protesting the pervasiveness of femicide and the multitude of sexist aggressions that women face in the region.¹⁸² In El Salvador specifically, feminist movements are built on the values of sorority, sharing experiences of discrimination and injustice, hopes of imagining a more equal and harmonic society and a push towards democratic changes.¹⁸³

The Philippines

Girls come from two broad areas of the Philippines: they are either located in north-east on the Masbate Island Province in South-eastern part of Luzon Region or in the Northern Samar Province located in the Eastern Visayas Region. Across the areas, the population is mostly Catholic. In Masbate, girls are in a rural, coastal village and primary sources of income in the area are corn, rice, fish, coconut and livestock. The region where the province of Masbate is located is highly vulnerable to typhoons, floods, drought and susceptible to climate change hazards. Similarly in Northern Samar, the main income source is also agricultural. Main agricultural products include coconut/copra, rice, root crops, corn, abaca, fish and vegetables. Main livestock were cattle, swine, poultry and carabao. Many areas in Northern Samar province have been affected by decades of conflict between government forces and armed groups.

Girls’ and Women’s Rights in the Philippines

The proportion of female elected officials in the Philippines is 31 per cent as of 2022.¹⁸⁴

The State, "recognizes the role of women in nation building and shall ensure the fundamental equality before the law of women and men", as is indicated in the 1987 Philippine Constitution. The Magna Carta of Women of 2009 is a comprehensive women's human rights law - based on international law - that seeks to eliminate discrimination through the recognition, protection, fulfilment, and promotion of the rights of Filipino women.¹⁸⁵ It holds that "the state realizes the equality of men and women entails the abolition of the unequal structures and practices that perpetuate discrimination and inequality".

Various laws in the Philippines address gender-based violence and have been held for decades:

- The Anti-Sexual Harassment Act of 1995 - though applying to all persons - offers particular provisions on protection of women and children and includes the issue of sexual harassment committed in employment, education or training environment.
- The Anti-Rape Law of 1997 stipulates that sexual acts committed through force, threat, coercion or grave abuse of authority will be punished.
- Rape Victim Assistance and Protection Act of 1998 declares it is State policy to provide necessary assistance and protection for rape victims.
- The Anti-Violence Against Women and Their Children Act of 2004 recognizes the need to protect the family and its members particularly women and children, from violence and threats to their personal safety and security.

Laws in other areas of public life are also key indicators of women’s rights in the Philippines. In 1995, assistance for small-scale women entrepreneurs was legally guaranteed by Republic Act 7882, as it sought to provide all possible assistance to Filipino women in their pursuit of owning, operating and managing small business enterprises. The 1989 Republic Act 6725 prohibits employment

discrimination on the basis of sex, and the 2019 the Expanded Maternity Leave Law extends paid maternity leave to 105 days.

Historical Context

In the early twentieth century, women continuously lobbied at Senate hearings in pursuit of women's suffrage. Though a 1919 bill was approved, it was not enacted into law. Women's Suffrage was formally recognised in September 1936, born out of an attitudinal shift brought on by successive women's groups' advocacy. When then-President Quezon signed the Woman's Suffrage Plebiscite Bill, he declared that "...it is essential and even imperative that the right to vote be granted to Filipino women if they are not to be treated as mere slaves".¹⁸⁶

Various legislative measures in the late twentieth century have ensured women were represented in local and national politics.

The Philippines became independent from the United States in 1946, having previously struggled under Spanish colonialism from the 16th - 19th Centuries. It is in this time that Catholic religious norms became deeply embedded in Filipino culture. The pervasiveness of Catholic religious norms have informed the status of abortion rights in the Philippines. Having first been criminalised in an 1870 Penal Code.

Girls' and Women's Resistance

Within the Philippines there are a number of examples of girls' and women's resistance. One is the Gabriela Coalition, a non-profit movement umbrella that consists of a number of organisations including Gabriela, a National Alliance of Women, founded in 1984, The Gabriela Women's Party, a political party founded in 2000 that served to organise against the Marcos dictatorship, Gabriela Youth, founded in 2004, and other organisations that serve the needs for women workers, migrants, and indigenous women.¹⁸⁷

In the era of Duterte's presidency (2016 - 2022), female political leaders and journalists were persecuted, including through violent sexual imagery, and 66 women were victims of extrajudicial killings, many of whom were women human rights defenders.¹⁸⁸ Gabriela's political party and CSOs remain under heavy surveillance. Women's organisations in general continue to face long term reduced funding and limited local government cooperation.¹⁸⁹

As for youth-led activism, Youth Advocates for Climate Action Philippines raised awareness of climate change impacts and demanded accountability from national leaders, such as through a 2025 climate strike.¹⁹⁰ 2023 research by Plan International found that there is a wide pool of active youth and youth-focused organisations, and many more individual advocates across different regions exercising their right to political participation. While there are government-mandated provisions recognising the role of youth in shaping development outcomes and institutionalising their participation, open pathways to decision making spaces are not always a guarantee. Girls and young campaigners we spoke to focused either on, or a combination of, climate change, gender equality, and SRHR, and they told us about the barriers they face: particularly lack of financing and being underestimated or receiving backlash due to gender social norms in their community.¹⁹¹

Togo

Real Choices, Real Lives girls are from the Tem, Peulh and Kabye communities, respectively, and Islam is the dominant religion.

They live in rural areas that are heavily based on agriculture. The level of education is low, droughts are increasingly more common, and small conflicts arise in the area.

Girls' and Women's Rights in Togo

In 2022, Togo ranked 127 out of 144 countries on the SDG Gender Index.

2006 reforms to the Labour Code ensured a number of protections for women's employment: prohibited dismissal of pregnant workers; mandated equal remuneration for work of equal value; prohibited gender discrimination in employment; and alongside legislation protecting women from

sexual harassment in employment by providing civil remedies; it no longer broadly prohibits the dismissal of pregnant workers.¹⁹²

Under customary law in Togo, women did not have the right to own land, which were prevalent in the Persons and Family Code. Limitations in the Code prevented women from choosing where to live, from getting a job without their husband's permission, and from being named head of household in the same manner as men. The 2012 - 2014 reforms to the Persons and Family Code upturned these discriminatory measures, driven by decades of advocacy by women's civil society organizations who engaged a wide variety of stakeholders, including the government and the international community. Yet, as of 2014 (latest data on the indicators), after the reforms, only 29.4 percent of women participated in three major decisions in the household: namely, their own health care, major household purchases, and visiting family (World Development Indicators).¹⁹³

In 2022, Togo legislative reform across areas of social protection, family law, civil rights and criminal law can potentially bring about greater employment protections and rights claims for widowed and divorced women. In particular, widows could thereby inherit their husband's estate, and the 2018 Code foncier et domanial (Code on Land and Estates) grants equal land tenure rights to women and men.¹⁹⁴ Women held 18.9 per cent of seats in parliament in 2024¹⁹⁵, which is likely the outcome of the Electoral Law of 2013 amendments in which candidate lists were required to include equal numbers of men and women.¹⁹⁶ Legislative changes towards social protection, inheritance and criminal law have signalled progress towards women's rights. Protections against gender-based violence were also emboldened, following amendments of the penal code through the Gender Equality Law and revisions to the family code (equalizing rights to divorce and remarry).¹⁹⁷ In 2022, greater protections for students experiencing GBV in schools - through defining prevention procedures and victim support measures - also indicate strengthening of women's and girls' rights in Togo.¹⁹⁸ Yet, the level of implementation of such reforms, indicate that much progress is still yet to be made.¹⁹⁹

Historical Context

Togo became independent from the French Union on April 27, 1960, following 113 years of colonial administration by successive German, British, and French administrations.²⁰⁰ These regimes stood to restructure social and gender norms, which reoriented preexisting ideas for women to be custodians of the household towards being marginalised and restricted in their education and economic access.²⁰¹ In this period, women stood alongside nationalists during the struggle for independence (1946-1960) and as members of the National Women's League of Togo (l'Union nationale des femmes du Togo, or UNFT).²⁰² In 1963, Togo became a member of the Organization of African Unity (OAU, now the African Union) and two years later subsequently joined the renewed Joint African and Malagasy Organization, which provided for economic, political, and social cooperation among French-speaking African states.²⁰³

From 1967 to 2005 - the period of President Gnassingbé Eyadéma's rule - women's rights and political participation remained limited. Yet, in the 1990s, Togo began to embrace democratic reforms, which allowed for women's organizations to become more prominent. In 1995, the National Council of Women of Togo (CNFT) was established to promote women's rights and empowerment through advocacy, education, and mobilization.^{204,205}

Protests in the 1990s saw violent government responses, which led to Togo being cut from economic aid from the European Union between 1993 to 2008.²⁰⁶ Upon becoming president in 2005, President Faure Gnassingbé, sought to restore multilateralism and secure better development outcomes in Togo, including improvements in the status of women in general. These factors led women's rights to gain more traction on the political agenda in the 2010s.²⁰⁷

Girls' and Women's Resistance

There are various instances of how women's groups have pushed for greater rights and towards addressing overall economic inequality in Togo. Though women's formal participation in politics is low, local civil society organisations have long been instrumental in changing persistent discriminatory provisions in laws, and, with the support of the international community, have put pressure on the government to pass reforms for greater equal rights, such as in the amendment of Code of Persons and the Family in 2012 and 2014.²⁰⁸

89.9 per cent of women are engaged in vulnerable forms of employment - compared to 72 per cent for men.²⁰⁹ Working in the market is a common form of employment for Togolese women and it is these

market women who are largely responsible for financing the opposition to then-President Eyedema; they were said to have faced retaliation from the establishment where it is claimed their building have been burnt down.²¹⁰ The Let's Save Togo women's organisation held a sex strike in 2012 to persuade men to take a stand against President Gnassingbé.

Where women account for 50 per cent of agricultural jobs in some regions²¹¹, many women are using resilient or climate adapted agricultural approaches to gain a foot in male dominated spaces.²¹² Pushes for women's land rights are underway with the cross-country implementation of Planned Agricultural Zones (ZAAPs) to promote sustainable family farming, by facilitating access to land for those who don't usually have it.²¹³

Uganda

Girls in Uganda came from the Kamuli district, which is part of the Busoga Kingdom. All of the girls belong to the Basoga ethnic group.

Girls' and Women's Rights in Uganda

Uganda has a robust legislative framework for protecting the rights of girls and women, strengthened by several laws and policies introduced in recent years.²¹⁴ This includes promoting universal primary education, raising the sexual age of consent to 18, a ban on child marriage, protections for children from sexual and gender-based violence (SGBV) and female genital mutilation/cutting.²¹⁵²¹⁶²¹⁷ Furthermore, women's political representation has increased as a result of a national affirmative action policy. Yet, within the Basoga community in Uganda, where the *Real Choices, Real Lives* cohort live, there are a number of practices which hinder girls' accessing their rights. Men tend to be considered the head of the household and hold ultimate decision making power within the household, from finances to the size of the family.²¹⁸ Girls take on a large burden of unpaid domestic and care responsibilities, completing chores and raising younger children. Parents express a preference for having sons, and men eat first and are served more food.²¹⁹²²⁰

Girls face many barriers in accessing their education, they face dangers travelling to and from school; harassment, abuse and GBV in school; parent's son bias in paying school fees; a lack of provision for pregnant girls and mothers; and a lack of sanitary facilities.²²¹²²² Additionally, girls have limited access to land or resources, unequal inheritance, and limited employment opportunities.

Social norms see adolescent girls transitioning to adulthood at puberty that places pressure on girls to marry and move away.²²³ Girls face gendered practices such as tight restrictions on their mobility, sexual abuse, step-parent abuse in polygamous households, forced and early marriage.²²⁴²²⁵²²⁶ There also exists a near total ban on abortion, lack of access to contraceptives and stigma around their use, a lack of sexuality education, and high rates of maternal mortality, teenage pregnancy, and HIV among teenage girls.²²⁷²²⁸²²⁹²³⁰²³¹²³²

Historical Context

In precolonial Uganda, there were many examples of women leaders, as queens and as chiefs, and women were frequently given economic and social responsibilities.²³³ However, a combination of patrilineal traditions, the legacies of British colonialism, and the influence of both Christianity and Islam on gender norms mean that women frequently struggle to access their rights today. Women's resistance has been present throughout Uganda's history, from activism during the colonial era through to the present day.²³⁴²³⁵²³⁶

Girls' and Women's Resistance

Uganda has one of the most developed and powerful women's movements on the African continent.²³⁷ The movement has had particular success in advancing girls' and women's access to education and in efforts to secure women's rights to own and inherit land and resources.²³⁸²³⁹²⁴⁰

Vietnam

The *Real Choices, Real Lives* cohort girls in Vietnam live in the Quảng Ngãi (South Central Coast) province.¹¹ The girls are all from the ethnic majority group, the Kinh people (ethnic Vietnamese)¹², and live in two rural inland communes each roughly an hour away from the province's largest city, Quảng Ngãi City. Nearly all of the girls in the Vietnam cohort come from **farming families**.

Girls' and Women's Rights in Vietnam

In 2024, Vietnam ranked 49 out of 139 countries worldwide on the Sustainable Development Goals (SDG) Gender Index rating and has seen positive progress in improving its Gender Index score since 2015.²⁴¹ The country ranks second in Asia for gender equality, after Singapore.²⁴² Vietnam ratified the Convention on the Elimination of Discrimination against Women (CEDAW) in 1982,²⁴³ and the country's Constitution guarantees "equal gender rights and opportunities."²⁴⁴ Despite these promising indicators, **gender inequalities persist in Vietnam**. Although Vietnamese law, in theory, enables women equal access to land ownership and inheritance, customary practice and male preference often serve to **restrict women's property claims**.²⁴⁵ In patrilineal agricultural households in Vietnam, ancestor worship has been practiced for centuries, and family lands have deep significance as the site of ancestral spirits.²⁴⁶ Among the ethnic majority Kinh, kinship is patrilineal and - because sons continue the family line - they also carry responsibility for the family altar where ancestors are worshipped and caring for ancestral graves.²⁴⁷ While some families no longer adhere strictly to these traditions, and recognise the role of daughters in worshipping ancestors, the practice of ancestor worship remains an important consideration in whether a son or daughter would be given access to family lands.²⁴⁸ Furthermore, laws regulating succession exclude children of non-registered unions, making women and children of these unions vulnerable.²⁴⁹

Women have a high **labour force participation** rate in Vietnam, at 73.8 per cent, and men in Vietnam are more likely than women to be engaged in informal employment.²⁵⁰ However, women in Vietnam are mainly engaged in low-paid, poor quality jobs and paid less than men for work of equal value.²⁵¹ Women are overrepresented in the category of contributing family workers (primarily in agriculture) and in domestic labour, which make them extremely vulnerable to exploitation.²⁵² Furthermore, only 17 per cent of large businesses are run by women.²⁵³

Women's disproportionate responsibility for **unpaid care work** is a barrier to their careers, and 93 per cent of women felt that their domestic responsibilities prevented women from achieving leadership positions in their industries.²⁵⁴ On average, women in Vietnam spend 275 minutes per day on unpaid care work, while men spend only 170 minutes per day.²⁵⁵ Despite heavy care work responsibilities, women in Vietnam have increasingly taken on roles in garment factories, many of which have relocated to rural areas encouraged by government incentives. This has given women greater opportunity to earn an income independently from their husbands.²⁵⁶

This improved **economic independence** has supported women to challenge gender roles in the home, particularly on the issue of the distribution of unpaid care work.²⁵⁷ Additionally, compared to many of the other focal countries, women in Vietnam has historically had a greater say in financial and other **decision making in the home**, which has been further supported by increases in their earnings.²⁵⁸ Significant progress has been made in advancing women's **political participation** in Vietnam, with women holding 30.26 per cent of seats in the National Assembly,²⁵⁹ and representing 33 per cent of members of the Vietnam Communist Party.²⁶⁰ However, women are less likely to vote in elections than men - particularly in village elections - and both women and men report that they prefer to vote for male candidates, especially for senior executive positions.²⁶¹

Efforts have been made to improve **SRHR** education and service provision in Vietnam, including for adolescents.²⁶² The majority of women in Vietnam report being able to make their own informed decisions about sexual intercourse and the use of contraception, however autonomy is lower among ethnic minorities and those with no education.²⁶³ Contraceptive use is high among married women,

¹¹ In June 2025, Vietnam's National Assembly adopted a resolution to reduce the number of provincial units from 63 to 34. While Quảng Ngãi has been expanded to incorporate other provinces, it has retained its original province name and administrative centre. (<https://www.vietnam-briefing.com/news/vietnams-government-introduces-official-plan-for-provincial-mergers.html/>)

¹² Kinh are the ethnic majority of both the Quảng Ngãi province and Vietnam at large.

but 40.7 per cent of unmarried sexually active women reported have an unmet need for family planning, and only a quarter of adolescents reported using contraceptives.²⁶⁴ A notable barrier to adolescents' SRHR information is that girls are not educated about these issues by their family members due to social norms, and rural schools often lack adequate training to deliver SRH education.²⁶⁵

A quarter of ever-partnered girls and women in Vietnam have experienced **intimate partner violence** (IPV),²⁶⁶ and nearly two-third of women have experienced some form of either physical, sexual, emotional or economic violence.²⁶⁷ Concerningly, 51.8 per cent of women felt that men were sometimes justified in beating their wife, and these views were even more widely held by women in rural areas and among those with no or low formal education.²⁶⁸

Vietnam has a very high primary school completion rate, at 98 per cent, with girls having a slightly higher completion rate than boys.²⁶⁹ The gender gap widens in secondary school, with 65 per cent of **girls completing upper secondary** compared with 51 per cent of boys.²⁷⁰

Historical Context

Vietnamese women have historically been involved in resistance and participated in wars of independence against French and USA colonial rule.²⁷¹²⁷² Women not only engaged in combat, but also acted as nurses, repairing roads, and as cooks.²⁷³ While women have been celebrated for their role in wars of independence, traditionally Vietnamese women were expected to follow strict patriarchal Vietnamese Confucian values that relegate women to the domestic sphere and must obey their father, husband and eldest son.²⁷⁴

Girls' and Women's Resistance

As mentioned, Vietnamese women were active in resisting colonial rule, yet their resistance extends beyond the battlefield. During the Vietnam war, women in urban South Vietnam established the Vietnamese Women's Movement for the Right to Live, campaigning for peace and women's liberation.²⁷⁵ Vietnamese women working in garment factories take on leadership positions in organising and strikes, especially women who were older and experienced workers would inform women who had been newly hired about protests and what basic rights they are entitled to.²⁷⁶

脚注

-
- ¹ Berents, Helen (2019) "Apprehending the 'Telegenic Dead': Considering images of dead children in global politics," *International Political Sociology*, 13, 145-160, p.148.
- ² Berents, Helen (2020) "Politics, Policy-Making and the Presence of Images of Suffering Children," *International Affairs*, 96:3, 593-608, p.595.
- ³ Lee-Koo, Katrina (2020) "Decolonising Childhood in International Relations," in J. Marshall Beier (ed.) *Discovering Childhood in International Relations*, New York: Palgrave Macmillan, 21-40.
- ⁴ Wells, Karen (2007) "Narratives of Liberation and Narratives of Innocent Suffering: The rhetorical uses of images of Iraqi children in the British press," *Visual Communication*, 6:1, 55-71. p.59.
- ⁵ Manzo, Kate (2008) "Imaging Humanitarianism: NGO identity and the iconography of childhood," *Antipode*, 40:4, 632-657. p.649.
- ⁶ Basham, Victoria M. (2020) "From Hitler's Youth to the British Child Soldier: How the martial regulation of children normalises and legitimises war," in J. Marshall Beier (ed.) *Discovering Childhood in International Relations*, New York: Palgrave Macmillan, 135-154.
- ⁷ Khoja-Moolji, Shenila (2018) *Forging the Ideal Girl: The Production of Desirable Subjects in Muslim South Asia*, Oakland: University of California Press. p.3.
- ⁸ Martuscelli, Patricia Nabuco and Leonardo Bandarra (2020) "Triply Silenced Agents: cognitive structures and girl soldiers in Colombia," *Critical Studies on Security*, 8:3, 223-239. p.224.
- ⁹ Berents, Helen and Caitlin Mollica (2022) "Reciprocal Institutional Visibility: Youth, peace and security and 'inclusive' agendas at the United Nations," *Cooperation and Conflict*, 57:1, 65-83. p.69.
- ¹⁰ Martuscelli, Patricia Nabuco, and Rafael Duarte Villa (2018) "Child Soldiers as Peace-Builders in Colombian Peace Talks Between the Government and the FARC-EP." *Conflict, Security & Development* 18 (5): 387-408.
- ¹¹ Hoban, Iuliiia (2020) "Objects and Subjects: Strategic use of childhood in the debate over the Canadian contribution to MINUSMA," *Childhood*, 27:3, 294-309.
- ¹² Pruitt, Lesley (2020) "Revisiting 'Womenandchildren' in Peace and Security: What about the girls caught in between?" in J. Marshall Beier (ed.) *Discovering Childhood in International Relations*, New York: Palgrave Macmillan, 199-218. p.207.
- ¹³ Watson, Alison (2006) "Children and international relations: a new site of knowledge?", *Review of International Studies*, vol. 32, no. 2, pp. 237-250 p.247.
- ¹⁴ Spitka, Timea (2018) "Children on the Front Lines: Responsibility to Protect in the Israeli/Palestinian Conflict," *Global Responsibility to Protect*, 10, 189-216. P.199
- ¹⁵ Watson, Alison (2006)
- ¹⁶ Olesen, Thomas (2016) "Malala and the Politics of Global Iconicity," *The British Journal of Sociology*, 67:2, 307-327.
- ¹⁷ Thomas, Elsa Ashish and Rashid Narain Shukul (2015) "Framing of Malala Yousafzai: A comparative analysis of news coverage in Western and Pakistani mainstream English print and alternative media," *Media Asia*, 42:3-4, 225-241.
- ¹⁸ Walters, Rosie (2016) "'Shot Pakistani Girl': The limitations of girls education discourses in UK newspaper coverage of Malala Yousafzai," *British Journal of Politics and International Relations*, 18:3, 650-670.
- ¹⁹ Khoja-Moolji, Shenila (2017) "The Making of Humans and their Others in and through Transnational Human Rights Advocacy: Exploring the cases of Mukhtar Mai and Malala Yousafzai," *Signs*, 42:2, 377-402.
- ²⁰ Walters, Rosie (2016), pp. 655 & 664.
- ²¹ Bent, Emily (2016) 'Making It Up: Intergenerational activism and the ethics of empowering girls', *Girlhood Studies*, 9:3. 105-121. p.107.
- ²² Projansky, Sarah (2014) *Spectacular Girls: Media Fascination and Celebrity Culture*, New York and London: New York University Press. p.1.
- ²³ Locke, Jill (2023) "Beyond Heroes and Hostility: Greta Thunberg, Vanessa Nakate, and the Transnational Politics of Girl Power," *Nora - Nordic Journal of Feminist and Gender Research*, 31:2, 117-127, pp.120-1.
- ²⁴ Taft, Jessica (2020) "Hopeful, Harmless and Heroic: Figuring the girl activist as global saviour," *Girlhood Studies*, 13:2, 1-17. p.3.
- ²⁵ Lousley, Cheryl (2014) "Band Aid Reconsidered: Sentimental cultures and populist humanitarianism," in David Lewis, Dennis Rodgers and Michael Woolcock (eds) *Popular Representations of Development*, Abingdon and New York: Routledge, 174-192. p.176.
- ²⁶ Dogra, Nandita (2017) "'Reading NGOs Visually' - Implications of visual images for NGO management," *Journal of International Development*, 19, 161-171. p.162.
- ²⁷ Fehrenbach, Heide and Davide Rodogno (2015) "'A Horrific Photo of a Drowned Syrian Child': Humanitarian photography and NGO media strategies in historical perspective," *International Review of the Red Cross*, 97:900, 1121-1155. p.1143

- ²⁸ Johnson, Heather L. (2011) "Click to Donate: Visual images, constructing victims and imagining the female refugee," *Third World Quarterly*, 32:6, 1015-1037, p.1016.
- ²⁹ Manzo, Kate (2008) "Imaging Humanitarianism: NGO identity and the iconography of childhood," *Antipode*, 40:4, 632-657. p.635-6.
- ³⁰ Wilson, Kalpana (2010) "Picturing Gender and Poverty: From 'victimhood' to 'agency'?" in Sylvia Chant (ed.) *The International Handbook of Gender and Poverty*, Cheltenham: Edward Elgar, 301-306. p.306.
- ³¹ Koffman, Ofra and Gill, Rosalind (2013) "'The Revolution Will Be Led by a 12-Year-Old Girl': Girl power and global biopolitics," *Feminist Review*, 105, 83-102, p.86.
- ³² Shain, Farzana (2013) "The Girl Effect': Exploring narratives of gendered impacts and opportunities in neoliberal development', *Sociological Research Online*, 18:2
- ³³ Chouliraki, Lilie (2010) "Post-Humanitarianism: Humanitarian communication beyond a politics of pity," *International Journal of Cultural Studies*, 13:2, 107-126. p.114.
- ³⁴ Cobbett, Mary (2014) 'Beyond 'victims' and 'heroines': Constructing 'girlhood' in international development', *Progress in Development studies*, 14:4, 309-320.
- ³⁵ Grosser, Kate and Nikki van der Gaag (2013) "Can Girls Save the World?" in Wallace, Tina, Fenella Porter and Mark Ralph-Bowman (eds) *Aid, NGOs and the Realities of Women's Lives: A Perfect Storm*, Rugby: Practical Action Publishing, 73-87. p.78.
- ³⁶ Calkin, Sydney (2015) 'Post-Feminist Spectatorship and the Girl Effect: 'Go ahead, really imagine her"', *Third World Quarterly*, 36: 4, 654-669. p.664.
- ³⁷ Keya Khandaker and Lata Narayanaswamy (2020) "The Unbearable Whiteness of International Development," Ghent Centre for Global Studies. 以下にて入手可能: <https://www.ghentcentreforglobalstudies.be/the-unbearable-whiteness-of-international-development/2/>
- ³⁸ Switzer, Heather, Bent, Emily, and Endsley, Crystal (2016). Precarious Politics and Girl Effects: Exploring the Limits of the Girl Gone Global. *Feminist Formations*, 28(1), 33-59.
- ³⁹ Chant, Sylvia and Sweetman, Caroline (2012) 'Fixing Women or Fixing the World? 'Smart economics', efficiency approaches, and gender equality in development', *Gender and Development*, 20:3, 517-529. p.521.
- ⁴⁰ Kabeer, Naila (1999) "Resources, Agency, Achievements: Reflections on the measurement of women's empowerment," *Development and Change*, 30, 435-464. P.435
- ⁴¹ Chant, Sylvia (2016) "Galvanising Girls for Development? Critiquing the shift from 'smart' to 'smarter economics'," *Progress in Development Studies*, 16:4, 314-328. P.315-6.
- ⁴² Chant, Sylvia (2016) "Women, Girls and World Poverty: Empowerment, equality or essentialism?" *International Development Planning Review*, 38:1, 1-24. P.5
- ⁴³ Calkin, Sydney (2018) *Human Capital in Gender and Development*, London: Routledge. P.3
- ⁴⁴ The Girl Effect (2008) "The Girl Effect". 以下にて入手可能: https://www.youtube.com/watch?v=WlvmE4_KMNw&t=2s [最終アクセス日: 2025年10月8日].
- ⁴⁵ Bent, Emily (2013). "A Different Girl Effect: Producing Political Girlhoods in the 'Invest in Girls' Climate", in Nenga, S. K. & Taft, J. K. (eds), *Youth Engagement: The Civil-Political Lives of Children and Youth*, Emerald Group: Bingley, pp. 3 - 20
- ⁴⁶ Calkin, Sydney. (2015). p.665
- ⁴⁷ Hickel, Jason (2014) 'The 'girl effect': Liberalism, empowerment and the contradictions of development', *Third World Quarterly*, 35: 8, 1355-1373. p.1364
- ⁴⁸ Keya Khandaker and Lata Narayanaswamy (2020)
- ⁴⁹ Davies, Imogen and Caroline Sweetman (2018) "Introduction: Development and Young Feminisms," *Gender and Development*, 26:3, 387-401. p.391.
- ⁵⁰ Hayhurst, Lyndsay M. C., MacNeill, Margaret, Kidd, Bruce and Knoppers, Annelies (2014) 'Gender Relations, Gender-Based Violence and Sport for Development and Peace: Questions, concerns and cautions emerging from Uganda', *Women's Studies International Forum*, 47 (A), 157-167.
- ⁵¹ Bent, Emily (2013) "The Boundaries of Girls' Political Participation: A critical exploration of girls' experiences as delegates to the United Nations Commission on the Status of Women (CSW)," *Global Studies of Childhood*, 3:2, 173-182.
- ⁵² Clay, Kevin L. and David C. Turner III (2021) "'Maybe You Should Try It This Way Instead': Youth activism amid managerialist subterfuge," *American Educational Research Journal*, 58:2, 386-419. p.388
- ⁵³ Walters, Rosie (2025) *Girls, Power and International Development: Agency and Activism in the Global North and South*, Bristol University Press.
- ⁵⁴ Walters, Rosie (2018) "Reading Girls' Participation in Girl Up as Feminist: Club members' activism in the UK, USA and Malawi," *Gender and Development*, 26:3, 477-493.
- ⁵⁵ Taft, Jessica K. (2017) "Teenage Girls' Narratives of Becoming Activists," *Contemporary Social Science*, 12:1-2, 27-39. pp.36-7.
- ⁵⁶ Taft, Jessica K. (2011) *Rebel Girls: Youth Activism and Social Change across the Americas*, New York and London: New York University Press. pp.172-3.
- ⁵⁷ Walters, Rosie (2025), chapter 8.
- ⁵⁸ Taft, Jessica K. (2014) "The Political Lives of Girls," *Sociology Compass*, 8:3, 259-267. p.263.
- ⁵⁹ Bashi, Gopika, Lucia Martelotte, Boikanyo Modungwa and Maria Eugenia Olmos (2018) "Young Feminists' Creative Strategies to Challenge the Status Quo: A view from FRIDA," *Gender and Development*, 26:3, 439-457. p.442.
- ⁶⁰ de Finney, Sandra (2014) "Under the Shadow of Empire: Indigenous Girls' Presencing as Decolonizing Force." *Girlhood Studies: An Interdisciplinary Journal* 7 (1): 8-26. p.11.

- ⁶¹ Kelly, Lauren Leigh (2018) "A Snapchat Story: How Black Girls Develop Strategies for Critical Resistance in School." *Learning, Media and Technology* 43 (4): 374-389
- ⁶² Silva, Carolina (2020) "'Because There Are Young Women Behind Me': Learning from the testimonios of young undocumented women advocates," *Girlhood Studies*, 13:2, 69-85.
- ⁶³ Walters, Rosie (2025).
- ⁶⁴ Lee-Koo, Katrina and Lesley Pruitt (2020) "Building a Theory of Young Women's Leadership," in Katrina Lee-Koo and Lesley Pruitt (eds) *Young Women and Leadership*, London: Routledge, 7-25.
- ⁶⁵ Plan International UK (2019) "Girls Challenging the Gender Rules: Benin, Togo and Uganda".以下にて入手可能:
<https://plan-international.org/uploads/2022/08/Girls-Challenging-the-Gender-Rules-SSA-Full-Report.pdf> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ⁶⁶ Loveday, Lilli, Jenny Rivett and Rosie Walters (2023) "Understanding Girls' Everyday Acts of Resistance: Evidence from a longitudinal study in nine countries," *International Feminist Journal of Politics*, 25:3, 244-265.
- ⁶⁷ Walters, Rosie, Jenny Rivett and Lilli Loveday (2024) "'Girls Can't Do This Alone': Understanding girls' agency during adolescence in nine countries," accepted for publication in Mazzarella, Sharon (ed.) *The Routledge Companion to Girl Studies*, Routledge.
- ⁶⁸ de Finney, Sandra (2014)
- ⁶⁹ Duncan-Andrade, Jeffrey M. (2009) "Note to Educators: Hope required when growing roses in concrete," *Harvard Educational Review*, 79:2, 181-194.
- ⁷⁰ Lake, Robert and Tricia Kress (2017) "Mamma Don't Put That Blue Guitar in a Museum: Greene and Freire's duet of radical hope in hopeless times," *Review of Education, Pedagogy and Cultural Studies*, 39:1, 60-75. p.64.
- ⁷¹ Madhok, Sumi and Shirin M. Rai (2012) "Agency, Injury, and Transgressive Politics in Neoliberal Times," *Signs*, 37:3, 645-669. p.646.
- ⁷² Vanner, Catherine (2019) "Toward a Definition of Transnational Girlhood," *Girlhood Studies*, 12:2, 115-132. P.126
- ⁷³ Caron, Cynthia M. and Shelby A. Margolin (2015) "Rescuing Girls, Investing in Girls: A critique of development fantasies," *Journal of International Development*, 27, 881-897. p.895.
- ⁷⁴ Khoja-Moolji, Shenila (2016) "Doing the 'Work of Hearing': Girls' voices in transnational educational development campaigns," *Compare: A Journal of Comparative and International Education*, 46:5, 745-763.
- ⁷⁵ Khoja-Moolji, Shenila (2015) "Reading Malala: (De)(Re)Territorialisation of Muslim Collectivities," *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East*, 35:3, 539-556.
- ⁷⁶ Loveday, Lilli, Jenny Rivett and Rosie Walters (2023) "Understanding Girls' Everyday Acts of Resistance: Evidence from a longitudinal study in nine countries," *International Feminist Journal of Politics*, 25:2, 244-265.
- ⁷⁷ Walters, Rosie (2023) "Reading Focus Group Data against the Grain," *International Journal of Qualitative Methods*, 22
- ⁷⁸ Harris, A. and Shields Dobson, A. (2015) "Theorising Agency in Post-Girlpower Times", *Continuum: Journal of Media and Cultural Studies*, 29:2, 145-156. p.147.
- ⁷⁹ Lee-Koo, Katrina (2020) "Decolonising Childhood in International Relations," in J. Marshall Beier (ed.) *Discovering Childhood in International Relations*, New York: Palgrave Macmillan, 21-40, pp.31-32.
- ⁸⁰ Rogers, Tracy (2024) "'Give Girls a Chance to Participate in Developing the Country': Cambodian schoolgirls (re)negotiate the status of girls', in Heather Switzer, Karishma Desai and Emily Bent (eds) *Girls in Global Development: Figurations of Gendered Power*, Berghahn Books, 117-134. p.120.
- ⁸¹ Kabeer, Naila (1999) "Resources, Agency, Achievements: Reflections on the measurement of women's empowerment," *Development and Change*, 30, 435-464. p.438.
- ⁸² Parpart, Jane (2020) "Rethinking Silence, Gender and Power in Insecure Sites: Implications for feminist security studies in a postcolonial world," *Review of International Studies*, 46:3, 315-324. p.317.
- ⁸³ Parpart, Jane (2010) "Choosing Silence: Rethinking voice, agency and women's empowerment," in Roisin Ryan-Flood and Rosalind Gill (eds) *Secrecy and Silence in the Research Process: Feminist Reflections*, Routledge, 15-29. Pp.19-20.
- ⁸⁴ Switzer, Heather (2018) *When the Light is Fire: Maasai Schoolgirls in Contemporary Kenya*, University of Illinois Press.
- ⁸⁵ Kabeer, Naila (2005) "Gender Equality and Women's Empowerment: A critical analysis of the third millennium development goal 1," *Gender and Development*, 13:1, 13-24. p13-14.
- ⁸⁶ Ibid, p.13-14.
- ⁸⁷ Saha, Pushpita, Saskia Van Veen, Imogen Davies, Khalid Hossain, Ronald van Moorten, and Lien van Mellaert (2018) "Paid Work: The magic solution for young women to achieve empowerment? Evidence from the Empower Youth to Work project in Bangladesh," *Gender and Development*, 26:3, 551-568. p.554.
- ⁸⁸ Kabeer (2005) p.15.
- ⁸⁹ Rossatto, Csar Augusto (2004) *Engaging Paulo Freire's Pedagogy of Possibility*, Rowman and Littlefield. p.12.
- ⁹⁰ Chinkondenji, Pempho (2022) "Schoolgirl Pregnancy, Dropout or Pushout?: An Ubuntu-centric re-construction of the education for student mothers in Malawi," *Gender and Education*, 34:6, 738-753. p.740.
- ⁹¹ Cornell, Drucilla and Karin van Marle (2015) "Ubuntu Feminism: Tentative reflections," *Verbum et Ecclesia*, 36:2, a1444.
- ⁹² Taabu, Hellen (2024) "*Ubuntu*: Social justice education, governance and women rights in pre-colonial Africa," in Njoki Nathani Wane (ed.) *Education, Colonial Sickness: A Decolonial African Indigenous Project*, Palgrave Macmillan, 43-58. p.48.
- ⁹³ Tamale, Sylvia (2020) *Decolonisation and Afro-Feminism*, Daraja Press. p.144.
- ⁹⁴ Plan International (forthcoming) 'Girls Everyday Politics in Uganda'

- ⁹⁵ Plan International (2024) “Out of Time: The Gendered Care Divide and its Impact on Girls”. 以下にて入手可能: https://plan-international.org/uploads/2024/10/Out-of-Time_RCRL-Summary-Report_final.pdf [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ⁹⁶ Loveday et al. (2023).
- ⁹⁷ Plan International (2025) “We Shouldn’t Have to Walk with Fear: How Gender Norms Shape Girls’ Perceptions of Protection, Risk and Responsibility”. 以下にて入手可能: https://plan-international.org/uploads/2025/07/RCRL_WeShouldntHavetoWalkwithFear-English_final-compressed.pdf [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ⁹⁸ Sippola, Lorrie K. (1999) “Getting to Know the ‘Other’: The characteristics and developmental significance of other-sex relationships in adolescence.” *Journal of Youth and Adolescence*, 28:4, 407-418.
- ⁹⁹ Mehta, Clare M. and JoNell Strough (2009) “Sex Segregation in Friendships and Normative Contexts across the Life Span.” *Developmental Review*, 29:3, 201-220.
- ¹⁰⁰ Bahrami, Nasim, Masoumeh Sibmar, William M. Bukowski, AbouAli Vedadhir and Bianca Panarello (2018) “Factors that Promote and Impede Other-Sex Friendships: A qualitative study of Iranian adolescent girls,” *International Journal of Adolescent Medicine and Health*, 30:4, 20160067.
- ¹⁰¹ Stavropoulou, Maria (2019) *Gender norms, health and wellbeing: a topic guide*, ALIGN, London UK.
- ¹⁰² Harris, Anita (2004), *Future Girl: Young Women in the Twenty-First Century*, Routledge: London & New York
- ¹⁰³ Hayhurst, L. M. C. (2013) ‘Girls as the ‘New’ Agents of Social Change? Exploring the ‘Girl Effect’ through sport, gender and development programs in Uganda’, *Sociological Research Online*, 18:2. 以下にて入手可能: <http://www.socresonline.org.uk/18/2/8.html> [最終アクセス日: 2025年10月23日]。
- ¹⁰⁴ Loveday et al. 2023, pp. 257-259.
- ¹⁰⁵ Plan International (2024)
- ¹⁰⁶ Rial, Carmen (2024) Women’s football in mid-twentieth century Brazil and France: three team managers from prohibition to profit, *Soccer and Society*, 26(14). 以下にて入手可能: https://www.researchgate.net/publication/387468435_Women%27s_football_in_mid-twentieth_century_Brazil_and_France_three_team_managers_from_prohibition_to_profit [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁰⁷ Ibid.
- ¹⁰⁸ World Justice Project (2015) *In Brazil, Female Warriors Fight for a Level Playing Field*. 以下にて入手可能: <https://worldjusticeproject.org/photo-essays/brazil-female-warriors-fight-level-playing-field> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁰⁹ Knijnik, Jorge (2015) Femininities and masculinities in Brazilian women’s football: Resistance and compliance, *Journal of International Women’s Studies*, 16(3). 以下にて入手可能: https://www.researchgate.net/publication/282795581_Femininities_and_masculinities_in_Brazilian_women's_football_Resistance_and_compliance [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹¹⁰ BBC (2019) “Women’s World Cup: Record Breaking Numbers”. 以下にて入手可能: <https://www.bbc.co.uk/news/world-48882465> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹¹¹ Muller, Miriam and Accrombessy, Felicien (2023) Different sex - same opportunities? Not really: a close look at the extent of gender inequalities in Benin, *World Bank Blogs*. 以下にて入手可能: <https://blogs.worldbank.org/en/african/different-sex-same-opportunities-not-really-close-look-extent-gender-inequalities-benin> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹¹² Ibid.
- ¹¹³ Institut National de la Statistique et de l’analyse economique (2015) *Enquete modulaire integree sur les conditions de vie des menages 2eme Edition (EMICoV-2015): Rapport D’Analyse du Volet Emploi du Temps*, Republique du Benin Ministere du Plan et du Developpement.
- ¹¹⁴ Ibid.
- ¹¹⁵ Padanou, Elie A. et al (2023) Effects of unpaid caring activities and social norms on women’s employment in mangrove areas of Ramsar site 1017 in Benin (West Africa), *Social Sciences and Humanities Open*, 7:1.
- ¹¹⁶ Plan International (2024)
- ¹¹⁷ Chan, Harriette (2018) Queer Mythology in the Philippines, *Making Queer History*. 以下にて入手可能: <https://www.makingqueerhistory.com/articles/2018/12/19/queer-mythology-in-the-philippines> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹¹⁸ Pagulayan, Cheng (2022) How the queer history of the Philippines inspires our struggles today, *Oxfam Views & Voices*. 以下にて入手可能: <https://views-voices.oxfam.org.uk/2022/06/how-the-queer-history-of-the-philippines-inspires-our-struggle-today/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹¹⁹ Ceperiano, Arjohn et al. (2016) “‘Girl, Bi, Bakla, Tomboy’: The Intersectionality of Sexuality, Gender, and Class in Urban Poor Contexts,” *Philippine Journal of Psychology*, 49(2), 5-34.
- ¹²⁰ Outright International (n.d.) Philippines. 以下にて入手可能: <https://outrightinternational.org/our-work/asia/philippines> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹²¹ ILGA World Database (n.d.) LGBTI Rights in the Philippines. 以下にて入手可能: <https://database.ilga.org/philippines-lgbti> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹²² Ibid.
- ¹²³ ProGay Philippines (2012) A REPORT ON VIOLATIONS OF HUMAN RIGHTS BASED ON SEXUAL ORIENTATION AND GENDER IDENTITY IN THE PHILIPPINES, Submission to the Human Rights Council for Universal Periodic Review 13th Session. 以下にて入手可能: https://www.ohchr.org/sites/default/files/lib-docs/HRBodies/UPR/Documents/session13/PH/JS17_UPR_PHL_S13_2012_JointSubmission17_E.pdf [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹²⁴ Wing, Susanna (2023) "Women seeking justice: claims-making in lower courts in Benin." *The Journal of Modern African Studies*, 61:4, 569-582.

¹²⁵ World Bank (2023) For women and girls in Benin, multi-faceted gender reforms offer new opportunities. 以下にて入手可能: <https://www.worldbank.org/en/news/feature/2023/03/01/for-women-and-girls-in-benin-multi-faceted-gender-reforms-offer-new-opportunities> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹²⁶ Plan International (2022) The State of Girls' Rights in Benin. 以下にて入手可能: https://info.planinternational.be/hubfs/The%20States%20of%20Girls%20Rights%20in%20Benin_March%202022.pdf?hslang=nl-be [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹²⁷ Ibid.

¹²⁸ Ibid.

¹²⁹ Muller, Miriam and Accrombessy, Felicien (2023) Different sex - same opportunities? Not really: a close look at the extent of gender inequalities in Benin, *World Bank Blogs*. 以下にて入手可能: <https://blogs.worldbank.org/en/africacan/different-sex-same-opportunities-not-really-close-look-extent-gender-inequalities-benin> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹³⁰ Reuther, Jessica (2019). Women in Benin. *Oxford Research Encyclopedia of African History*. Oxford University Press.

¹³¹ UN Women Africa (2018) "We are liberated": Women-led agricultural Savings and Loans Groups boost empowerment in Benin. 以下にて入手可能: <https://africa.unwomen.org/en/news-and-events/stories/2018/10/we-are-liberated-benin> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹³² Cuso International (2025) From Tenants to Owners, Women in Benin Are Securing Their Rights and Future. 以下にて入手可能: <https://cusointernational.org/stories/from-tenants-to-owners-women-in-benin-are-securing-their-rights-and-future/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹³³ Washington Brazil Office (2024) CEDAW and Women's Rights: So Far, So Close. 以下にて入手可能: <https://www.braziloffice.org/en/articles/cedaw-and-womens-rights-so-far-so-close> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹³⁴ Gonçalves, Nathalia (2022) Feminism and Women's Political Rights in Brazil. 以下にて入手可能: <https://criticallegalthinking.com/2022/03/24/feminism-and-womens-political-rights-in-brazil/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹³⁵ Conectas Direitos Humanos (2023) Little Progress for Women in Politics in Brazil. Report to the Third Review of the Federative Republic of Brazil by the UN Human Rights Committee - 138th session. 以下にて入手可能: <https://www.conectas.org/wp-content/uploads/2023/07/Report-on-Gender-policies-and-womens-rights-in-Brazil.docx-1.pdf> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹³⁶ Ibid.

¹³⁷ Ibid.

¹³⁸ Ibid.

¹³⁹ Maruci, Hannah (2018) Women's struggle to vote in Brazil: same fight, different strategies. Oxford Human Rights Hub. 以下にて入手可能: <https://ohrh.law.ox.ac.uk/womens-struggle-to-vote-in-brazil-same-fight-different-strategies/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹⁴⁰ Moreira, Maria Eduarda (2024) In Brazil, #GirlsDecide their future. Assembly, *Malala Fund*. 以下にて入手可能: <https://assembly.malala.org/stories/in-brazil-girls-decide-their-future>. [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹⁴¹ Martinez, Marina (2022) Getting in the room: The young women at the forefront of the battle for democracy and environmental justice in Brazil. *Unbias the News!* 以下にて入手可能: <https://unbias.thenews.org/young-brazilian-women-mobilize-for-environmental-social-justice-democracy/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹⁴² People's Palace Projects (n.d.) Feminist Activism among Youth in Brazil. 以下にて入手可能: <https://peoplespalaceprojects.org.uk/en/projects/feminist-activism-among-youth-in-brazil/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹⁴³ Stankovits, Elizabeth (2020) 7 Things to Know about Women's Rights in Cambodia, *The Borgen Project*. 以下にて入手可能: <https://borgenproject.org/7-facts-womens-rights-in-cambodia/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹⁴⁴ Vicheika, Kann (2023) Reflection: 30 years of women in Cambodian politics, *Heinrich Boll Stiftung*. 以下にて入手可能: <https://www.boell.de/en/2023/12/20/reflection-30-years-women-cambodian-politics> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹⁴⁵ UNFPA (2017) National Strategy for Reproductive and Sexual Health in Cambodia, 2017-2020, *UNFPA in Cambodia, National Maternal and Child Health Centre*. 以下にて入手可能: <https://cambodia.unfpa.org/en/publications/national-strategy-reproductive-and-sexual-health-cambodia-2017-2020> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹⁴⁶ Ministry of Women's Affairs of Cambodia (2014) Guidelines for Legal Protection of Women's and Children's Rights in Cambodia. 以下にて入手可能: https://asset.cambodia.gov.kh/mowa/2023/06/3_1_En_Guidelines_Legal_Protection_Women_Children_Rights_in_Cambodia.pdf [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹⁴⁷ Stankovits, Elizabeth (2020)

¹⁴⁸ Anisa (2025) "We Are the Backbone, But We Carry the Burden": Cambodian Garment Workers and the Fight for Dignity, Focus on the Global South. 以下にて入手可能: <https://focusweb.org/we-are-the-backbone-but-we-carry-the-burden-cambodian-garment-workers-and-the-fight-for-dignity/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。

¹⁴⁹ Hennings, Anne (2018) "The dark underbelly of land struggles: the instrumentalization of female activism and emotional resistance in Cambodia". *Critical Asian Studies*, 51:1, 103-119.

¹⁵⁰ Ibid.

¹⁵¹ Brickell, Katherine (2014) "The Whole World Is Watching": Intimate Geopolitics of Forced Eviction and Women's Activism in Cambodia." *Annals of the Association of American Geographers*, 104:6, 1256-1272.

- ¹⁵² Brickell, Katherine (2013) Cambodia's women activists are redefining the housewife, *The Guardian*. 以下にて入手可能: <https://www.theguardian.com/commentisfree/2013/apr/02/cambodia-activists-housewife> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁵³ Kelliher, Fiona (2022) The Friday Wives: how a quiet picket grew to push for change in Cambodia, *The Guardian*. 以下にて入手可能: <https://www.theguardian.com/commentisfree/2013/apr/02/cambodia-activists-housewife> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁵⁴ Metcalfe, Beverly, Rees, Chris and Rodriguez, Jenny (2010) "The construction of gender identities in public sector organisations in Latin America: A view of the Dominican Republic," *Equality, Diversity and Inclusion: An International Journal*, 29:1,): 53-77.
- ¹⁵⁵ ISOQuito (2022) La Desigualdad de Género en América Latina y el Caribe 2020-2022. 以下にて入手可能: [https://lac.unwomen.org/sites/default/files/2022-12/Infografia%20Ranking ISOQuito 2020-2022 v01.pdf](https://lac.unwomen.org/sites/default/files/2022-12/Infografia%20Ranking%20ISOQuito%202020-2022_v01.pdf) [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁵⁶ López-Hornickel, Natalia and Sandoval-Hernández, Andrés (2023) "Perfiles de actitudes hacia la equidad de género entre adolescentes latinoamericanos," *Pensamiento Educativo*, 60:2.
- ¹⁵⁷ Metcalfe, Beverly, Rees, Chris and Rodriguez, Jenny (2010)
- ¹⁵⁸ Gideon, Jasmine and Engle, Olivia (2022) "Attitudes to adolescent pregnancy among families in the Dominican Republic and El Salvador: insights from a longitudinal study," *Culture, Health & Sexuality*, 25:9, 1116-1130.
- ¹⁵⁹ Ibid.
- ¹⁶⁰ Gender Equality Observatory for Latin America and the Caribbean (n.d.) Indicators. 以下にて入手可能: <https://oig.cepal.org/en/indicators/femicide-or-feminicide> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁶¹ ONE (2023) ONE informa los primeros resultados preliminares del X Censo Nacional de Población y Vivienda. 以下にて入手可能: <https://www.one.gob.do/noticias/2023/one-informa-los-primeros-resultados-preliminares-del-x-censo-nacional-de-poblacion-y-vivienda/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁶² UNFPA (2021) Breve Encuesta Nacional de Autopercepción Racial y Étnica en República Dominicana. 以下にて入手可能: https://dominicanrepublic.unfpa.org/sites/default/files/pub-pdf/encuesta_nacional_de_autopercepcion_racial_y_etica_en_rd_100322.pdf [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁶³ Robinson, Nancy (2006) "Women's Political Participation in the Dominican Republic: The Case of the Mirabal Sisters," *Caribbean Quarterly*, 52:2-3, 172-183.
- ¹⁶⁴ Ibid.
- ¹⁶⁵ Ni Una Menos (n.d.) Quiénes Somos. 以下にて入手可能: <https://niunamenos.org.ar/quienes-somos/carta-organica/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁶⁶ ISOQuito (2022)
- ¹⁶⁷ Thompson, Randal Joy and Figueroa, Sofia (2020) "#MeToo and LGBTQ+ Salvadorans: social and leadership challenges," *Gender in Management: An International Journal*, 35:4, 373-389.
- ¹⁶⁸ Gender Equality Observatory for Latin America and the Caribbean (n.d.)
- ¹⁶⁹ Navarro-Pérez, José Javier and Martínez-Reyes, Alberto (2020) "Obstáculos para el logro de los ODS en El Salvador. Políticas de juventud, jóvenes pandilleros y las ONG: un análisis complejo," *Revista Iberoamericana De Estudios De Desarrollo = Iberoamerican Journal of Development Studies*, 9:1, 28-51.
- ¹⁷⁰ Zulver, Julia (2016) "High-risk feminism in El Salvador: women's mobilisation in violent times," *Gender & Development*, 24:2, 171-185.
- ¹⁷¹ Walsh, Shannon Drysdale and Menjivar, Cecilia (2016) "Impunity and multisided violence in the lives of Latin American women: El Salvador in comparative perspective," *Current Sociology*, 64:4, 586-602.
- ¹⁷² Hume, Mo (2007) "'(Young) Men with Big Guns': Reflexive Encounters with Violence and Youth in El Salvador," *Bulletin of Latin American Research*, 26:4, 480-496.
- ¹⁷³ World Bank (2022) Población, total - El Salvador, Databank. 以下にて入手可能: <https://datos.bancomundial.org/indicador/SP.POP.TOTL?locations=SV> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁷⁴ Committee on the Elimination of Racial Discrimination (2005) Thirteenth periodic reports of States parties due in 2004 - Addendum, El Salvador. 以下にて入手可能: http://www.bayefsky.com/reports/elsalvador_cerd_c_471_add_1_2005_sp.pdf [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁷⁵ Central Reserve Bank (2024) Portal Geoestadístico Resultados del Censo de Población y Vivienda 2024. 以下にて入手可能: <https://geoportal.bcr.gob.sv/> [最終アクセス日: 2025年10月8日]。
- ¹⁷⁶ The Guardian (2023) The Guardian view on El Salvador's crime crackdown: a short-term, high cost fix, Editorial. 以下にて入手可能: <https://www.theguardian.com/commentisfree/2023/jul/02/the-guardian-view-on-el-salvadors-crackdown-a-short-term-high-cost-fix> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁷⁷ Thompson, Randal Joy and Figueroa, Sofia (2020)
- ¹⁷⁸ Zulver, Julia (2016)
- ¹⁷⁹ The Guardian (2023)
- ¹⁸⁰ IACHR (2023) IACHR Calls on El Salvador to Reestablish Rights and Guarantees Suspended a Year Ago Under the State of Emergency. 以下にて入手可能: https://www.oas.org/en/iachr/jsForm/?File=en/iachr/media_center/preleases/2023/058.asp [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁸¹ Zulver, Julia (2016)
- ¹⁸² Ni Una Menos (n.d.)
- ¹⁸³ Navas, Maria Candelaria (2017) "Los nuevos movimientos sociales y el movimiento de mujeres en El Salvador," *Realidad, Revista De Ciencias Sociales Y Humanidades*, (113, 363-375.

- ¹⁸⁴ Center for Women's Resources (2025) Women's Political Participation Survey.以下にて入手可能: <https://centerforwomensresources.org/wp-content/uploads/2025/05/WPP-2025-Survey-Results.pdf> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁸⁵ Cudis, Christine (2019) List of laws protecting women in PH.以下にて入手可能: <https://www.pna.gov.ph/articles/1063739> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁸⁶ Davis, Leonard (1989) *Revolutionary Struggle in the Philippines*, Macmillan.
- ¹⁸⁷ Brysk, Alison and Faust, Jesilyn (2020) "Women's Rights in the Philippines in an Era of Authoritarianism," *Global Dynamics of Authoritarianism*, 13;38.
- ¹⁸⁸ Center for Women's Resources (2023) Filipino women mired in gender equality and human rights setbacks despite CEDAW commitment - women's think tank.以下にて入手可能: <https://centerforwomensresources.org/blog/2023/10/11/filipino-women-mired-in-gender-equality-and-human-rights-setbacks-despite-cedaw-commitment-womens-think-tank/> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁸⁹ Brysk, Alison and Faust, Jesilyn (2020)
- ¹⁹⁰ Youth Advocates for Climate Action Philippines (2022). 2021 Year-End Report.以下にて入手可能: <https://yacaporg.files.wordpress.com/2022/01/yacap-year-end-report-2021.pdf> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁹¹ Plan International (2023) 2023 State of the World's Girls Report: Facts from the Philippines.以下にて入手可能: <https://plan-international.org/uploads/sites/25/2023/10/SOTWG-2023-Facts-from-the-Philippines.pdf> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁹² Affoum, Nelsy and Dry, Marie (2022) Reforming Discriminatory Laws to Empower Women in Togo, *World Bank Group*.以下にて入手可能: <https://documents1.worldbank.org/curated/en/099527109292258758/pdf/IDU0294c15ca02d3a04a8f08846021668035ffc8.pdf> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁹³ Ibid.
- ¹⁹⁴ Pettinotti, Laetitia and Raga, Sherillyn (2023) Gender equality in Togo, Contextualising Togo's progress on gender equality, *ODI Policy Brief*. London:ODI.
- ¹⁹⁵ UN Women (n.d.) Togo, Women Count Data Hub.以下にて入手可能: <https://data.unwomen.org/country/togo> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁹⁶ Muller, Miriam and Van Damme Jozefien (2024) Celebrate Both: the Road Already Travelled and the One Ahead to Empower Women and Girls in Togo, *World Bank Blogs*.以下にて入手可能: <https://blogs.worldbank.org/en/nasikiliza/celebrate-both-road-already-traveled-and-one-ahead-empower-women-and-girls-togo> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ¹⁹⁷ Ibid.
- ¹⁹⁸ Ibid.
- ¹⁹⁹ Pettinotti, Laetitia and Raga, Sherillyn (2023)
- ²⁰⁰ Decalo, Samuel and Hubert, Jules (2023) History of Togo.以下にて入手可能: <https://www.britannica.com/topic/history-of-Togo> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ²⁰¹ Mexico Historico (n.d.) Empowering Women in Togo: Political Milestones and Challenges.以下にて入手可能: <https://www.mexicohistorico.com/paginas/empowering-women-in-togo-political-milestones-and-challenges-e69f092f.html> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ²⁰² Goeh-Akue, Adovi and Tchintchan, Soalinane (2024) Women in Togo. *Oxford Research Encyclopedia of African History*.
- ²⁰³ Decalo, Samuel and Hubert, Jules (2023)
- ²⁰⁴ Mexico Historico (n.d.)
- ²⁰⁵ Goeh-Akue, Adovi and Tchintchan, Soalinane (2024)
- ²⁰⁶ Freedom House (2013) Freedom in the World 2013 - Togo.以下にて入手可能: <https://www.refworld.org/reference/annualreport/freehou/2013/en/41126> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ²⁰⁷ Affoum, Nelsy and Dry, Marie (2022)
- ²⁰⁸ Pettinotti, Laetitia and Raga, Sherillyn (2023)
- ²⁰⁹ World Bank (2025) Togo, World Bank Gender Data Portal.以下にて入手可能: <https://genderdata.worldbank.org/en/economies/togo> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ²¹⁰ Wong, Dwayne (2017) Women in Togo's Revolution and the Global African Revolution, *Huffpost*.以下にて入手可能: https://www.huffpost.com/entry/women-in-togos-revolution-and-the-global-african-revolution_b_5a13756ae4b010527d677fc0 [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ²¹¹ Matcheri, Abdou-Rachidou and Mawuvi, Adjavou (2025) Recognising women's land rights in Togo: a glimmer of hope, *International Institute for Environment and Development*.以下にて入手可能: <https://www.ied.org/recognising-womens-land-rights-togo-glimmer-hope> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ²¹² Welfare Togo (2018) Women introduce new climate-adapted fishing technique on Lake Togo and gain foot in a male dominated sector, Women & Gender Constituency.以下にて入手可能: https://womensgenderclimate.org/gjc_solutions/women-introduce-new-climate-adapted-fishing-technique-on-lake-togo-and-gain-foot-in-a-male-dominated-sector/ [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- ²¹³ Matcheri, Abdou-Rachidou and Mawuvi, Adjavou (2025)
- ²¹⁴ Bantebya, Grace Kyomuhendo, Muhanguzi, Florence Kyoheirwe and Watson, Carol (2018) "From National Laws and Policies to Local Programmes: Obstacles and opportunities in communications for adolescent girls' empowerment in Uganda," in Caroline Harper, Nicola Jones, Anita Ghimire, Rachel Marcus and Grace Kyomuhendo Bantebya (eds) *Empowering Adolescent Girls in Development Countries: Gender Justice and Norm Change*, Routledge, 103-119, p.103.

- 215 Bantebya et al. (2018), p.103.
- 216 Muhanguzi, Florence Kyoheirwe, Benett, Jane and Muhanguzi, Hosea R. D. Muhanguzi (2011) "The Construction and Mediation of Sexuality and Gender Relations: Experiences of girls and boys in secondary schools in Uganda," *Feminist Formations*, 23:3, 135-152.
- 217 Ninsiima, Anna B., Leye, Els, Michielsen, Kristien, Kemigisha, Elizabeth, Nyakato, Viola N. and Coene, Gily (2018) "Girls Have More Challenges; They Need to Be Locked Up": A qualitative study of gender norms and the sexuality of young adolescents in Uganda," *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 15, 193-208, p. 196.
- 218 Watson, Carol, Bantebya, Grace Kyomuhendo and Muhanguzi, Florence Kyoheirwe Muhanguzi (2018) "The Paradox of Change and Continuity in Social Norms and Practices Affecting Adolescent Girls' Capabilities and Transitions to Adulthood in Rural Uganda," in Caroline Harper, Nicola Jones, Anita Ghimire, Rachel Marcus and Grace Kyomuhendo Bantebya (eds) *Empowering Adolescent Girls in Development Countries: Gender Justice and Norm Change*, Routledge, 83-101, p.90.
- 219 Lovell, Natasha (2010) "Life Experiences and Expectations of Young Women in Uganda," *Journal of Health Organisation and Management*, 24:5, 505-511, p.506.
- 220 Bantebya, Grace Kyomuhendo, Muhanguzi, Florence Kyoheirwe and Watson, Carol (2013) Adolescent Girls and Gender Justice: Understanding key capability domains in Uganda. ODI report. 以下にて入手可能: <https://media.odi.org/documents/8822.pdf>, p.24 [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 221 Bantebya et al., (2013), pp.32-34.
- 222 Datzberger, Simone and Le Mat, Marielle L. J. Le Mat (2018) "Just Add Women and Stir? Education, gender and peacebuilding in Uganda," *International Journal of Educational Development*, 59, 61-69, p.65.
- 223 Watson et al., (2018), p.87.
- 224 Chantelojs-Kashal, Heather, Apenem Dagadu, Nana and Gardsbane, Diane (2020) "Contested Femininity: Strategies of resistance and reproduction across adolescence in northern Uganda," *Culture, Health and Sexuality*, 22:1, 80-95.
- 225 Loveday, Lilli, Rivett, Jenny and Walters, Rosie (2023) "Understanding Girls' Everyday Acts of Resistance: Evidence from a longitudinal study in nine countries," *International Feminist Journal of Politics*, 25:2, 244-265, p.253
- 226 McQuaid, Katie, Vanderbeck, Robert and Mbabazi, Lillian (2021) "Girls Have Powers': Using research-led arts to connect policymaking with girls' lived experiences in Uganda," *Gender, Place and Culture*, 28:5, 605-626, p.611.
- 227 Palattiyil, George et al (2022) "How to Live a Good Life': Self-managing reproductive health for adolescent refugees in Kampala," *Conflict and Society: Advances in Research*, 8, 38-56.
- 228 UNFPA (2022) The Magnitude of Teenage Pregnancy in Uganda, Issue Brief 19. 以下にて入手可能: https://uganda.unfpa.org/sites/default/files/pub-pdf/issue_brief_19_cost_of_inaction_on_teenage_pregnancy_print_ready_final_8.4_2022.pdf, p. 1 [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 229 Tamale, Sylvia (2016) "Controlling Women's Fertility in Uganda," *Sur International Journal of Human Rights*, 13:24, p.119.
- 230 Opollo, Alaka D. and Katende, Moses (2017) "The Use of Contraceptive in Uganda: An analysis of access and rights among adolescents," *Childhood in Africa*, 4:1, 45-56, p.50.
- 231 Watson et al (2018), p.91.
- 232 The Republic of Uganda (2022) The National Strategy to End Child Marriage and Teenage Pregnancy. 以下にて入手可能: <https://www.unicef.org/uganda/media/13666/file/National%20Strategy%20to%20end%20Child%20marriage%20and%20Teenage%20Pregnancy%202022-2027.pdf>, p.ii [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 233 Kanya, Sarah (2017) "Human Rights Abuse and Deprivation of Childhood: A case of girl mothers in Northern Uganda," in David Kaawa-Mafigiri and Eddy Joshua Walakira (eds) *Child Abuse and Neglect in Uganda*, Springer, 227-249, p.228.
- 234 Decker, Alicia (2014) *In Idi Amin's Shadow: Women, Gender and Militarism in Uganda*, Athens, Ohio: Ohio University Press, p.69 & p.199.
- 235 Tripp, Aili Mari (2004) "Women's Movements, Customary Law, and Land Rights in Africa: The case of Uganda," *African Studies Quarterly*, 7:4, 1-19, p.14.
- 236 Ossome, Lyn (2021) "Pedagogies of Feminist Resistance: Agrarian movements in Africa," *Agrarian South: Journal of Political Economy*, 10:1, 41-58, pp.46-7, 49-50.
- 237 Tripp, Aili Mari (2001) "Women's Mobilisation in Uganda: Nonracial ideologies in European-African-Asian encounters, 1945-1962," *The International Journal of African Historical Studies*, 34:3, 543-564, p.544.
- 238 Bantebya et al. (2013), p.14.
- 239 Moore, Erin V. (2024) "Teaching Aspirant Feminism to Girls in Development: A view from urban Uganda", in Heather Switzer, Karishma Desai and Emily Bent (eds) *Girls in Global Development: Figurations of Gendered Power*, Berghahn Books, 57-76, p.62.
- 240 Chigudu, Simukai (2016) "The Social Imaginaries of Women's Peace Activism in Northern Uganda," *International Feminist Journal of Politics*, 18:1, 19-38, p.31.
- 241 Equal Measures 2030 (2024) Explore the data. 以下にて入手可能: <https://equalmeasures2030.org/2024-sdg-gender-index/explore-the-data/> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 242 Ibid.

- 243 UN Women (n.d.) Viet Nam. 以下にて入手可能: <https://asiapacific.unwomen.org/en/focus-areas/cedaw-human-rights/viet-nam> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 244 University of Chicago Law School (2017) Vietnam: A Briefing On Gender And The Constitution, UN Women Constitution. 以下にて入手可能: <https://constitutions.unwomen.org/sites/default/files/2023-03/ihrcc%20uchicago%20%20briefing%20on%20vietnam%20%2020917.pdf> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 245 UNDP (2013) The Women's Access to Land in Contemporary Vietnam. 以下にて入手可能: www.undp.org/sites/g/files/zskgk326/files/migration/vn/Women-access-to-land_EN.pdf [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 246 Nguyen-Thi-Hoai, Chau (2024) "Ancestor Worship in Contemporary Vietnam: A Study of Filial Piety," *The International Journal of Religion and Spirituality in Society*, 15:2, 113-307.
- 247 Khuat, Thu, et al. (2011) "Son Preference in Vietnam: Ancient Desires, Advancing Technologies," UNFPA.
- 248 UNDP (2013)
- 249 Ibid.
- 250 UN Women (2021) Country Gender Equality Profile -Viet Nam. 以下にて入手可能: https://www.ilo.org/sites/default/files/wcmsp5/groups/public/@asia/@ro-bangkok/@ilo-hanoi/documents/publication/wcms_825087.pdf [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 251 UN Women (2016) Discussion Paper: Unpaid Care And Domestic Work: Issues And Suggestions For Viet Nam. 以下にて入手可能: <https://asiapacific.unwomen.org/sites/default/files/Field%20Office%20ESEA/Docs/Publications/2017/01/Unpaid-Care-and-Domestic-Work-EN.pdf> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 252 UN Women (2021)
- 253 Ibid.
- 254 UN Women (2016)
- 255 UN Women (2021)
- 256 Duong, Thuy Trong, Oke, Nicole and Baker, Alison (2024) "Women workers and the contestation of gender roles in Vietnam's new rural factories," *Journal of Gender Studies*, 33:7, 891-901.
- 257 Ibid.
- 258 Ngan Ha, Ngo (2020) "Household Budget Management and Decision-Making in the Family in the Red River Delta, Vietnam," *Vietnam Journal of Family and Gender Studies*, 14:2, 17-29.
- 259 UNDP (2022) Women's political participation and innovations key Viet Nam's sustainable and inclusive development. 以下にて入手可能: <https://www.undp.org/vietnam/press-releases/womens-political-participation-and-innovations-key-viet-nams-sustainable-and-inclusive-development> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 260 UN Women (2021)
- 261 Ibid.
- 262 Khanh Chi, Hoang et al. (2021) "The Content and Implementation of Policies and Programs on Adolescent Sexual and Reproductive Health in Vietnam: Results and Challenges," *Health services insights*, 14.
- 263 UNFPA (2025) Sexual and Reproductive Health Rights. 以下にて入手可能: <https://vietnam.unfpa.org/en/topics/sexual-reproductive-health-and-rights> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 264 Ibid.
- 265 Nguyen, Huyen Thi Hoa, et al. (2025) "Sexual and reproductive health in a Vietnamese mountainous area: a qualitative analysis of current community and institutional health education," *Sex Education*, 1-14.
- 266 World Bank (2025) Proportion of women who have ever experienced intimate partner violence (% of ever-partnered women ages 15-49), World Bank Gender Data Portal. 以下にて入手可能: <https://genderdata.worldbank.org/en/indicator/sq-vaw-ipve-zs> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 267 MOLISA, GSO and UNFPA (2020), Results of the National Study on Violence against Women in Viet Nam 2019 - Journey for Change.
- 268 Ibid.
- 269 UNICEF (2022) MICS-EAGLE Viet Nam Education Fact Sheets. UNICEF Viet Nam.
- 270 Ibid.
- 271 Syunnerberg, Maxim and Marchenko, Evgenia (2017) "Symbolic heroines of the two resistance wars of independent Vietnam (1945—1975)" in Vladimir Mazyrin, Evgeny Kobelev, and Nguyen Quoc Hung (eds.) *Russian Scholars on Vietnam Selected Papers Volume 2*, Moscow: Forum Publishing House, 163-180. p.163.
- 272 Cornell University Press (n.d.) Vietnamese women, Privilege, and Persistence. 以下にて入手可能: <https://www.cornellpress.cornell.edu/vietnamese-women-privilege-and-persistence/> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 273 Quy, Ngyuen Kim (2025) Unsung heroines of Vietnam's resistance war. 以下にて入手可能: <https://asianews.network/unsung-heroines-of-vietnams-resistance-war/> [最終アクセス日: 2025年10月9日]。
- 274 Yu, Insun (1999) "Bilateral social pattern and the status of women in traditional Vietnam," *South East Asia Research*, 7:2, 215-231.
- 275 Nguyen, An Thuy (2018) "The Vietnam Women's Movement for the Right to Live: a non-communist opposition movement to the American war in Vietnam," *Critical Asian Studies*, 51:1, 75-102.
- 276 Tran, Angie Ngoc (2008). "Contesting "Flexibility": Networks of Place, Gender, and Class in Vietnamese Workers' Resistance". In Joseph Nevins & Nancy Lee Peluso (Eds.), *Taking Southeast Asia to Market: Commodities, Nature, and People in the Neoliberal Age*, Ithaca, NY: Cornell University Press, 56-72.